

2023 年 10 月

食料安全保障月報

(第 28 号)



令和 5 年 10 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2023 年 10 月食料安全保障月報（第 28 号）

目 次

概要編

I	2023 年 10 月の主な動き	1
II	2023 年 10 月の穀物等の国際価格の動向	5
III	2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント	5
IV	2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	5
V	今月の注目情報「ウクライナの穀物輸出と EU への影響」	6

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 0
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 1
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 2
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 4
5	食品小売価格の動向	1 8
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	1 9
7	FAO 食料価格指数	2 1

今月のコラム

	「インドの食料事情（1）：農業構造」	2 2
--	--------------------	-----

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2023/24 年度の生産量は前月予測に比べ 2.1 百万トン上方修正
	＜カナダ＞	2023/24 年度の生産量(AAFC)は前年度に比べ 13.1%減
	＜豪州＞	2023/24 年度の生産量は前年度比 38.3%減の 24.5 百万トン
	＜EU27＞	2023/24 年度の生産量は過去 5 年平均を上回る 133.4 百万トン
	＜中国＞	2023/24 年度の生産量は、137.0 百万トンと史上 2 番目
	＜ロシア＞	2023/24 年度の輸出量は史上最高の 50.0 百万トン
	＜ウクライナ＞	2024/25 年度の冬小麦の播種が開始されたものの、乾燥の懸念
2	とうもろこし	9
	＜米国＞	生産量が上方修正され、史上 3 番目の豊作見通し
	＜ブラジル＞	2023/24 年度の生産量は大豆等への転換により減少
	＜アルゼンチン＞	2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し
	＜中国＞	主産地の降雨過多の影響を受けるも、生産量は史上 2 番目
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の生産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 33.5%減
3	コメ	1 5
	＜米国＞	2023/24 年度の生産量は収穫面積・単収の増加で前年度比 37.5%増
	＜インド＞	カリフ米の作付面積増加も、単収低下で減産見通し

- <中国> 一期作稲で収穫開始、南部の二期作晩稲の成熟は平年並み
- <タイ> 雨季米は干ばつで作付面積が前年度より減少、生育状況も不良
- <ベトナム> 北部の雨季米は収穫開始、南部の夏秋作（雨季米）は収穫終了

II 油糧種子

- 大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 1
- <米国> 単収の引下げを受け、生産量は 1.1 百万トン下方修正
- <ブラジル> 2023/24 年度の生産量(CONAB)は前年度より 4.8%増で史上最高
- <アルゼンチン> 2022/23 年度は、干ばつによる減産を受け輸入が史上最高に
- <中国> 2023/24 年度の生産量・消費量は史上最高
- <カナダ> 作付面積の増加により、生産量は前年度から 2.7%増

- (参考 1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2023/24 年度)・・・ 2 7
- (参考 2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7
- (参考 3) 各国のクロップカレンダー一覧（主要品目毎）・・・・・・ 2 8

【利用上の注意】

表紙写真：収穫期を迎えたとうもろこし（米国・ネブラスカ州、10 月 3 日）
 9 月からとうもろこしと大豆の収穫を実施
 スコット・ヒンリクス氏撮影

(概要編)

I 2023 年 10 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2023/24 年度の作況について、北半球ではとうもろこしや大豆等の作物が成熟期から収穫期を迎えている一方、南米ではとうもろこし等が作付期を迎えている。

品目別にみると、10 月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、前年度高温乾燥の被害を受けたインドや米国等で増産となるものの、前年度史上最高の豊作だった豪州やロシア等で減産となり、世界の生産量は前年度を下回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、前年 3 月には過去最高を更新した小麦の国際相場も侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナの穀物輸出に関する 4 者合意については 7 月 17 日にロシアが離脱を表明。EU 経由での代替輸出の進捗も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ブラジル等で減産となるものの、米国や EU 等で増産となり、世界の生産量は前年度を上回る見通し。大豆については、米国で減産となるものの、現在作付けが行われている南米で増産となり、世界全体の生産量は前年度を上回る見通し。いずれの品目も、旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況の中で、エルニーニョ等の天候の影響を受け生産量が下方修正されており、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、8 月の 121.6 から、9 月（最新値）は 121.5 に下落（参考：2022 年 9 月 136.0、2021 年 9 月 129.2、2020 年 9 月 98.0）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近 5 カ年の平均値より約 2 割高い水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、**2023 年 10 月も引き続き適用。**

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の10月見通しによれば、2023/24年度の小麦は収穫が終了し、生産量は、前月から変わらず2,250万トン（対前年度比4.7%増）。とうもろこしは収穫期を迎え、生産量は前月から変わらず2,800万トン（同3.7%増）。輸出量は黒海穀物イニシアティブの停止の影響はあるものの、小麦、とうもろこしとも前月から変わらずそれぞれ1,100万トン（同36%減）、1,950万トン（同28%減）（参考1）。

一方、ウクライナ農業政策食料省の8月10日時点の予測によると、2023/24年度の穀物・油糧種子の生産量は天候に恵まれ7,670万トンと、2022/23年度比で1%増となる見通し。他方で、ロシア侵攻以前において過去最高だった2021/22年度（1億600万トン）と比較すると28%減。

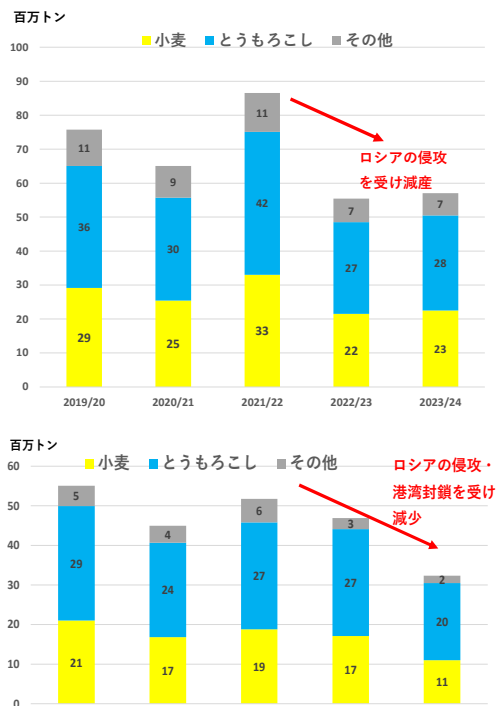
ウクライナ農業政策食料省によれば、2023年10月13日時点で小麦は収穫が終了し、2,221万トン収穫済みで、とうもろこしは収穫期を迎え、同日時点で585万トンである。

黒海穀物イニシアティブ停止後の動向（7月17日にロシア離脱で停止）

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意により、これまで穀物等3,283万トンが輸出された。他方で、2023年7月17日にロシアの離脱で停止し、その後、再開の目途は依然として立っていない。

一方、代替輸出ルートとして、ドナウ川沿いの運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。その他のルートについても港湾整備等が開始されているが、内陸の輸送コストが高い等の課題もあり、4者合意の下での輸出量全てを代替することは現実として難しい状況となっている。

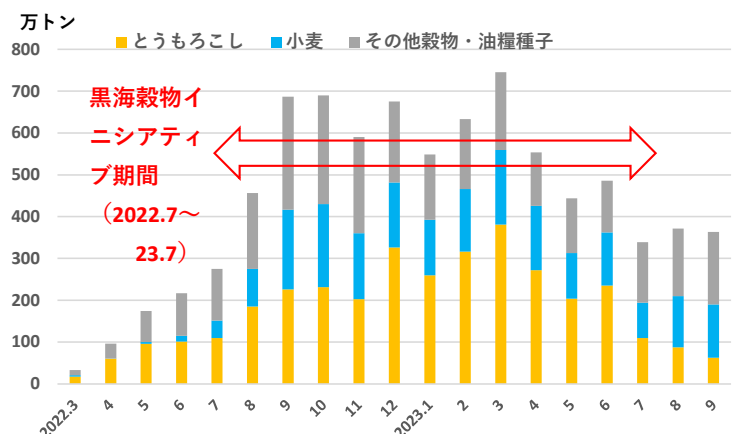
（参考1）小麦ととうもろこしの生産量（上）、輸出量（下）の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.10）

注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022.8～23.9）



出典：現地調査会社調べ

注：その他はひまわり油・大麦など。

1 EU はウクライナ産穀物の輸入規制を解除も一部の東欧諸国は反発

「黒海穀物イニシアティブ」は、7月17日にロシアが履行停止を表明。それ以降、ロシア側は、イニシアティブと同時に締結された「ロシア産の食品及び肥料の世界市場への展開についての協力に係るロシア連邦と国連事務局の間の相互理解に関するメモランダム」にある輸出への障害の除去が履行されていないとの従来の立場を繰り返してきた。7月にはプーチン大統領が、2.5万トンから5万トンの穀物無償供給をブルキナファソ、中央アフリカ、エリトリア、マリ、ソマリア、ジンバブエ向けに無償で送付することに同意したと公表した。また、ロシアのパトルシェフ農相は10月上旬に、今後1か月半以内には、アフリカの数か国へ無償で小麦の提供を開始する予定と発言した。しかし、ロシアの同イニシアティブへの復帰については進展がみられない。

一方、ウクライナは、ルーマニアとの国境に面したドナウ川沿いの港からの出荷や、EU経由の陸路等による代替輸出ルート of 拡充を試みている。しかし、ロシアの攻撃がドナウ川沿いの穀物輸出施設まで及んでいるほか、鉄道の軌道幅がウクライナとEUで異なる等のインフラの制約もある。なお、EUによる東欧5か国向けのウクライナ産穀物輸入禁止については9月15日以降解除されたが、ポーランド、ハンガリー、スロバキアは独自に輸入を規制している。一方、ルーマニアは10月13日、在庫の積み増しなどに限定しウクライナ産穀物の輸入を許可することとなった。ただし、同イニシアティブ実施期間中の3,283万トン（2022年8月～2023年7月）全てを代替することは難しいとみられる。

※黒海穀物イニシアティブ停止後、代替輸出ルートとして、以下に掲げるものが実施又は検討されている。（France Agrimer 他より）

- 1 トラックや鉄道輸送、ドナウ川の運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港経由で輸出
⇒ウクライナ・モルドバ・ルーマニアに輸出回廊が完成予定
- 2 ポーランドを経由し、バルト海沿いのグダニスク港、ラトビアのリガ港等経由で輸出
⇒グダニスク港をウクライナ産穀物輸出向け港湾として整備することに合意。
ラトビア・リガ港にウクライナ産菜種到着
- 3 クロアチアを経由し、アドリア海から輸出



2 ブラジルの 2023/24 年度の大豆生産量増加、とうもろこし生産量減少

ブラジル食料供給公社（CONAB）が公表した穀物見通し（2023. 10. 10）によれば、2023/24 年度の大豆及び大豆等油糧種子の作付けが開始され、生産量は、前年度比で 1. 5%減（499 万トン減）の 3 億 1, 746 万トンの見通し。作付面積は前年度より 0. 3%増加するものの、天候に恵まれ単収が高かった前年度より単収が 1. 9%低下することが減産の要因とみられる。

このうち、大豆については、好調な輸出を受けて、作付面積が 2. 5%増加し、単収も増加することから、生産量は前年度比 4. 8%増の 1 億 6, 200 万トンと史上最高を更新する見通し。大豆の作付けは既に開始され、10 月 13 日時点で、主産地のマツトグロッソ州で作付け進捗率が 35%と、前年同期（41%）よりは遅れているものの過去 5 年平均（28%）を上回るペース。

一方、とうもろこしについては、市場価格が大豆と比べて低いため、大豆への作付け転換等の事情を受けて前年度より作付面積が 4. 8%減少し、単収も低下することから、生産量は過去最高の前年度比 9. 5%減の 1 億 1, 940 万トンの見通し。なお、生産量の 8 割近くを占める冬とうもろこしは、大豆の収穫後の来年 2 月以降に作付けされる。

3 米国の小麦生産量が上方修正され、大幅に増加

米国農務省の 10 月の需給報告によれば、2023/24 年度の小麦については、収穫はほぼ終了。生産量については、デュラム小麦は対前年度比 7 %減の 161 万トンと減産も、その他の春小麦は 5 %増の 1, 374 万トン、13%増の冬小麦は 3, 396 万トンとなり、合計で前年度比 9. 8%増の 4, 931 万トンとなった。収穫面積の増加に加え、単収が前年度より増加したことが要因とみられる。なお、冬小麦は 2024/25 年度産の作付け期を迎え、10 月 15 日現在、進捗率は 68%と前年同期（67%）をやや上回るペース。

とうもろこしについては、現在、収穫期を迎えており、10 月 15 日現在、収穫進捗率は 45%と前年同期（43%）を上回るペース。生産量は、前年度比 9. 8%増の 3 億 8, 265 万トンの見通し。大豆等からの作付転換による収穫面積の増加が寄与しているとみられる。

一方、大豆については、とうもろこしと同様に、収穫期を迎えており、10 月 15 日現在、収穫進捗率は 62%と前年同期（60%）を上回るペースとなっている。他方、生産量は、前年度比 3. 9%減の 1 億 1, 170 万トンとなっており、収穫面積の減少が影響しているとみられる。

II 2023 年 10 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、9 月末、190 ドル/トン台後半で推移。10 月に入り、輸送時の機雷接触を受けての黒海からの輸出懸念等から 210 ドル/トン台前半に値を上げたものの、米国産への低調な輸出需要から 200 ドル/トン台半ばに値を下げた。その後、輸出需要の改善やインドの供給懸念等から値を上げ、10 月中旬現在、210 ドル/トン台半ばで推移。

とうもろこしは、9 月末、190 ドル/トン台前半で推移。10 月に入り、輸送時の機雷接触を受けての黒海からの輸出懸念等から 190 ドル/トン台半ばまで値を上げたものの、米国の収穫進展を受け 190 ドル/トン台前半まで値を下げた。その後、10 月の米国農務省需給報告での米国産の生産量の下方修正、米国の輸出需要の改善等から値を上げたものの、収穫圧力を受けて値を下げ、10 月中旬現在、190 ドル/トン台半ばで推移。

コメは、9 月末、620 ドル/トン台前後で推移。10 月に入り、インドの非バスマティ米の精米の輸出禁止措置（7 月 20 日～）に加え、ミャンマーの暫定的輸出規制（9 月 1 日～10 月 15 日）でタイ産米等への需要が集中し、価格が高騰したことによる需要停滞やバーツ安等から値を下げ、10 月中旬現在、590 ドル/トン台後半で推移。

大豆は、9 月末、460 ドル/トン台後半で推移。10 月に入り、米国の収穫進展を受け 460 ドル/トン台前半までに値を下げた。その後、10 月の米国農務省需給報告での米国産の生産量の下方修正、米国の中国向け輸出成約が市場予想を上回ったこと等から値を上げ、10 月中旬現在、470 ドル/トン台後半で推移。

（注）小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より 1.8% 増の 27.96 億トン。消費量は、前年度より 0.9% 増の 27.99 億トン となり、3 年連続で生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率は前年度を下回り 27.3% となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前年度より、小麦で減少も、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、27.96 億トン の見込み。

消費量は、前年度より、小麦で減少も、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、27.99 億トン の見込み。

貿易量は、前年度より、とうもろこしで増加も、小麦、コメで減少し、穀物全体で減少し、4.94 億トン の見込み。

期末在庫量は、7.7 億トン と前年度より減少、期末在庫率は、前年度より減少する見込み。

（注：数値は 10 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による）

IV 2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.59 億トン。消費量は前年度を上回り 6.43 億トン となり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る 20.5% となる見込み。

（注：数値は 10 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による）

V 今月の注目情報：ウクライナの穀物輸出と EU への影響

黒海穀物イニシアティブがロシアの離脱により停止してから3か月が経過し、ウクライナはEU向け輸出（トランジット含む）に軸足を移さざるを得なくなった。一方、EUの東欧5か国向けウクライナ産穀物の輸入禁止は9月15日に解除されたが、一部の東欧諸国は反発している。なお、トランジットに関しては、ルーマニアへの輸出回廊が開通する予定であり、ポーランドのグダニスク港の整備も開始された。今後のウクライナ産穀物の輸出動向と世界の穀物貿易の影響についてまとめた。

注：文中の「2023/24 年度」等は穀物年度で、ウクライナの小麦は 2023 年 7 月から 2024 年 6 月。国や作物によって異なる（品目別需給編 P. 27 参照）。

1 ウクライナの穀物生産・輸出動向

(1) 生産動向

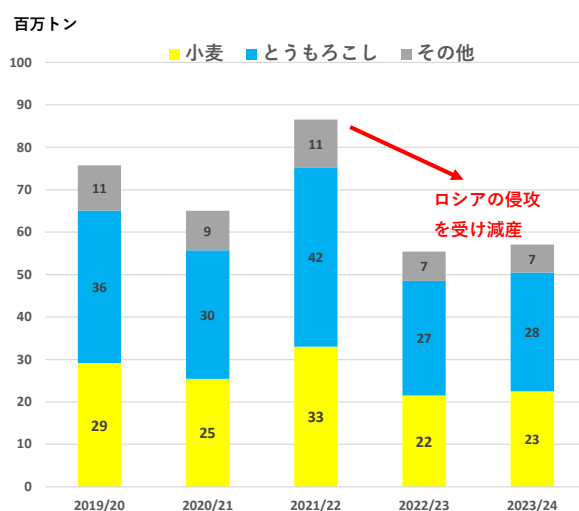
米国農務省（USDA）の 10 月需給見通しによれば、2023/24 年度の穀物の生産量は、前年度より収穫面積は減少するものの、天候に恵まれ単収が増加することから、前年度より 3 % 増の 5,707 万トンとなる見通し。ただし、ロシアの侵攻前の 2021/22 年度と比べ 34% 減産となる見通し。

このうち、小麦については、収穫は終了した。収穫面積が減少するものの、天候に恵まれ単収が増加することから、前年度より 5 % 増の 2,250 万トンの見通し。ただし、ロシアの侵攻前の 2021/22 年度と比べ 32% 減産となる見通し。なお、2024/25 年度の冬小麦については、ウクライナ農業政策食料省の 10 月 17 日報告によれば、作付け予定面積の 69% に当たる 302 万ヘクタールの作付けが終了している。

また、とうもろこしについては、収穫期を迎え、収穫面積は減少も、天候に恵まれ単収が増加することから、前年度より 4 % 増の 2,800 万トンの見通し。ただし、ロシアの侵攻前の 2021/22 年度と比べ 34% 減産となる見通し。

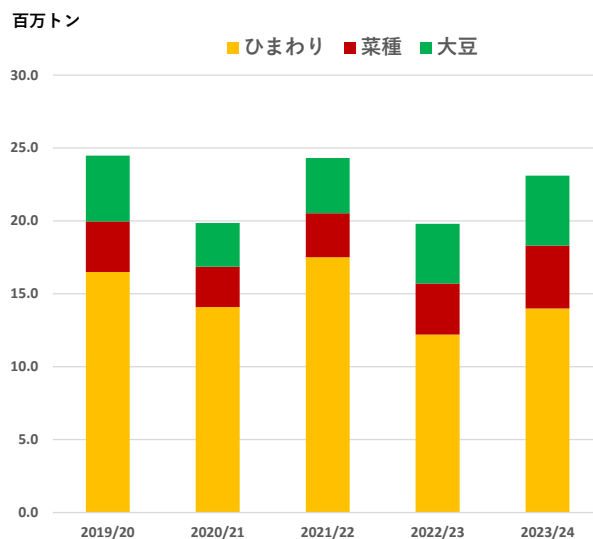
さらに、油糧種子については、前年度よりひまわり種、菜種、大豆とも増産で、特にウクライナ国産のひまわり種は前年度より 15% 増の 1,400 万トンの見通し。ただし、ロシア侵攻前の 2021/22 年度と比べ 20% 減となる見通し。一方、菜種は史上最高の 430 万トン、大豆も過去最高（2018/19 年度 483 万トン）に迫る 480 万トンの見通し。

図1 ウクライナの穀物生産量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2023.10）による。
その他は大麦など

図2 ウクライナの油糧種子生産量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2023.10）による

なお、ウクライナ国内の地域別でみると、ロシアの侵攻を受けた東部地域での生産動向は統計に含まれていないこともあり、当該東部地域を除くエリアでの生産が国全体としての増産に貢献したとみられる。収穫が終了した小麦では、特に南部のオデーサ州で前年度より36%増産となり、ウクライナ全体の生産量の1割にあたる225万トンとなっている。

(2) 輸出動向

輸出については、黒海穀物イニシアティブが開始された2022年8月からロシアが離脱する2023年7月17日までの間、合計3,283万トンの穀物輸出が行われた。同イニシアティブ停止以降は、ロシアの穀物輸出インフラへの攻撃を受けながらも、オデーサ港からルーマニア、ブルガリア領海を経て輸出するルートやEUの東欧諸国（ルーマニア等）を経由（トランジット）するルートでの輸出が行われている。

USDAの10月見通しによれば、2023/24年度の穀物輸出量は、ロシアの侵攻による影響に加え、黒海穀物イニシアティブの停止の影響を受け、穀物全体で3,237万トン（対前年度31%減）、うち小麦は1,100万トン（対前年度36%減）、とうもろこしは1,950万トン（対前年度28%減）と、いずれの品目とも前年度より減少する見通し。一方、油糧種子のうち特に菜種は史上最高の生産見通しから380万トン（対前年度11%増）、ひまわり油は560万トン（前年度並）となる一方、大豆は270万トン（対前年度13%減）の見通し。

2 東欧諸国への影響とトランジットを含めた対応の動向

(1) 生産動向

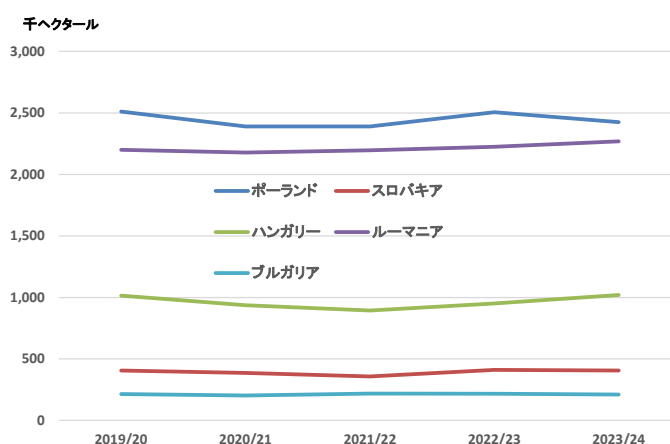
ウクライナ侵攻後における東欧5か国（ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア）の小麦やとうもろこしの作付け動向に関し、特にルーマニアにおいて2022/23年度及び2023/24年度のとうもろこしの収穫面積の減少、減産が目立っている。2022/23年度は、収穫面積は減少幅が小さく、ウクライナ産の影響というよりは干ばつの影響で減産となった。2023/24年度は増産となったものの、2021/22年度の水準までは回復していない。

一方、ポーランドにおけるとうもろこしの収穫面積は増加しており、生産量でルーマニアに並んだ。ポーランド国内の穀物価格の下落は、ウクライナ産の流入だけでなく、ポーランド本国における増産も要因とみられる。

(2) ウクライナ産穀物流入の影響

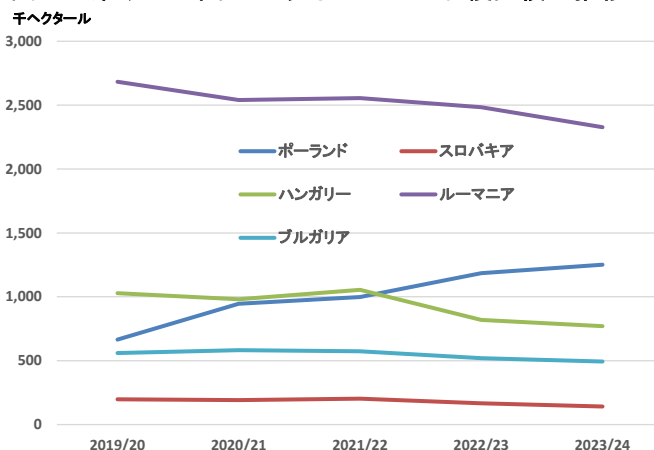
EUによる小麦やとうもろこし輸入の半分近くがウクライナ産ともいわれている。ロシアのウクライナ侵攻後は隣

図3 東欧5か国の小麦の収穫面積の推移



出典：欧州委員会資料（2023.9）による

図4 東欧5か国のとうもろこしの収穫面積の推移



出典：欧州委員会資料（2023.9）による

接する東欧諸国を經由して EU に入ってくることから、ウクライナ産穀物流入が、東欧諸国の穀物価格の下落に加え穀物輸送や備蓄インフラのひっ迫を招き、東欧産の穀物の集荷や販売に影響したとみられる。特に小規模農家の多いポーランドで生産者の反発が強く、EU がウクライナ産穀物の上記東欧 5 か国向け輸入禁止を解除した 9 月 15 日以降も、ポーランド、スロバキア及びハンガリーでウクライナ産の禁止措置を独自に継続している。これに対し、ウクライナは、輸出ライセンス方式で東欧諸国向け穀物輸出を管理することを提案した。

(3) 東欧等諸国の対応状況

ポーランドでは、ウクライナ産穀物の国内市場への流入に対する反発が強く、上記輸出ライセンス方式について、これから協議に入るかどうか検討している段階とみられる。一方、トランジットについては、バルト海に面したグダニスク港をウクライナ産農産物輸出の拠点とする整備計画に関し、10 月 9 日に農業投資企業とグダニスク港が合意した。

ハンガリーでは、ポーランド同様、輸出ライセンス方式について検討中とみられる。

ルーマニアでは、輸出ライセンス方式を受け入れる見通しである。また、ロシアのウクライナ侵攻以降、ウクライナ産穀物輸出の 6 割を担っていたトランジットに関し、ウクライナのゼレンスキー大統領は 10 月 10 日、ウクライナからモルドバを經由してルーマニアに至る穀物回廊が近日中に開通すると公表した。さらに、10 月 13 日には、在庫の積増しなどに限定しウクライナ産穀物の輸入を許可することとなった。

ブルガリアでは、上記輸出ライセンス方式についてウクライナ側と協議を行っていると思われる一方、ウクライナ産ひまわり種の輸入を禁止した。

他方で、スロバキアは、総選挙で親ロシア政権が誕生したことから、トランジットを含むウクライナ産穀物の取扱いについても、今後の動向を注視する必要がある。

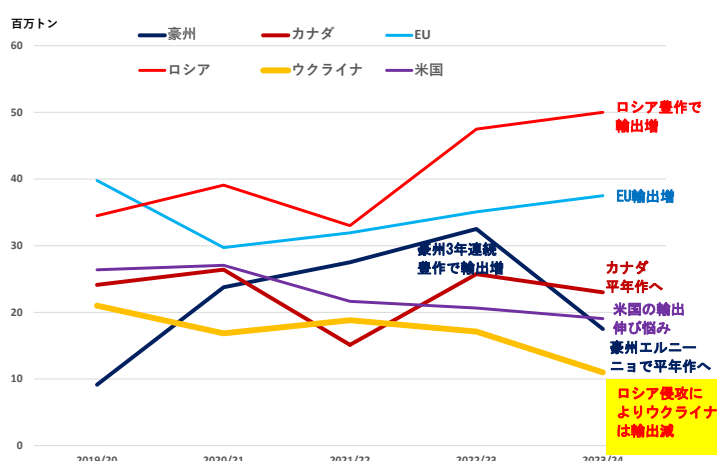
さらに、バルト三国のうちラトビアでは、9 月下旬にウクライナから積み出された菜種が 10 月中旬にバルト海沿いのリガ港に初めて到着し、輸出に振り向けられるが、リガ港に至るまでにポーランド、リトアニアを鉄道で経由したとみられる。

3 世界の穀物貿易への影響

(1) ロシアの穀物生産・輸出動向

USDA によれば、黒海穀物イニシアティブを離脱したロシアは、2023/24 年度の小麦生産に関し、過去最高だった前年度の 9,200 万トンよりは減少するものの、2 年連続で高水準の収穫量 (8,500 万トン) が見込まれている。小麦の輸出も好調で世界一の輸出シェアを引き続き維持し、2023/24 年は、前年度からの持ち越在庫を含めた潤沢な供給可能量から、史上最高の 5,000 万トンの輸出が見込まれている。輸出シェアについても年々増加し、2022/23 年度には 20%を上回り、2034/24 年度には 24%まで増加する見通し。

図 5 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2023.10) による

7月にはプーチン大統領が、2.5万トンから5万トンの穀物をブルキナファソ、中央アフリカ、エリトリア、マリ、ソマリア、ジンバブエ向けに無償で提供すると発言した。また、10月上旬のロシアのパトルシェフ農相の発言によれば、今後1か月半以内には、アフリカの数か国へ無償で穀物供給を開始する予定とのこと。こうしたロシアによる輸出が世界の穀物需給の緩和につながるかは今後の動向等を見ていく必要がある。

また、報道によれば、10月中旬のプーチン大統領の訪中に伴い、シベリア、極東地域産の穀物の対中国輸出（最大12年間で計7,000万トン）の契約がまとまった。

（2）ウクライナの穀物輸出動向

ロシアの侵攻を受け、穀物輸出の世界貿易に占めるウクライナのシェアは低下している。USDAの10月見通しによれば、侵攻前は、小麦は10%前後、とうもろこしは15%前後の輸出シェアがあったものの、2023/24年度は、5.3%、9.9%までそれぞれ低下している。2023/24年度に入って、黒海穀物イニシアティブが停止し、EU経由での輸出に依存せざるを得ない中、シェアを回復するのは難しいのではないかとみられる。

一方、油糧種子輸出の世界貿易に占めるシェアについて、もともと欧州向け輸出が中心だった菜種は、2023/24年度は史上最高の豊作見通しに加え、カナダ、豪州の減産もあり、20%を超える見通し。ひまわり油は侵攻以前の40%前後のシェアを維持する見通し。

（3）中東情勢の影響

ウクライナ情勢について先が見通せない中、10月7日のイスラム組織ハマスがイスラエルへの攻撃により、中東情勢が緊迫した事態となっている。シカゴ相場の小麦やとうもろこし、大豆価格に関しては、今のところは、米国がとうもろこしや大豆の収穫期を迎えていることに加え、ロシアの小麦輸出、ブラジルのとうもろこし・大豆輸出が好調なことを受けて、落ち着いた動きをみせている。しかしながら、中近東諸国がロシアやウクライナの小麦の主要輸出先国であることに加え、原油価格が高騰した場合、バイオ燃料向け穀物への需要が増加し、穀物相場へ影響する可能性もあることから、今後の動向に注視が必要である。

図6 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移

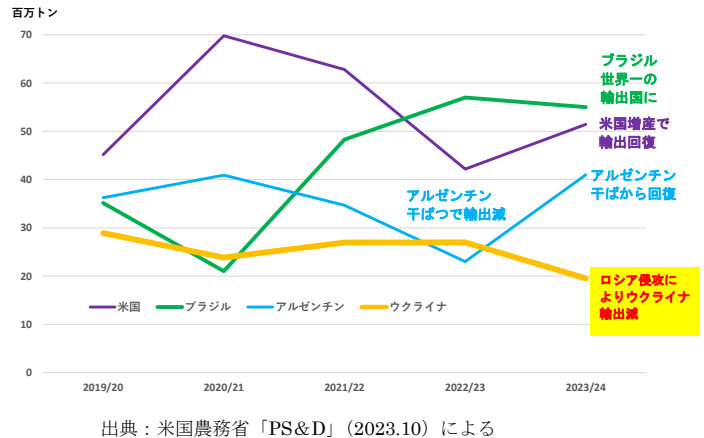
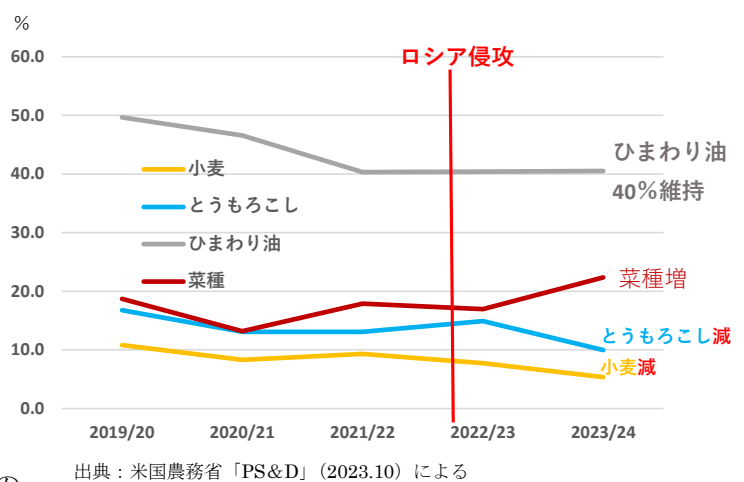


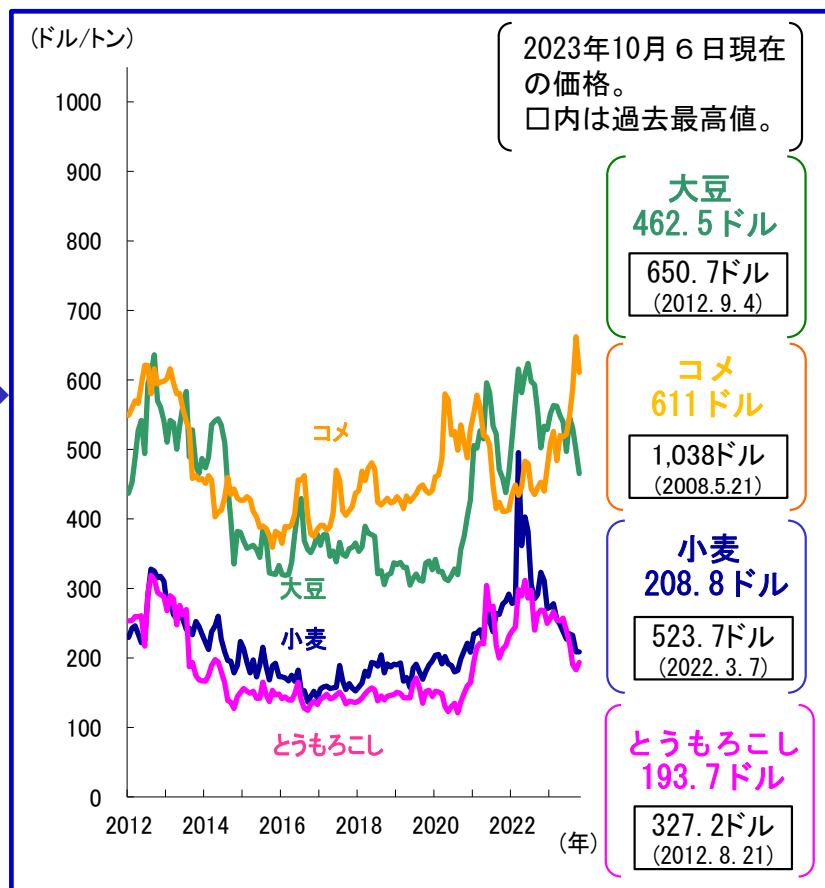
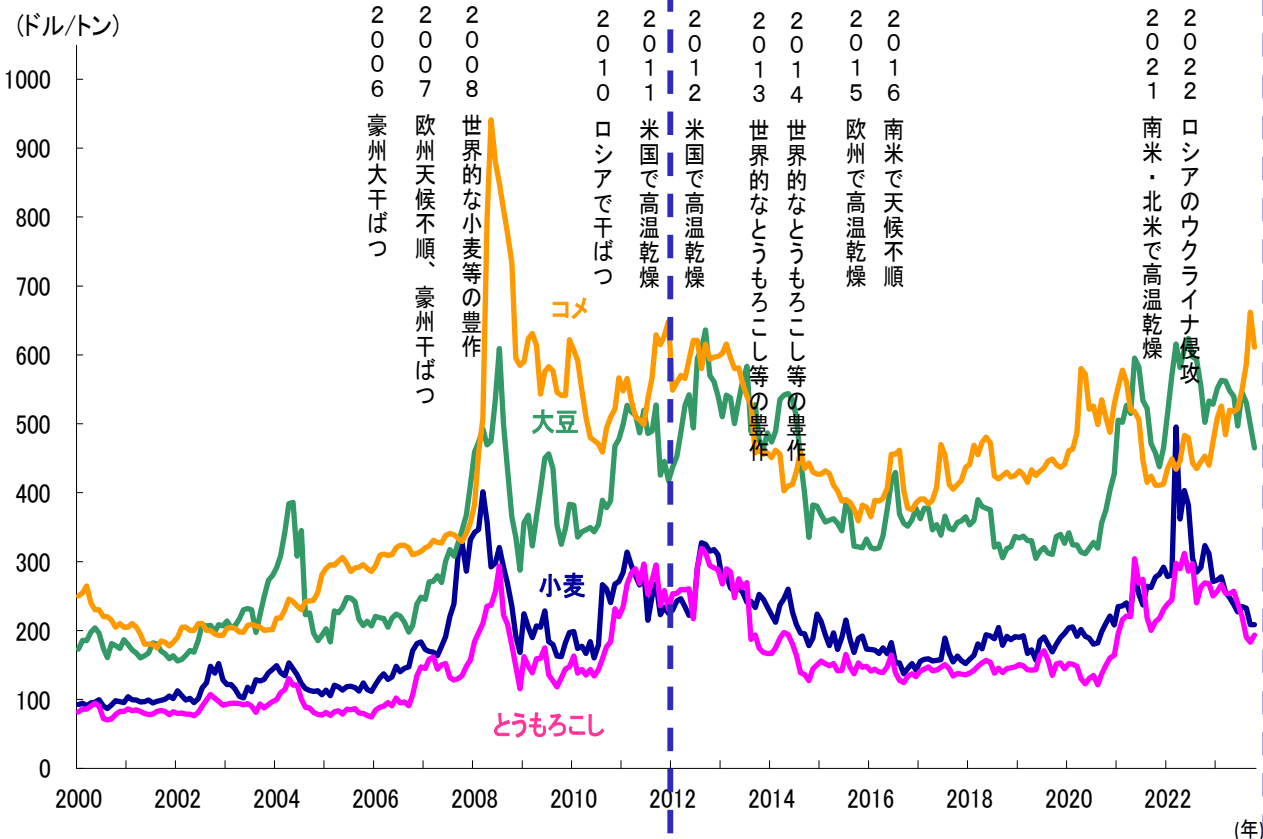
図7 ウクライナの穀物等輸出シェアの推移



資料 1 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、4者協議による黒海からの輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆は、アルゼンチンの干ばつから依然として高水準。コメは、2013年以降低下で推移も、2022年9月以降、インドの輸出規制やインドネシアの需要増、2023年7月からのインドの輸出規制の強化から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向

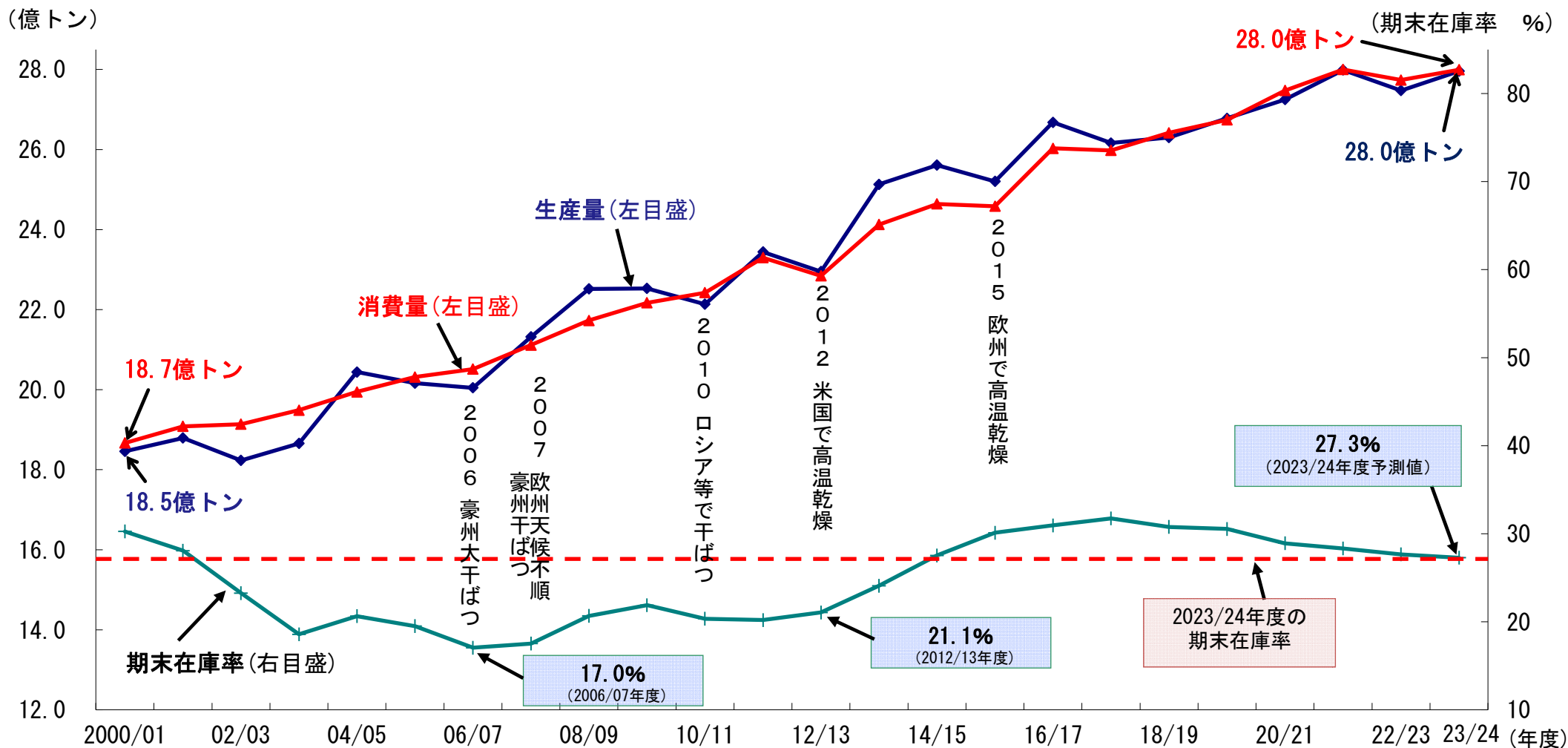


注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。
注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2023/24年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2023/24年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.3%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

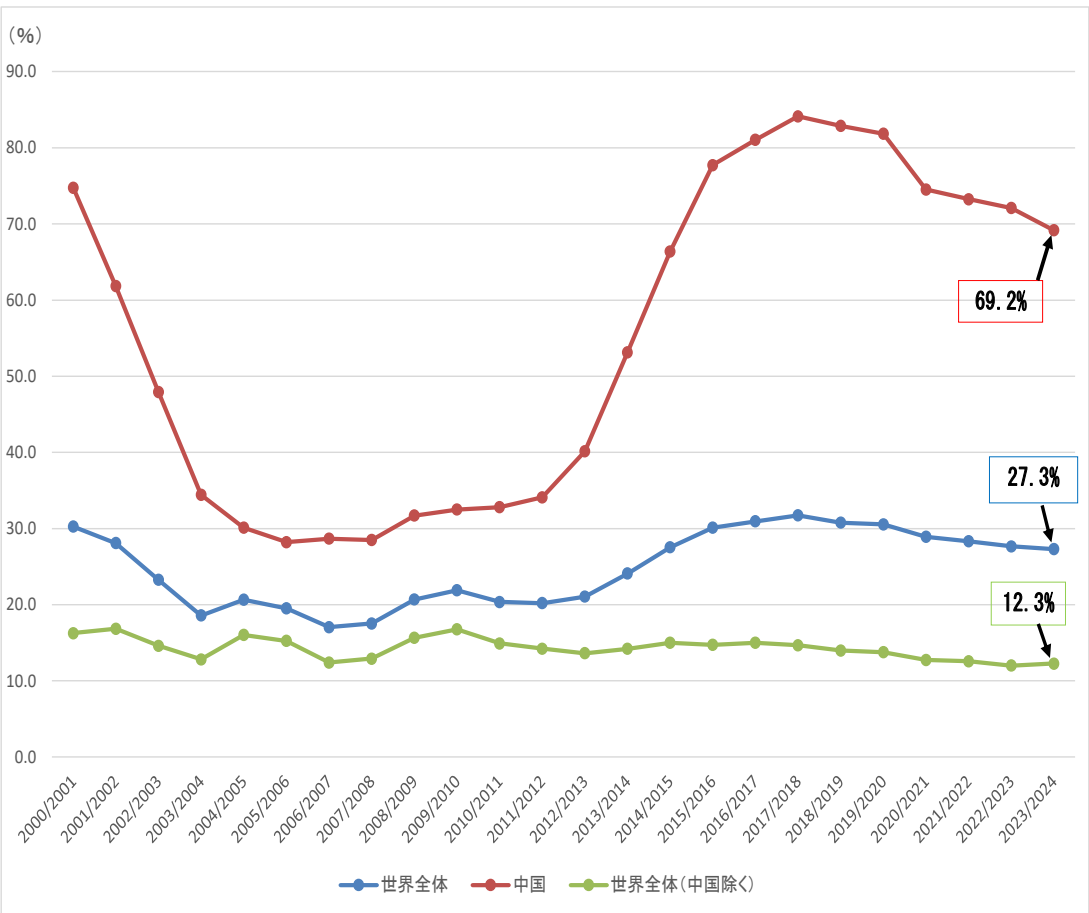


資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(October 2023)、「PS&D」

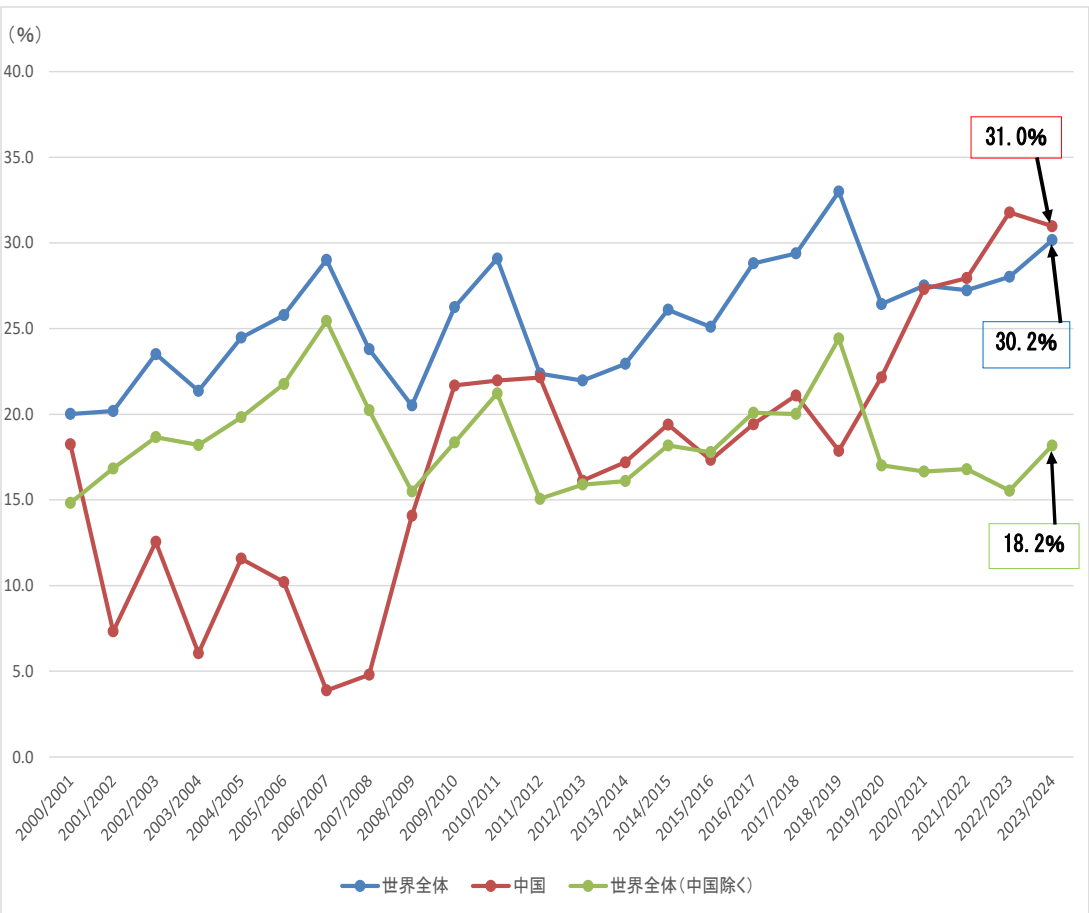
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



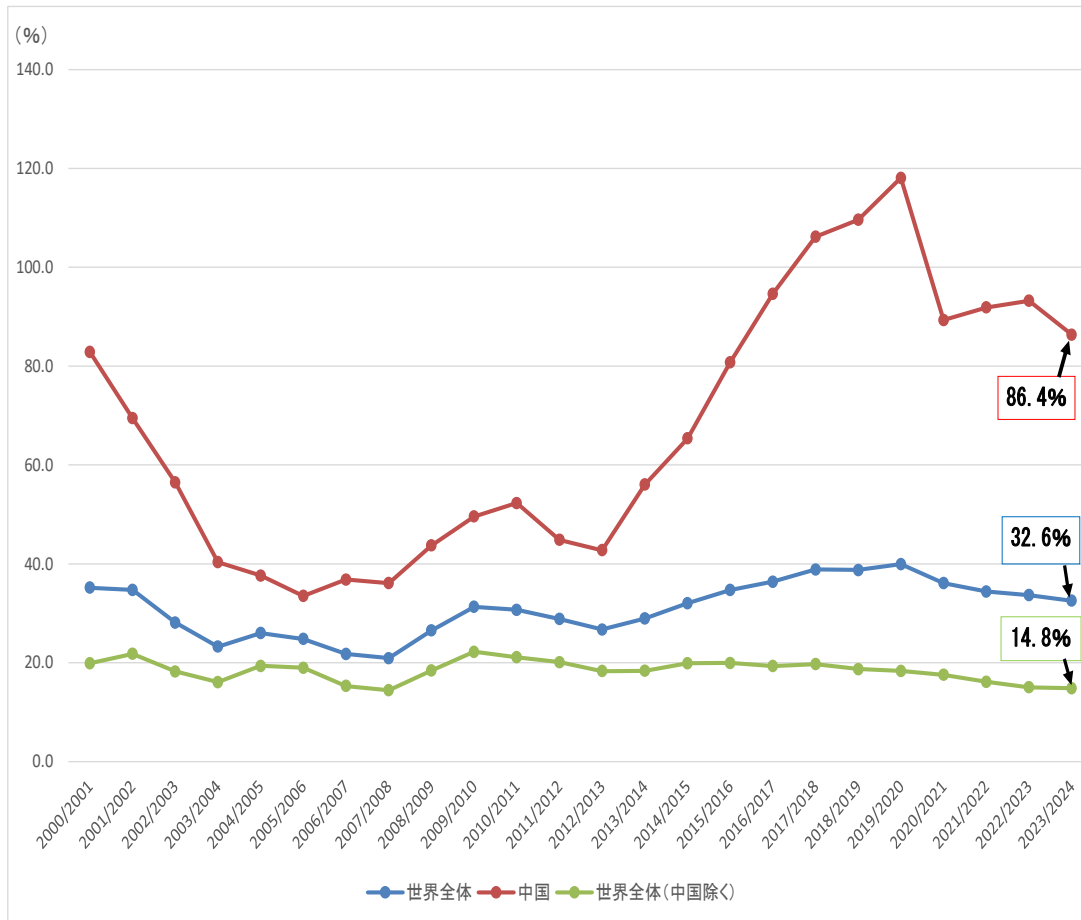
○ 大豆の期末在庫率の推移



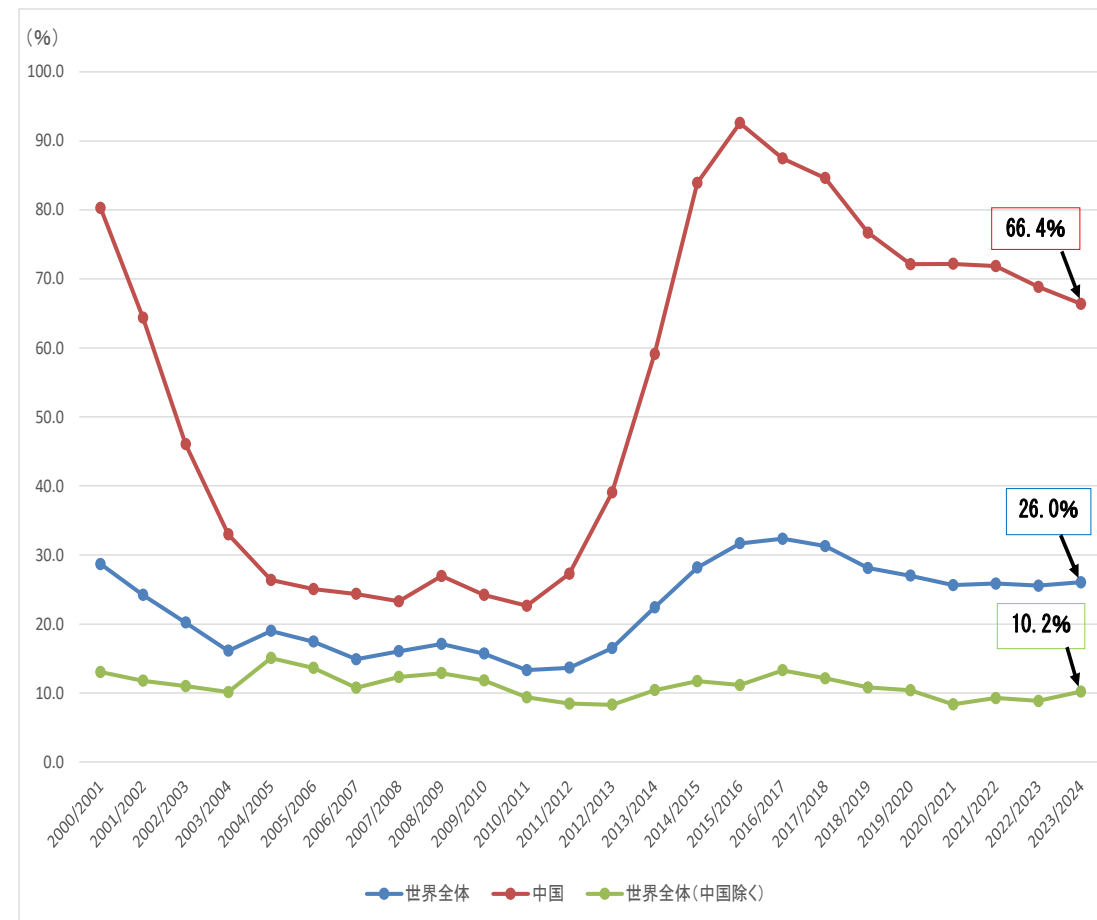
資料: 米国農務省「PS&D」(October 12, 2023)
 注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。
 2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100
 3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100
 4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(October 12, 2023)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

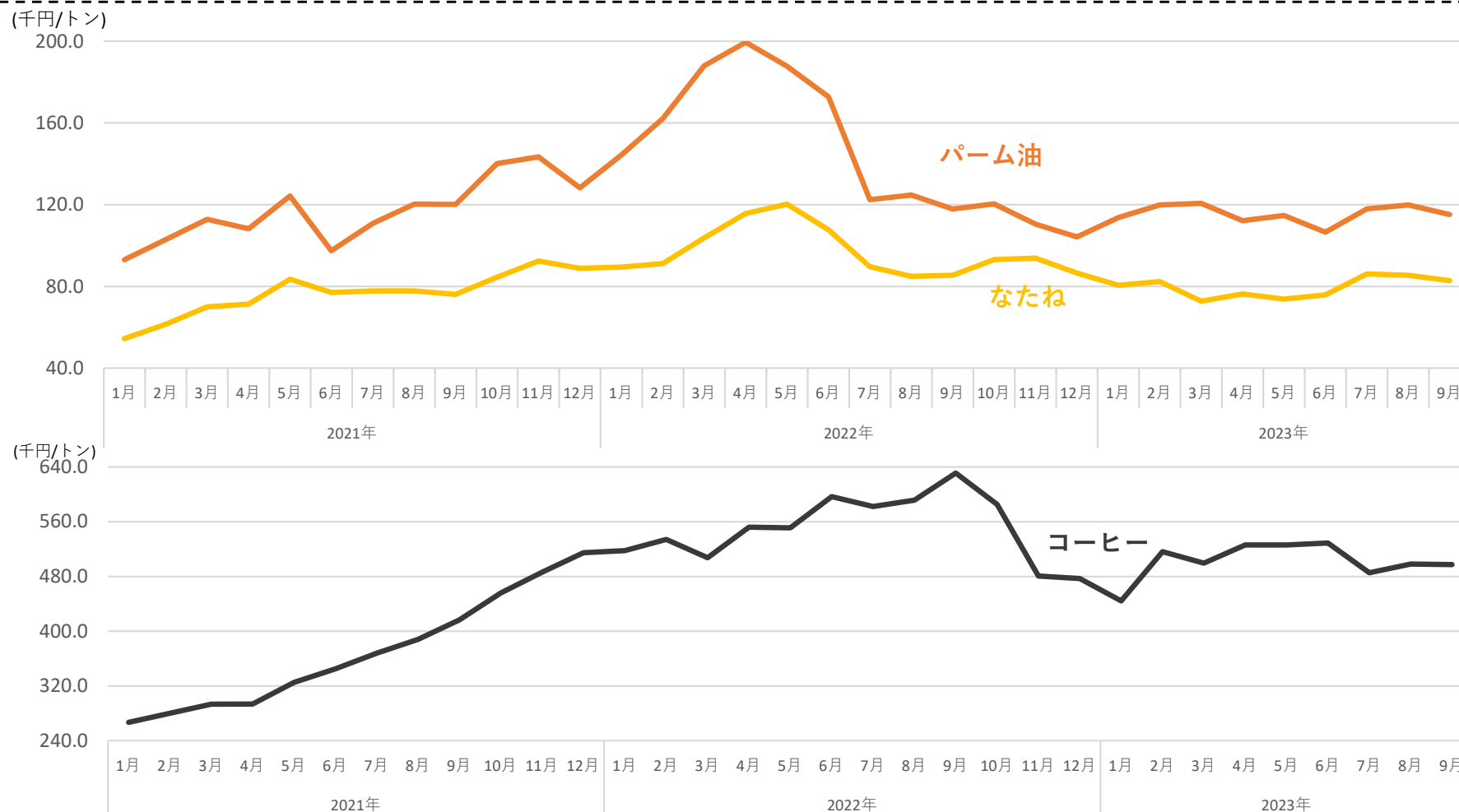
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 4－1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが市場価格上昇の要因であった。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでは**2021年に熱波による減産があったが、2022年は回復基調から平年並みの収量に近づいた**。また、パーム油について、インドネシアの輸出禁止措置（**2022年5月23日解除**）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも前年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことにより市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降したが、高値が続いている。



2023年10月20日現在
□内は2020年4月以降の最高値。

パーム油
115.1 千円/トン
199.5千円/トン
(2022.4)

なたね
82.8千円/トン
120.3千円/トン
(2022.5)

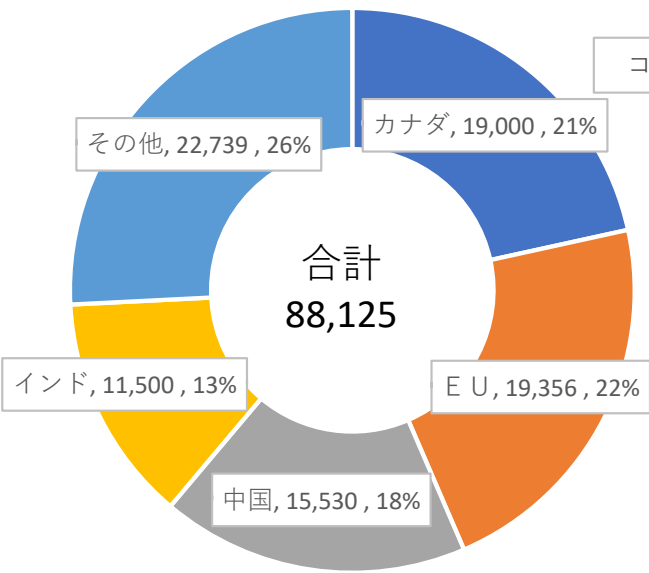
コーヒー
497.4千円/トン
631.1千円/トン
(2022.9)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

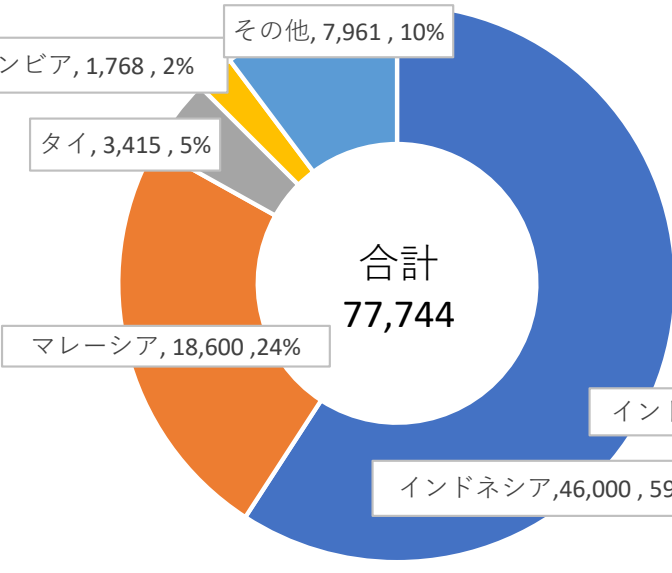
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2022/23）
（単位：千トン）



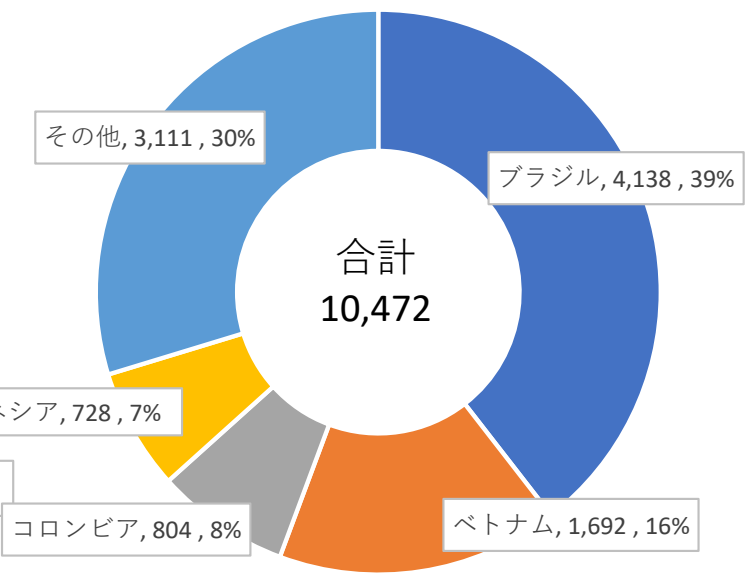
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2022/23）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
合計	2,101	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
合計	635	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
合計	390	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね 単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年								
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油 単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年								
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒ－

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年								
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
コヒ	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
 注1 国際コーヒ－機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
 2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和5年9月の国内の加工食品の消費者物価指数は111.5～157.7（前年同月比で0.5%～21.8%）の範囲内。

【参考】
消費者物価指数（総務省）
（令和5年1月～令和5年9月）

【参考】
食品価格動向調査（農林水産省）
（令和5年1月～令和5年10月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5											H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5											
品目	平均	平均	平均	平均	平均	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	上昇率 (前年 同月比)	品目	平均	平均	平均	平均	平均	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	115.0	115.0	114.3	114.8	115.3	115.0	121.3	122.9	122.5	7.7%	食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	111.5	110.7	111.3	111.3	111.3	116.5	118.6	118.2	118.0	-0.2%	6.8%	
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	113.1	114.6	113.1	113.9	111.4	124.3	125.5	125.8	123.3	9.8%	即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	111.2	111.2	110.6	110.6	111.8	121.6	122.8	122.8	121.6	122.2	0.5%	10.5%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	110.3	110.4	112.0	114.5	114.6	115.2	115.1	115.9	116.3	9.0%	豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	108.5	108.1	110.2	113.7	114.1	115.0	114.6	114.6	114.1	114.6	0.4%	9.5%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	164.0	163.9	164.3	163.0	164.1	162.1	160.3	158.8	157.7	0.5%	食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	162.2	162.2	161.9	161.2	161.2	160.6	160.0	158.7	158.7	156.8	-1.2%	1.2%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	104.5	105.9	106.5	107.1	107.7	107.7	108.0	107.5	108.8	5.2%	みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	102.3	103.4	103.6	105.2	105.0	105.2	105.0	105.2	105.6	109.4	3.6%	3.8%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	137.3	137.2	139.0	148.6	152.3	153.0	153.9	155.7	154.7	21.8%	マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	129.6	128.9	130.3	137.9	142.7	144.4	144.1	143.7	144.1	144.8	0.5%	23.3%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	119.2	121.4	121.9	133.9	134.5	134.8	134.7	136.2	135.0	19.3%	チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	116.9	118.4	117.9	129.3	130.3	130.7	130.3	130.7	130.7	130.3	-0.3%	21.0%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	98.6	98.6	98.9	109.8	111.2	111.4	112.3	112.2	111.5	13.0%	バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	98.6	98.6	98.4	108.9	110.3	110.7	111.4	111.4	110.7	111.4	0.6%	12.3%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	108.7	109.4	110.2	111.6	112.1	112.7	113.4	113.8	114.3	8.8%	注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。 注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。																	

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2023年11月号（10月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）肥育牛価格は引き続き高水準、23年7月の牛肉輸出量は大幅に減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002955.html

（豪州）エルニーニョ現象でと畜頭数が増加、米国向け輸出は急増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002956.html

（ウルグアイ）23年1～7月の牛肉輸出量は前年同期を大幅に下回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002957.html

◆豚肉

（カナダ）23年の豚肉輸出量、減産の影響から前年比8.0%減の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002958.html

（EU）減産が継続するも、枝肉価格は9カ月ぶりに下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002959.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）23年8月の乳価は反発

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002961.html

（EU）23年1～7月の乳製品生産量、バター、チーズなど前年同期を上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002962.html

（NZ）生乳生産量は微減、生産者支払乳価は低水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002963.html

（中国）需給緩和により乳価は下落傾向、輸入量も減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002964.html

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）世界の期末在庫、生産量、輸入量、期末在庫は前回見込みから増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002965.html

（世界：大豆）米国の減産見込みも、大豆期末在庫は前年度比大幅増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002966.html

（米国）作付面積の拡大により、米国の生産量はさらに増加見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002967.html

（ブラジル）22/23年度トウモロコシ、大豆生産量ともこれまでの記録を更新する見込み

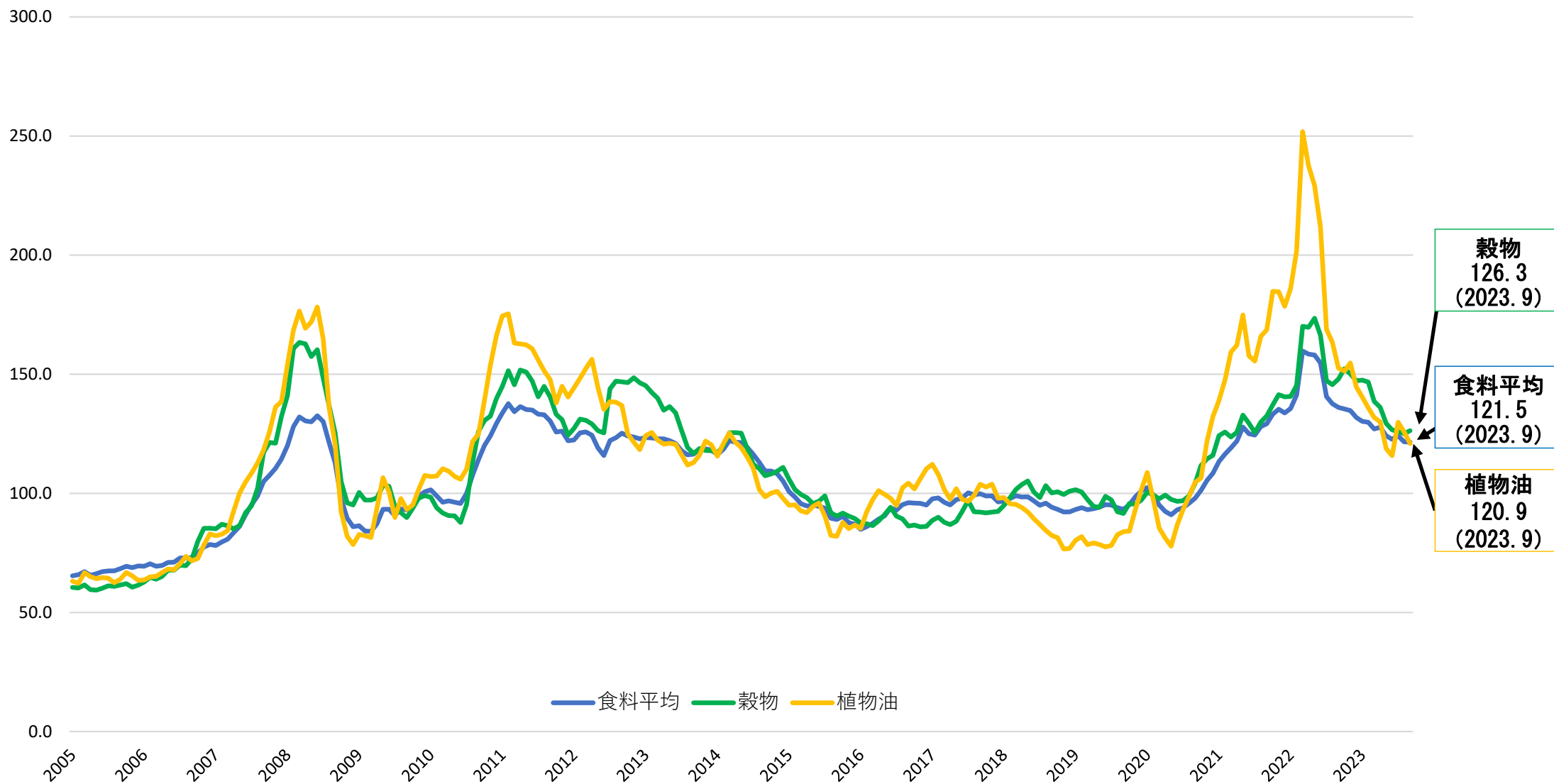
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002968.html

（中国）23/24年度のトウモロコシおよび大豆の需給見通しを更新

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002969.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2023.10)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

インドの食料事情（１）：農業構造

1 はじめに

読者のみなさんは、インドにどんなイメージをお持ちでしょうか。まずは「カレー」、「牛」、「映画」といったイメージが多いのではないかと思います。

「カレー」については、最終回（食文化・市場）で詳しく触れたいと思いますが、インドの特徴をつかんでいただくため、「映画」について冒頭、簡単に紹介いたします。インド映画といえば「ボリウッド」であり、（突然の）歌と踊りというイメージがあるかもしれません。「ボリウッド」は、インド最大の金融都市ムンバイで作られるヒンディー語映画を指しますが、最近、日本でも話題になったインド映画「バーフバリシリーズ」や「RRR」はボリウッド映画ではなく、これは「トリウッド映画」であり、南インドのハイデラバードで撮影されたテルグ語映画です。インドには主要な映画産地として、ボリウッド、トリウッドのほか、コリウッド（タミル語映画）、モリウッド（マラヤーラム語映画）、サンダルウッド（カンナダ語映画）、ゴリウッド（グジャラート語映画）など、言語圏ごとに存在しており、多言語国家インドを象徴する産業です。なお、インドの連邦公用語はヒンディー語、準公用語の英語のほか、州公用語（憲法上で規定）は22言語（ヒンディー語、英語を含む）です。

多様な言語に加えて、地理的な広がりも、さながらEUのようでもあり、州※ごとに異なる言語・文化のあるインドを「インド」と一括りにして考察することには抵抗があるものの、以下、インドの食料事情について、3回に分けて概略を紹介させていただきます。第1回は農業構造、第2回は農業を支える基本政策、最終回は食文化・市場について紹介し、一人でも多くの方に、あまり馴染みのない国「インド」に関心をもっていただければと思います。

※なお、28州と8連邦直轄領がある



2 インド農業の概観

(1) 土地、地形、気候

①土地

私たちが見慣れている世界地図では、低緯度にあるインドの大きさは目立っていない印象ですが、328 万km²（日本 37 万km²の約 9 倍）、7 番目に大きな国土です。耕地面積は 168 万km²で世界 1 位（日本 4.3 万km²の約 40 倍）であり、インドが様々な品目で世界有数の生産量を誇る源泉です。

灌漑面積は 71 万km²で、管井戸（Tube-Well）で地下水を利用するものが多いです。灌漑普及がインド農業の生産性向上に貢献してきたことは間違いありませんが、一方で、過剰な地下水利用による地下水位低下や土壌流出・劣化等の課題も抱えています。また、水資源インフラの維持・管理にも課題があり、インドのポテンシャルを最大限に生かす上でのボトルネックになる可能性があります。

なお、土地持ち農家当たりの平均耕地面積は 1 ha ですが、州ごとに農業の様態が大きく異なります。相続による農地の細分化や農村離れによる不在地主といった問題のある地域もあり、日本と共通する農政上の課題がある印象を受けます。

[インドの農地面積、規模別経営体数]

国土面積	328万km ²		経営体数	面積（ha）	平均面積（ha）	
耕地面積	168万km ²		零細（1ha未満）	100百万 （68%）	37千 （24%）	0.38ha
灌漑面積	71万km ² うち用水路式 16万km ² （16%） うち管井戸式 34万km ² （34%）		小規模（1-2ha）	25百万 （17%）	36千 （22%）	1.40ha
			半中規模（2-4ha）	13百万 （9%）	37千 （23%）	2.69ha
			中規模（4-10ha）	5.5百万 （4%）	31千 （20%）	5.72ha
			大規模（10ha超）	0.8百万 （0.5%）	16千 （9%）	17.07ha
			全体	146百万	157千	1.08ha

(出所：インド農業・農民福祉省 Agriculture at a Glance 2023 ※面積は 2021 年、経営体数は 2015-16 年センサス)

②地形・気候

パキスタン、北インド、バングラデシュに広がる乾燥気候のヒンドゥスターン平野（パキスタンのインダス川とネパール、インド、バングラデシュを流れるガンジス川から成る平野）以外は丘陵・山岳地帯が多いです。インドの国土の半分以上を占める南のデカン高原は標高が高く、その西壁をなす西ガーツ山脈は標高 1,000m から 3,000m 近い山が連なっています。楽天、メルカリが進出する IT 都市として日本でも注目されることの多いベンガルール（バンガロール）も標高 900m 超のところにあり、低緯度の割に、高温ではなく、一年を通して過ごしやすいと言われています。一方、北インドのデリーは、モンスーン期に入る前の 4～6 月は非常に暑く、連日 40℃を超えています。この時期、リキシャー（トゥクトゥク）に乗ると、ドライヤーを全身で浴びているような感覚になります。他方で、12～2 月は朝晩には 10℃を下回るほどに冷え込み、過酷な（過ごしにくい）気候と言えます。

ダージリンが有名なインドの東部（西ベンガル州（州都コルカタ）の北部）や同じく茶の産地アッサムやインパールのあるインド北東部は、ヒマラヤ山脈やアラカン山脈（インドとミャンマーの国境にある山脈）に広がり、高山気候で、一年の大半が涼しい気候です。現地を訪れると、日本の山村に似たような風景に心とまされます。第二次世界大戦において「インパール作戦」の戦地となった地域でもあり、多くの日本兵が同じように郷愁を覚えたのではないのでしょうか。また、景色だけでなく、インド北東部の人々はモンゴロイド系が多く、「親戚・旧友にこんな顔の人がいた」と思うこともしばしばです。食事情も、主食は短粒種のコメで、もち米を使った粽などもあります。コメで醸造した酒もあります（Rice Beer と呼んでいたが、発砲したどぶろくのような印象）。こうしたことから、日本の農業と類似するところもあり、インドに対する印象が変わるきっかけにもなるので、日本の食・農関係者の方には是非、一度は足を運んでいただけると嬉しく思います。



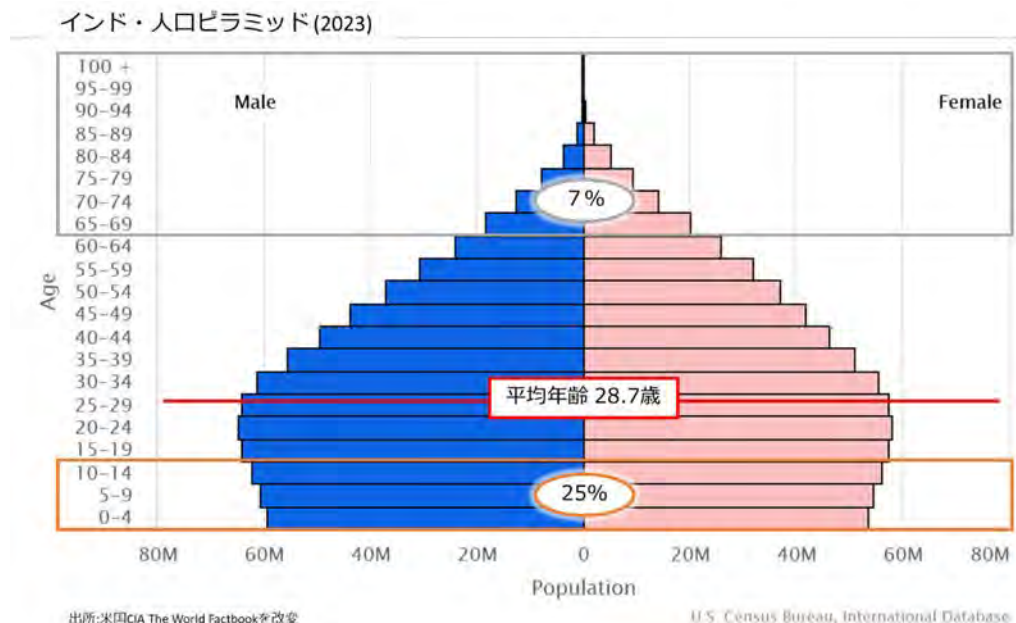
平野部の乾燥気候から、山岳地帯の温帯・高山気候まで、幅広い気候帯を有することから、インド人に言わせれば、インドで採れないものはない、とのこと。実際、赴任期間中、現地で手に入る食材で、日本食や洋食を自炊していても、生鮮野菜で手に入らないものはあまりありません（ただし、なぜか、シソは日本のような香りのするものが手に入らず、インドに長く生活する日本食関係の邦人とも、どうしたら現地で手に入るかという話はよく話題になった）。ちなみに、いまの季節（10～11月）は北インド（ヒマラヤ山脈の麓）のヒマーチャル・プラデシュ州やウッタラカンド州といったデリー近郊（200～300km 圏内）から「柿」を手に入れます。リンゴ、メロン、イチゴは日本人としてはがっかりすることが多かったこともあり、味の安定していた柿は（特に子どもたちが）「毎日くだもの 200 グラム」をインドで実践する上で重宝していました。

（２）人口（農村人口）

国連の推計では、今年、インドの人口は 14 億 2,860 万人と推定され、中国（14 億 2,570 万人）を抜き世界第 1 位となったと言われています。中国との大きな違いは年齢別の人口構成で、15 歳未満の人口の割合が 25%（中国は 17%）、65 歳超の割合が 7%（中国は 14%）と若年層が多く、将来的な消費市場の拡大がまだまだ期待できる点です。こういった点は、街中のエネルギーからも実感できます。

インド 14 億人のうち、約 3 分の 2 となる 9 億人が農村に住んでいます。また、労働人口 5 億人のインドで雇用者の 4 割が農業で働いています。インド経済の発展に伴い、農村人口と農業労働

人口の割合は年々縮小してはいますが、それでも、絶対数として非常に多くの人々がインド農村に住み、農業を生業にしています。インド農業・農村の発展に貢献することは、食料安全保障の強化や持続可能な開発目標（SDGs）の達成に大きなインパクトを持つことは明らかであり、技術力を持つ日本企業のインド進出が待たれるところです。



(3) 生産

①穀物

穀物生産については、全体で3億トン（2020/21）が生産されていますが、コメ（1.2億トン）、コムギ（1.1億トン）が大宗を占めているほか、インドの伝統的な主食である雑穀、豆が生産されています。コメ、コムギの収量は、緑の革命後、漸次的に改善してきており、2011年以降、コメは世界最大級の輸出国となっています。コムギについても、近年、中東・アフリカ等への輸出に力を入れています。ウクライナ情勢等に影響された国際相場の上昇と、それに牽引された国内食料の厳しいインフレを受けて、コメ・コムギの一部品目（タリフライン）について輸出規制が一時的に導入されました（「食料安全保障月報8月号」参照）が、インド商工省所管の農産物輸出開発局（APEDA）や業界団体は引き続き、強い輸出意欲を持っています。

②畜産物

生乳生産量（牛、水牛計）は2億トン（2020/21）であり、世界最大の乳生産国。酪農で飼養されている牛は総数3億頭（牛2億頭、水牛1億頭）にのぼります。ちなみに、インドの街中ではよく牛を見かけますが、統計上、いわゆる野良牛は5百万頭とされています。

食肉生産量は、鶏肉（4.4百万トン）が多いが、羊肉、豚肉も食されています。牛肉は、人口の8割を占めるヒンドゥー教で禁忌とされている（このため、牛肉・牛肉製品は禁輸品に指定されている）ものの、イスラム教徒やキリスト教徒の多い南インドや北東インドでは食されています（3百万トン）。なお、牛肉の輸出量は世界トップクラス（1.4百万トン（豪州と同水準））で、主に東南アジア・中東向けに輸出されています。

③園芸作物

野菜・果樹については全体で3億トン（2020/21）。タマネギ（26 百万トン）、バナナ（33 百万トン）、マンゴウ（20 百万トン）など、世界有数の生産量となっています。ブドウ（3 百万トン）やリンゴ（2 百万トン）も、相当量生産されています。ブドウは生食・乾燥果物向けが中心ですが、近年、ワイン醸造用も増えていると言われています。リンゴについては輸入量も多く（43 万トン）、インドの需要の大きさが窺えます。昨年、日本産リンゴの輸入が解禁されたので、今後の展開が期待されます。

また、タマネギ等については、生産量が多い（かつ輸出もしている）ものの、需要が大きく、一部の地域では輸入量も多いという事態起きており、インドの農業当局はこうした品目の収量向上や収穫後のロス低減に関心を持っています。

	生産量	生産性	輸出量	輸入量	生産量 1 位の国	輸出量 1 位の国
コメ	122百万トン (2020-21推計値)	2,712 kg/ha (精米換算)	37千 (24%)	4.7千トン (2020-21推計値)	中国	インド
コムギ	109百万トン (2020-21推計値)	3,464 kg/ha	36千 (22%)	—	中国	ロシア
生乳	198百万トン (2019-20)	13百万 (9%)	541千トン (2021FAO/乳製品生乳換算)	—	インド	NZ
鶏肉	3.6百万トン (2021FAO推計)	—	—	—	ブラジル	ブラジル
牛肉	1.6百万トン (水牛肉、2021FAO)	139kg/頭 (2021FAO)	1,027千 (2021FAO)	—	ブラジル	ブラジル
タマネギ	26百万トン (2021FAO)	16トン/ha (2021FAO)	1,434千トン (2021FAO)	27千トン (2021FAO)	中国	オランダ
トマト	21百万 (2021FAO)	25トン/ha (2021FAO)	86千トン (2021FAO)	—	中国	メキシコ
じゃがいも	54百万 (2021FAO)	24トン/ha (2021FAO)	350千トン (2021FAO)	2千トン (2021FAO)	中国	フランス
バナナ	33百万トン (2021FAO)	35トン/ha (2021FAO)	340千トン (2021FAO)	—	インド	エクアドル
マンゴウ	24百万トン (2021FAO)	9トン/ha (2021FAO)	170千トン (2021FAO)	—	インド	メキシコ
ブドウ	3.3百万 (2021FAO)	21トン/ha (2021FAO)	268千トン (2021FAO)	8千トン (2021FAO)	中国	チリ
リンゴ	2.2百万トン (2021FAO)	7.2トン/ha (2021FAO)	29千トン (2021FAO)	436千トン (2021FAO)	中国	中国

（出所：インド農業・農民福祉省 Agriculture at a Glance 2023、FAOSTAT）

3 小括

第1回は世界最大の人口を有するインドの農業について概観しました。コメ、コムギなどの食料自給を達成し、食料輸出国となったインドですが、引き続きの人口増加、経済発展に伴う食の嗜好の変化とそれに伴う食料生産のあり方の変化が世界の食料安全保障に価格・量など多様な面でどのように影響するのかは注視する必要があります。また、いまだ生産性向上のポテンシャルを多分に有するインド農業の発展に貢献することで食料安全保障の環境を向上させていくという関わり方も、昨今の変動の大きく、不確実性の増す情勢にあっては重要です。次回は、インドの農業政策について紹介する予定です。

文責：渡辺 一行
（元・在インド日本国大使館 一等書記官）

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2023/24 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

- ・米国等で上方修正されたものの、カザフスタン、エチオピア、豪州等で下方修正され、前月から下方修正された。

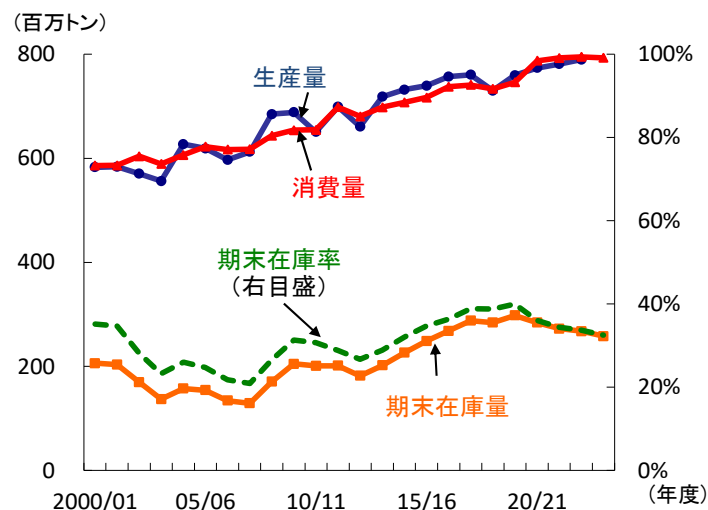
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

- ・米国等で上方修正されたものの、エチオピア、ロシア等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

- ・ロシア等で上方修正されたものの、豪州、カザフサタン等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料:USDA「PS&D」(2023. 10. 12) をもとに農林水産省にて作成

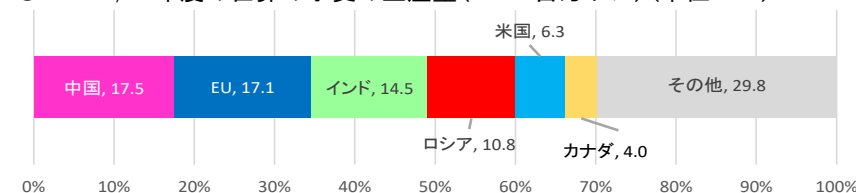
◎世界の小麦需給

（単位：百万トン）

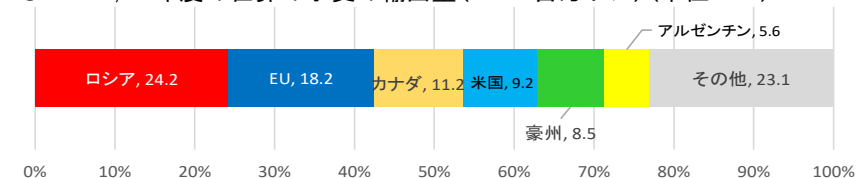
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	781.0	789.5	783.4	▲ 3.9	▲ 0.8
消 費 量	792.4	794.6	792.9	▲ 3.0	▲ 0.2
うち飼料用	161.1	155.7	156.4	▲ 1.2	0.4
輸 出 量	202.8	221.6	206.3	▲ 1.1	▲ 6.9
輸 入 量	199.5	211.5	204.6	▲ 1.0	▲ 3.2
期末在庫量	272.7	267.6	258.1	▲ 0.5	▲ 3.5
期末在庫率	34.4%	33.7%	32.6%	0.1	▲ 1.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (12 October 2023)

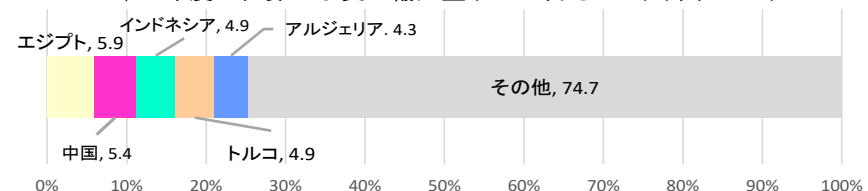
○ 2023/24年度の世界の小麦の生産量(783.4百万トン)（単位：％）



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸出量(206.3百万トン)（単位：％）



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸入量(204.6百万トン)（単位：％）



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の生産量は前月予測に比べ 2.1 百万トン上方修正

【生育・生産状況】米国農務省(USDA)によれば、2023/24 年度の実生産量は、単収の上昇から前月予測から 2.1 百万トン上方修正され 49.3 百万トンと、前年度に比べ 9.8%増、過去 5 年平均に比べ 1.3%増となる見込み。

USDA「Crop Production」(2023.10.12)によれば、冬小麦は前月予測から 0.6 百万トン上方修正され 34.0 百万トン、春小麦は 1.5 百万トン上方修正され 13.7 百万トン、デュラム小麦は 0.1 百万トン上方修正され 1.6 百万トンの見込み。種類別の生産量について前年度と比べると、冬小麦は主要産地において 2 年連続で干ばつに見舞われたものの、収穫面積と単収いずれもの増加により 13.1%増加した。春小麦も乾燥天候に見舞われ単収が低下したものの、収穫面積の増加により 4.6%増加した。一方、デュラム小麦は、収穫面積は増加したものの、生育期間に乾燥天候に見舞われ単収が減少したため、7.3%減少した。

USDA の「Crop Progress」(2023.9.25、10.16)によれば、2023/24 年度の春小麦は 9 月 24 日時点で主要生産 6 州の収穫進捗率が 96% に達し、収穫はほぼ終了した。同時に、2024/25 年度の冬小麦の播種も進展しており、10 月 15 日時点の播種進捗率は 68%と前年度同期(67%)をやや上回り、5 年平均(68%)並みとなった。また、発芽進捗率は 39%と前年度同期(36%)を上回ったものの、5 年平均(43%)は下回った。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 19.1 百万トンと、前年度に比べ 7.7%減少し、1972/73 年度以降で最低となる見込み。2023/24 年度(2023 年 6 月～8 月)の輸出量は、国際市場で価格が高く競争力がないことから、4.5 百万トンと前年度同期(5.7 百万トン)を 22%下回っている。また、2023 年 9 月の輸出量も前年度同期(292.5 万トン)を下回る 186.4 万トンとなった。輸出先国は、メキシコ(17.8%)、フィリピン(13.8%)、中国(9.9%)の順である。

米国産の輸出価格は、春小麦の生産予測が上方修正されたことから、10 月 9 日時点で 305 ドル/トンと前月より 9 ドル/トン低下したものの、主要輸出 6 か国(米国のほか、ロシア、EU、カナダ、豪州、アルゼンチン)では、豪州(316 ドル/トン)、カナダ(312 ドル/トン)に続き高い水準。

2023/24 年度の輸入量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、3.7 百万トン。HRW(ハード・レッド・ウインター)の干ばつ等による国内価格上昇を受け、相対的に安価な EU 産の輸入が生じている。

2023/24 年度の期末在庫量は、2017/18 年度から低下傾向となったが、生産量等の上方修正から、前月予測から 1.5 百万トン上方修正され 18.2 百万トンと前年度(15.8 百万トン)を上回った。

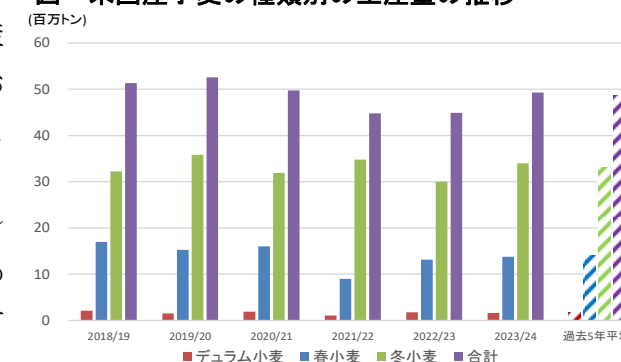
小麦一米国 (冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割)

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年6月～24年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	44.8	44.9	49.3	2.1	9.8
消費量	29.8	30.8	31.5	0.8	2.6
うち飼料用	1.8	2.4	3.3	0.8	35.1
輸 出 量	21.7	20.7	19.1	-	▲ 7.7
輸 入 量	2.6	3.3	3.7	0.1	10.5
期末在庫量	19.0	15.8	18.2	1.5	15.1
期末在庫率	37.0%	30.8%	36.0%	2.4	5.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.03	14.36	15.08	▲ 0.25	5.0
単収(t/ha)	2.98	3.13	3.27	0.19	4.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(12 October 2023)

図 米国産小麦の種類別の生産量の推移



資料:USDA「Crop Production」(2023.10.12)をもとに農林水産省で作成

表 米国産小麦の輸出量と輸出先国

(輸出量:万トン、シェア:%)

2023/24年度 (2023年9月)			2023/24年度 (2023年6月～9月)			2022/23年度 (2022年6月～9月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
メキシコ	33.2	17.8	メキシコ	109.3	17.6	メキシコ	357.6	18.1
フィリピン	25.8	13.8	フィリピン	85.6	13.8	フィリピン	206.9	10.4
中国	18.4	9.9	日本	56.9	9.2	日本	205.9	10.4
日本	16.9	9.1	台湾	42.0	6.8	韓国	125.1	6.3
韓国	12.8	6.9	韓国	41.7	6.7	中国	117.2	5.9
インドネシア	11.7	6.3	中国	34.1	5.5	ナイジェリア	86.7	4.4
タイ	8.0	4.3	イエメン	23.8	3.8	台湾	77.1	3.9
その他	59.6	32.0	その他	227.8	36.7	その他	803.6	40.6
計	186.4	100.0	計	621.2	100.0	計	1,980.1	100.0

資料:USDA「Federal Grain Inspection Service Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成。

＜ カナダ ＞ 2023/24 年度の生産量(AAFC)は前年度に比べ 13.1%減

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2023.10.23)によれば、小麦全体の生産量は前月予測からの変更はなく、29.8 百万トンと前年度より 13.1%減少、過去 5 年平均に比べ 5.1%減少する見込み。前年度に比べ、収穫面積は増加(前年度比 5.6%増)したものの、主要生産地のカナダ西部で干ばつにより単収が低下(同 17.9%減)した影響を受けた。

小麦全体のうち普通小麦の生産量は、収穫面積が増加(同 7.9%増)したものの、プレーリー平原南部の干ばつにより単収が低下(同 16.4%減)したことから、25.8 百万トンと前年度に比べ 9.7%減、5 年平均に比べ 1.6%減の見込み。また、デュラム小麦の生産量は、収穫面積の減少(同 1.5%減)と単収の低下(同 28.6%減)から、4.1 百万トンと前年度に比べ 29.9%減少の見込み。9 月 27 時点のサンプル調査の結果、小麦全体の品質は良好で、そのうち普通小麦(HRS:ハード・レッド・スプリング)は、サンプル数の 73%が 1 等、24%が 2 等に格付けされ、タンパク質含有量はそれぞれ 14.2%、13.1%となった。また、デュラム小麦はサンプル数の 82%が 1、2 等に格付けされ、タンパク質含有量は平均で 14.7%。

各州政府の 10 月初旬の報告によれば、①サスカチュワン州では、春小麦の収穫は終了し、デュラム小麦の収穫もほぼ終了。品質を示す格付けでは、普通小麦の HRS の 57%が 1 等、37%が 2 等となり、高温乾燥や収穫期の降雨があったものの、10 年平均(1 等 43%、2 等 32%)を上回った。②マニトバ州では春小麦の収穫がほぼ終了。なお、2024/25 年度の冬小麦が発芽。降雨で生育が進む見込み。③アルバータ州でも春小麦の収穫はほぼ終了。HRS の 94%、デュラム小麦の 84%が 1 等、2 等に格付けされた。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 21.3 百万トン。輸出量は、生産量の減少による輸出余力の低下を受けて前年度比 17.0%減少の見込み。

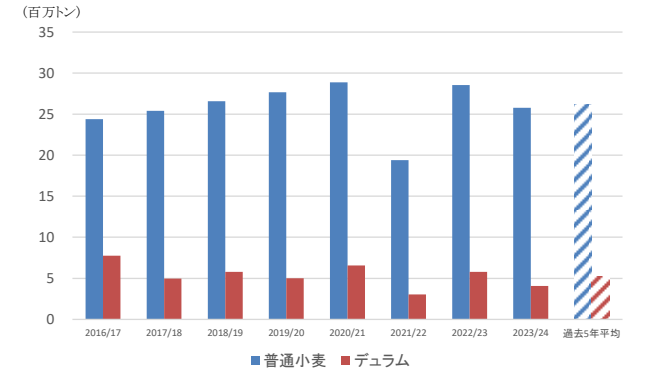
品種別の輸出量は、普通小麦は前月予測からの変更はなく 18.0 百万トンと前年度に比べ 12.7%減少、デュラム小麦も前月予測からの変更はなく 3.3 百万トンと、前年度比で 34.7%減少する見込み。カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、8 月の輸出量は、普通小麦が 139.9 万トン、デュラム小麦が 17.4 万トン。輸出先国は、普通小麦がコロンビア(11.5%)、メキシコ(9.1%)、中国(8.4%)の順、デュラム小麦がモロッコ(28.2%)、日本(20.1%)、米国(12.1%)の順。カナダは世界 1 位のデュラム小麦の輸出国であるが、干ばつによる生産減からカナダ産デュラム小麦の輸出価格が上昇しているため、豊作となったトルコからイタリア等向けのデュラム小麦の輸出が増加する見込みである。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年8月～24年7月)			
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	22.4	34.3	31.0 (29.8)	-	▲ 9.7	
消 費 量	10.2	9.2	8.7 (8.7)	-	▲ 4.9	
うち飼料用	5.2	4.0	3.5 (4.3)	-	▲ 12.5	
輸 出 量	15.1	25.8	23.0 (21.3)	-	▲ 10.7	
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	9.1	
期末在庫量	3.7	3.7	3.6 (3.6)	0.1	▲ 2.7	
期末在庫率	14.5%	10.5%	11.2% (12.0%)	0.3	0.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	9.20	10.08	10.60 (10.65)	-	5.2	
単収(t/ha)	2.44	3.41	2.92 (2.80)	-	▲ 14.4	

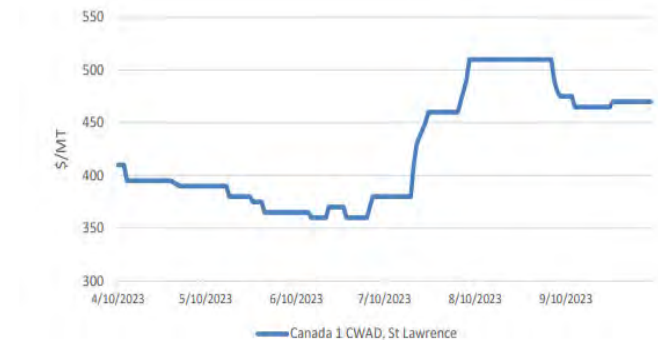
資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2023)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(23 October 2023)

図 カナダ産小麦の生産量の推移(普通小麦、デュラム小麦)



資料：AAFC 「Outlook for Principal Field Crops」(2023.10.23)をもとに農林水産省で作成

図 カナダ産デュラム小麦の輸出価格の推移(ドル/トン)



資料：USDA 「Wheat outlook」(2023.10.12)

＜ 豪州 ＞2023/24 年度の生産量は前年度比 38.3%減の 24.5 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実生産量は、エルニーニョ現象により生産地の多くで乾燥天候が続いていることを受け単収が引き下げられたことから、前月予測から 1.5 百万トン下方修正され 24.5 百万トンとなる見込み。史上最高であった前年度に比べると、2023/24 年度の実生産量は 38.3%減少するものの、10 年平均(26.4 百万トン)に比べれば 7.2%の減少に留まっている。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Farm Performance Forecast」(2023.10.5)によれば、乾燥天候によって、小麦の実生産量は減少する見込みであるものの、生育期間の当初に十分な土壌水分に恵まれていたことから、これまでの長期の平均的な生産量に留まると見られている。また、生産コスト面では、新型コロナウイルス感染拡大によって、サプライチェーンが混乱し肥料、燃料等の価格が上昇したものの、2023/24 年度はサプライチェーンが安定するため、生産コストは減少するとみられている。

現地情報会社によれば、2023/24 年度の実小麦は、一部の圃場で収穫が開始されており、収穫進捗率はクイーンズランド州で 6 %、サウスオーストラリア州で 3 %、ニューサウスウェールズ州とウェスタンオーストラリア州でそれぞれ 1 %となっている。本格的な収穫は 10 月中旬から開始される。

なお、ABARES「Australian Crop Report」(2023.9.6)によれば、2023/24 年度の実生産量は、収穫面積の減少と乾燥天候を受けての単収低下から 25.4 百万トンと、史上最高の前年度から 36.0%減少するものの、過去 10 年平均(26.4 百万トン)に比べれば 3.8%減の水準に留まる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、生産量の方修正により前月予測から 1.5 百万トン下方修正され、17.5 百万トンと前年度比で 46.2%減、10 年平均比で 7.8%減の見込み。

一方、2022/23 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく 32.5 百万トンの見込み。2022 年 10 月～2023 年 8 月までの輸出量は 30.4 百万トンで、2021/22 年度の同期間を 8.5 %上回った。輸出先国は、中国(24.2%)、インドネシア(16.1%)、フィリピン(9.3%)の順で、8 割以上がアジア諸国向け。

豪州産小麦の輸出価格(FOB)は、10 月 9 日時点で、乾燥による豪州産の生育懸念を受け、前月から 4 ドル/トン上昇し 316 ドル/トンとなった。

ロシア産小麦価格が低下(232 ドル/トン)する中、ロシア産との価格差は前月の 62 ドル/トンから 84 ドル/トンに拡大しており、現地情報によれば、品質次第では、豪州産小麦の輸出市場であるインドネシア、タイ等のアジア市場においては、相対的に安価なロシア産にシフトする可能性がある。

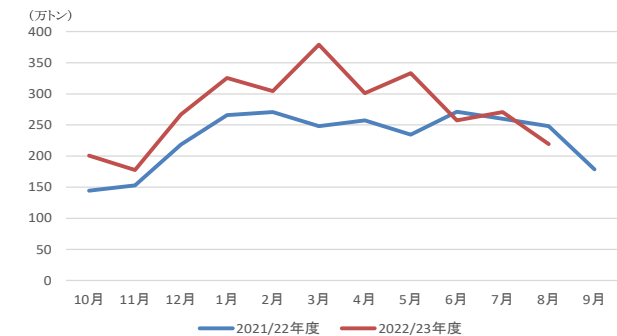
小麦－豪州(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	36.2	39.7	24.5	(25.4)	▲ 1.5	▲ 38.3
消 費 量	8.5	8.0	7.2	(7.6)	-	▲ 10.0
うち飼料用	5.0	4.5	3.7	(3.9)	-	▲ 17.8
輸 出 量	27.5	32.5	17.5	(19.0)	▲ 1.5	▲ 46.2
輸 入 量	0.2	0.2	0.2	(0.3)	-	-
期末在庫量	3.5	2.8	2.8	(2.2)	-	-
期末在庫率	9.6%	7.0%	11.5%	(8.3%)	0.7	4.5
(参考)						
収穫面積(百万ha)	12.73	13.05	12.60	(12.60)	-	▲ 3.4
単収(t/ha)	2.85	3.04	1.94	(2.01)	▲ 0.12	▲ 36.2

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2023)
IGC 「Grain Market Report」(21 September 2023)

図：豪州の月別小麦輸出量の推移



資料: Australian Crop Forecasters S&D Export Report (2023.10)をもとに農林水産省で作成

写真：サウスオーストラリア州(SA 州)の小麦圃場



この地域の現時点での降雨量は前年度同期を大きく下回ったものの、比較的生育に適した時期の降雨と、ここ数日の降雨により、生育状況は改善。
SA 州ではこの数週間で収穫が開始された。(2023.9.20)

写真: Profarmer Australia

< EU27 > 2023/24 年度の生産量は過去5年平均を上回る 133.4 百万トン

【生育・生産状況】欧州委員会(2023.9.28)によれば、2023/24 年度の EU27 の生産量は、前月予測から 0.9 百万トン下方修正され 133.4 百万トンと、前年度(133.9 百万トン)を下回るものの、過去5年平均(132.5 百万トン)を上回る見込み。小麦全体のうち、普通小麦は前月予測に比べ 0.8 百万トン下方修正され 126.3 百万トンと前年度比で 0.3%減少も、5年平均比で 1.3%の増加。また、デュラム小麦は 0.1 百万トン下方修正され 7.1 百万トンと、前年度及び5年平均比でそれぞれ 0.4%減、0.1%減の見込み。デュラム小麦は、生産量1位のカナダが減少(前年度比 29.9%減)となる中、2番目の EU も減少となる見込み。

フランス農業・食料・主権省によれば、主要生産国であるフランスの普通小麦は、収穫時の降雨の影響を受け、たんぱく質含有量が9月末時点で、11.6%と前年度(12.4%)を下回った。一方、デュラム小麦は降雨により一部で容積重が低下したが、たんぱく質含有量は 14.2%と前年度(14.0%)を上回っている。

フランスアグリメールによれば、10月2日現在の 2024/25 年度の普通小麦の播種進捗率は、前年度並みの 2%であるものの、5年平均の 4%を下回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく 37.5 百万トンと、前年度に比べ 6.9%増加の見込み。なお、10月9日時点の輸出価格(FOB)は、アジアやアフリカからの堅調な需要もロシア産との競合から値が抑えられ、247 ドル/トンと、主要輸出6か国(米国の項を参照)でロシアに続く2番目の低水準である。

なお、欧州委員会によれば、7月の輸出量は普通小麦が 313.5 万トン(前年度同期比 6.2%増)、デュラム小麦は 2.0 万トン(同 72.2%減)。輸出先国は普通小麦がモロッコ(28.0%)、アルジェリア(14.6%)、韓国(8.0%)の順。デュラム小麦はキューバ(23.1%)、スイス(13.6%)、サウジアラビア(8.6%)の順。なお、世界のデュラム小麦の輸出量に占める EU のシェアは、カナダに次ぎ世界第2位となっている。

ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題に関し、欧州委員会は 9月15日、ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ブルガリア及びルーマニアにおけるウクライナ産の小麦、とうもろこし等4品目のトランジットを除く輸入禁止の解除を決定。この5ヵ国のうち、ポーランド、ハンガリー及びスロバキアは、ウクライナ産穀物のトランジットを認めながらも、独自の規制を継続。9月26日、ウクライナは近隣5ヵ国への上記品目の輸出をライセンス制にすることを提案。ルーマニア及びブルガリアは、輸出ライセンス方式を協議中。また、ルーマニアではウクライナ産穀物輸送用にモルドバ経由の鉄道ルートが開通する見込み。

小麦－EU27（冬小麦を主に栽培）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	138.2	134.2	134.0 (132.5)	-	▲ 0.1
消 費 量	108.3	108.0	108.5 (108.3)	-	0.5
うち飼料用	45.0	44.0	44.0 (44.0)	-	-
輸 出 量	31.9	35.1	37.5 (36.2)	-	6.9
輸 入 量	4.6	12.1	7.5 (6.2)	-	▲ 38.0
期末在庫量	13.3	16.5	12.0 (13.2)	0.1	▲ 27.3
期末在庫率	9.5%	11.5%	8.2% (9.1%)	0.0	▲ 3.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	24.29	24.38	24.25 (23.89)	-	▲ 0.5
単収(t/ha)	5.69	5.50	5.53 (5.55)	-	0.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2023)
IGC 「Grain Market Report」(21 September 2023)

図 EU産デュラム小麦の生産量の推移

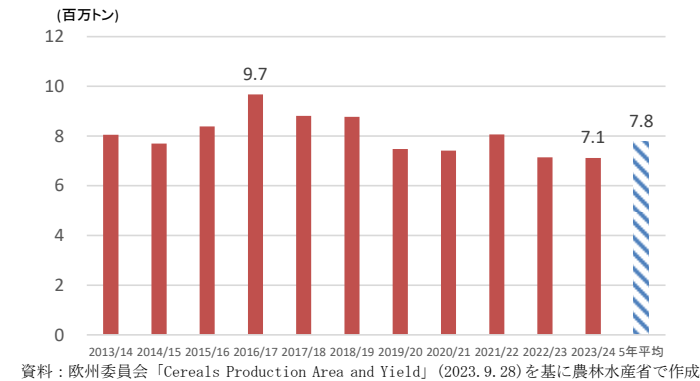


表 EU産デュラム小麦の輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年7月)			2022/23年度 (2022年7月)			2022/23年度 (2022年7月～2023年6月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
キューバ	0.5	23.1	アルジェリア	3.1	43.6	チュニジア	13.2	15.4
スイス	0.3	13.6	英国	1.1	15.4	アラブ首長国連邦	9.1	10.6
サウジアラビア	0.2	8.6	リビア	1.1	15.2	タンザニア	8.9	10.4
マリ	0.1	7.2	コートジボワール	0.8	10.4	イスラエル	6.6	7.7
モロッコ	0.1	6.8	サウジアラビア	0.3	3.5	英国	6.3	7.4
その他	0.8	40.7	その他	0.9	11.9	その他	41.7	48.5
計	2.0	100.0	計	7.2	100.0	計	86.0	100.0

資料：欧州委員会「Cereals export and import」(2023.9.28)を基に農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2023/24 年度の生産量は、137.0 百万トンと史上 2 番目

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、137.0 百万トンの見込み。史上最高となった前年度に比べ、収穫面積は増加したものの単収の低下から、生産量は 0.5% 減少した。中国の実産量は、2018/19 年度から毎年増加し、2022/23 年度に史上最高の 137.7 百万トンとなったものの、2023/24 年度の実産量は、単収の低下から史上 2 番目となる見込み。なお、5 月下旬に河南省等で収穫期に降雨の影響を受け、小麦の一部で穂発芽やカビが発生し小麦の品質が低下した。

中国国家気象センター「中国気象農業報道」(2023.10.13)によれば、10 月上旬から、2024/25 年度の冬小麦の播種が開始されている。甘粛省等の西北地域では冬小麦の播種進捗率が 20%以上となった。また、河南省等の黄淮地域、四川省等の西南地域でも播種が開始された。なお、冬小麦の主要生産地の大部分では播種に適した天候に恵まれ、土壌水分も良好である。また、農業農村部によれば、異常気象などの影響を受けて病害虫被害が増加傾向にあるため、病害虫に耐性のある品種の栽培や、田畑の管理強化(土壌を 2～3 年に 1 回深く耕すことや除草)等が奨励されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、153.0 百万トンと前年度に比べ 3.4%増加する見込み。消費量のうち飼料用消費は、5 月下旬の降雨による品質低下から飼料用小麦の供給が増加したことを受け 37.0 百万トンと、前年度に比べ 12.1%増加する見込み。

2023/24 年度の実輸入量は、前月予測からの変更はなく 11.0 百万トンと、中国国内での飼料用小麦の供給量増加や、豪州やカナダの実産減による輸出量の減少から、前年度に比べ 17.2%減少の見込み。

中国税関統計によれば、2023 年 1 月から 8 月までの輸入量合計は 955.7 万トン。月別の輸入量では、5 月まで 110 万トン台～160 万トン台で推移したものの、6 月以降減少傾向となり、70 万トン台～80 万トン台で推移している。この間の輸入先国のシェアは、豪州が 63.0%、カナダが 17.6%、フランスが 8.6%で、この 3 か国で 89.2%を占めている。なお、5 月以降は、豪州からの輸入量が減少傾向となる一方、カザフスタンからの輸入量が増加している。

「農産品供需形勢分析月報 2023 年 8 月号」等によれば、国内市場の供給面では、新穀は例年 7 月から市場に大量に出回るものであるが、本年はその前に農家や業者からの小麦販売意欲が高まっており、供給量は増加するとみられている。また、需要面では、中秋節と国慶節が近づいており、小麦粉需要の高まりとともに製粉工場の稼働率が上昇する見込みであるため、小麦の国内市場価格は上昇傾向となるとみられている。

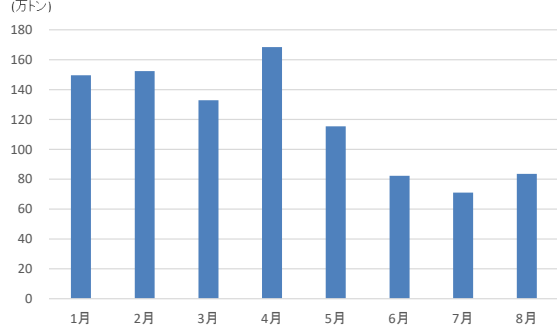
小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

(単位: 百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	137.0	137.7	137.0 (136.5)	-	▲ 0.5
消 費 量	148.0	148.0	153.0 (149.5)	-	3.4
うち飼料用	35.0	33.0	37.0 (32.0)	-	12.1
輸 出 量	0.9	1.0	0.9 (1.2)	-	▲ 5.3
輸 入 量	9.6	13.3	11.0 (11.7)	-	▲ 17.2
期末在庫量	136.8	138.8	132.9 (137.9)	-	▲ 4.3
期末在庫率	91.9%	93.2%	86.4% (91.6%)	-	▲ 6.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.57	23.52	23.70 (23.70)	-	0.8
単収(t/ha)	5.81	5.86	5.78 (5.76)	-	▲ 1.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2023)
IGC 「Grain Market Report」(21 September 2023)

図 中国の月別小麦輸出量(2023 年)



資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

図 中国の小麦輸入量及び輸入先国

2023年8月			2023年1月～2023年8月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
豪州	46.3	55.3	豪州	602.0	63.0
カナダ	23.8	28.4	カナダ	168.3	17.6
カザフスタン	10.4	12.4	フランス	82.1	8.6
ロシア	2.2	2.6	米国	55.4	5.8
米国	0.5	0.6	カザフスタン	34.0	3.6
その他	0.5	0.6	その他	13.9	1.5
計	83.7	100.0	計	955.7	100.0

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

< ロシア > 2023/24 年度の輸出量は史上最高の 50.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測からの変更はなく、85.0 百万トンの見込み。播種期の降雨過多による収穫面積の減少と単収の低下から、生産量は史上最高であった前年度(92.0 百万トン)に比べ 7.6%減少するものの、過去 5 年平均(79.6 百万トン)を 6.8%上回る見込み。種類別の生産量は、冬小麦、春小麦いずれも前月予測からの変更はなく、それぞれ 60.5 百万トン(前年度比 11.0%減)、24.5 百万トン(同 2.1%増)の見込み。

ロシア農業省の速報値によれば、10 月 13 日時点の生産量(品質調整前重量)は収穫進捗率 94.1%で 92.2 百万トン。また、現地情報会社によれば、生育期の干ばつと収穫時の降雨の影響を受け沿ボルガ地域で前年度に比べ減少するものの、ロシア南部等で史上最高であった前年度に近い豊作となることから、ロシア全体の生産量は USDA の予測を上回る 90.0 百万トン(品質調整後)と、史上最高の前年度に次ぐ豊作となる見込み。

ロシア気象センターによれば、2024/25 年度の冬小麦の生育状況は、①ヨーロッパ部北部の北西連邦管区等で、出芽期から分けつ期を迎えている。一部地域では土壌水分不足の懸念があるものの、作柄は概ね良好。また、ヨーロッパ部南部の南連邦管区等では、出芽期から子葉生成期を迎えている。作柄は、一部で土壌水分不足から不良となったものの、概ね平年並みとなっている。②アジア部では、生育段階は出芽期から分けつ期となっており、作柄は良好～並みである。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、好調な輸出等から、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され 50.0 百万トンと、史上最高の前年度(47.5 百万トン)を更に 5.3%上回る見込み。同年度の輸出量は、ウクライナ侵攻前の 5 か年平均輸出量(35.7 百万トン)と比べ 14.3 百万トン増加しており、ウクライナの輸出減少分(9.0 百万トン：同 5 か年平均輸出量 20.0 百万トンと 2023/24 年度輸出量 11.0 百万トンの差)を上回る。輸出量増加の背景に、生産量と期首在庫量を合わせた国内供給量が 99.6 百万トンと潤沢なことがある。こうした潤沢な供給量を受け、10 月 9 日時点の輸出価格(FOB)は、前月から 18 ドル/トン下落し 232 ドル/トンと EU の 247 ドル/トンを下回り、輸出主要 6 か国(米国の項を参照)中で最低となった。

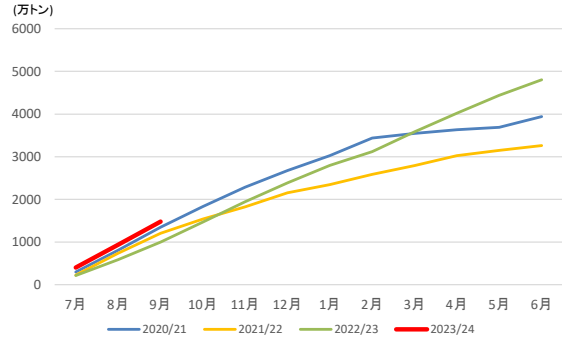
9 月のロシアの輸出量は、9 月単月では史上最高の 543.0 万トンとなり、過去 3 年の 9 月平均(472.7 万トン)を 14.9%上回った。輸出先国は、エジプト(14.3%)、トルコ(11.2%)、イラン(9.0%)の順で、北アフリカ、中東諸国向けが多い。なお、現地情報会社によれば、在庫量が増加したルーマニアやポーランドとの競合が強まり、10 月の小麦輸出量は 390～440 万トンに減少するとみられている。

小麦ーロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)			
			予測値、() は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	75.2	92.0	85.0	(87.4)	-	▲ 7.6
消 費 量	41.8	42.3	41.0	(43.6)	▲ 1.0	▲ 3.0
うち飼料用	18.5	19.0	18.0	(19.0)	▲ 1.0	▲ 5.3
輸 出 量	33.0	47.5	50.0	(48.6)	1.0	5.3
輸 入 量	0.3	0.3	0.3	(0.1)	-	-
期末在庫量	12.1	14.6	8.9	(10.7)	▲ 1.5	▲ 38.9
期末在庫率	16.2%	16.3%	9.8%	(11.6%)	▲ 1.6	▲ 6.5
(参考)						
収穫面積(百万ha)	27.63	29.00	28.30	(27.87)	-	▲ 2.4
単収(t/ha)	2.72	3.17	3.00	(3.14)	-	▲ 5.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2023)
IGC 「Grain Market Report」(21 September 2023)

図：ロシアの小麦輸出量の年度別推移



資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

表：ロシア産小麦の輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年9月)			2023/24年度 (2023年7月～2023年9月)			2022/23年度 (2022年7月～2023年6月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
エジプト	77.5	14.3	エジプト	209.9	14.2	エジプト	836.8	17.4
トルコ	60.9	11.2	トルコ	157.3	10.7	トルコ	682.1	14.2
イラン	49.1	9.0	アルジェリア	92.9	6.3	バングラデシュ	199.2	4.1
パキスタン	26.9	5.0	バングラデシュ	82.8	5.6	パキスタン	155.2	3.2
バングラデシュ	23.3	4.3	サウジアラビア	80.7	5.5	イラン	149.6	3.1
インドネシア	23.1	4.3	イラン	73.2	5.0	アゼルバイジャン	136.9	2.8
イエメン	18.3	3.4	イスラエル	66.9	4.5	カザフスタン	125.5	2.6
その他	263.9	48.6	その他	711.5	48.2	その他	2,521.5	52.5
計	543.0	100.0	計	1,475.2	100.0	計	4,806.8	100.0

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 2024/25 年度の冬小麦の播種が開始されたものの、乾燥の懸念

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく22.5百万トンの見込み。前年度に比べた生産量は、収穫面積の減少も、良好な天候による単収の上昇により前年度(21.5百万トン)を4.7%上回るものの、5年平均(26.8百万トン)を16.1%下回る。

ウクライナ農業政策食料省によれば、冬小麦の収穫は、10月12日現在で4.69百万ヘクタール(前年同期4.70百万ヘクタール)となりほぼ終了した。単収は4.73トン/ヘクタール(同4.10トン/ヘクタール)で、収穫済数量は、22.2百万トン(同19.2百万トン)である。

一方、2024/25年度の冬小麦の播種が例年どおり9月初めから開始されており、10月16日現在の播種面積は3.34百万ヘクタールと前年度(2.78百万ヘクタール)を上回り、作付け進捗率は65%となった。生育段階は、播種が早かった圃場では分けつ期に入っている。なお、8月下旬からほとんど降雨がなく、8月末で穀物全体の50～60%の圃場が干ばつ状態であった。9月も引き続き降雨は少なく、ウクライナ西部の一部を除き国内の殆どの地域で40～55日間にわたり十分な降雨がない。さらに、高温と乾燥した風による影響で干ばつ状態が深刻化している。このため、ウクライナ東部の一部では、土壌水分不足により播種後20～25日経過しても出芽しない状況もある。現地情報によれば、近年の温暖化の影響を受け冬穀物の播種可能な時期が長くなっており、播種作業期間の延長が可能となっている。2024/25年度は10月半ば以降に降雨が予測されていることから、例年より遅い冬小麦の播種の続行が可能とみられている。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、11.0百万トンとなるものの、前年度及び5年平均をそれぞれ35.7%、38.8%下回る見込み。前年度からの輸出量減少の要因は、生産量は増加したものの、期首在庫量が1.3百万トンと平年並み(2021/22年度までの5年平均1.5百万トン)に戻り、輸出余力が減少するためである。

ウクライナ政府等によれば、2023年9月の輸出量は131.0万トンと前年度同期に比べ26.8%減少し、戦争前の2018/19年度～2020/21年度の9月平均に比べると59.8%の減少である。また、9月の輸出先国は、スペイン(25.7%)、ルーマニア(25.4%)、エジプト(14.1%)の順で、現在のところ、黒海穀物イニシアチブ履行時の輸出先国と大きな変化はない。なお、例年7月から新穀の出回りにより輸出量は増加するが、黒海イニシアチブの履行停止を受け低調な輸出量となっている。輸出量減少の要因は、ウクライナ産代替ルートがコスト高である一方、国際価格が世界の潤沢な小麦供給を受けて低水準なこともある。

小麦－ウクライナ（主に冬小麦を栽培）

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	33.0	21.5	22.5 (25.9)	-	4.7	
消費量	10.5	8.4	8.8 (12.2)	-	4.8	
うち飼料用	4.5	3.4	4.2 (3.0)	-	23.5	
輸 出 量	18.8	17.1	11.0 (12.0)	-	▲ 35.7	
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	33.3	
期末在庫量	5.3	1.3	4.1 (4.3)	▲ 0.0	213.8	
期末在庫率	18.0%	5.1%	20.6% (17.6%)	▲ 0.2	15.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.41	5.60	5.00 (5.85)	-	▲ 10.7	
単収(t/ha)	4.45	3.84	4.50 (4.42)	-	17.2	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2023)
IGC 「Grain Market Report」(21 September 2023)

写真：出芽期を迎えた冬小麦



今年は小麦価格が低水準だが、播種の規模は昨年並み。冬小麦の状態は良好で、生育ステージは出芽期。今後、必要に応じて、農薬を使用する。
(ドニプロペトロウスク州 2023.10.2)

表：ウクライナ産小麦の輸出量、輸出先国

(輸出量:万トン、シェア:%)

2023/24年度 (2023年9月)			2023/24年度 (2023年7月～2023年9月)			2022/23年度 (2022年7月～2023年6月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
スペイン	33.7	25.7	ルーマニア	93.2	27.9	トルコ	367.1	21.7
ルーマニア	33.3	25.4	スペイン	79.3	23.8	ルーマニア	264.6	15.7
エジプト	18.5	14.1	エジプト	45.4	13.6	スペイン	255.7	15.1
トルコ	5.2	4.0	イタリア	17.7	5.3	バングラデシュ	108.7	6.4
レバノン	5.0	3.8	トルコ	15.9	4.8	ポーランド	87.6	5.2
イタリア	4.9	3.7	ギリシャ	15.6	4.7	エジプト	85.6	5.1
ギリシャ	4.6	3.5	レバノン	9.6	2.9	イタリア	59.4	3.5
その他	25.8	19.7	その他	56.9	17.1	その他	743.4	44.0
計	131.0	100.0	計	333.6	100.0	計	1,690.0	100.0

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・米国で下方修正されたものの、アルゼンチン、EU 等で上方修正され、前月から上方修正された。

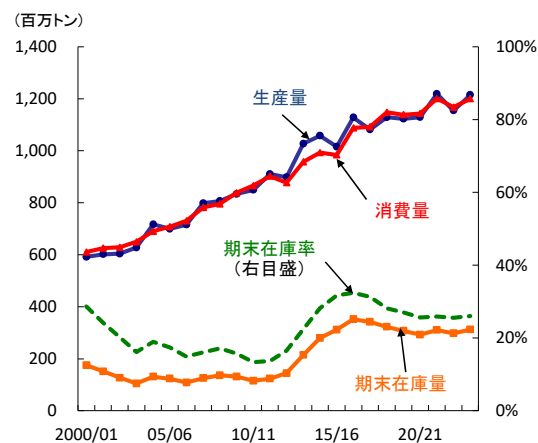
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・米国等で下方修正されたものの、アルゼンチン、EU 等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・米国で下方修正されたものの、アルゼンチン等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2023.10.12）をもとに農林水産省にて作成

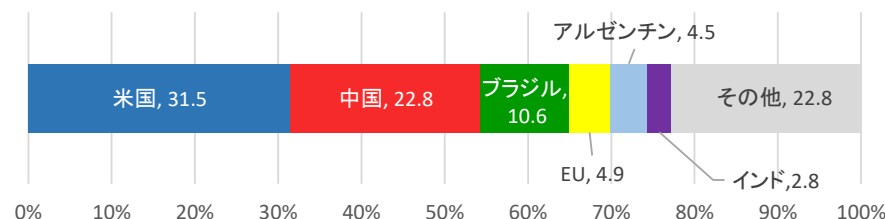
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

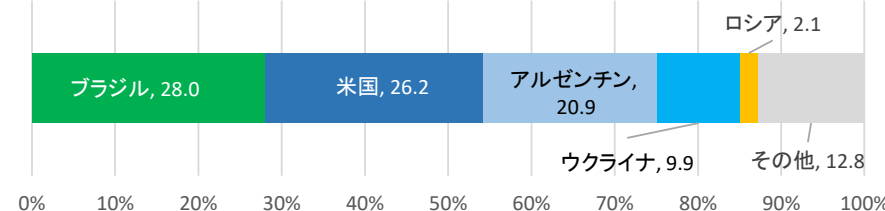
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	1,218.7	1,155.0	1,214.5	0.2	5.1
消 費 量	1,201.1	1,167.4	1,200.2	0.4	2.8
うち飼料用	745.2	731.8	756.3	0.2	3.4
輸 出 量	206.6	181.0	196.3	0.1	8.4
輸 入 量	184.4	174.2	186.9	▲ 0.2	7.3
期末在庫量	310.5	298.1	312.4	▲ 1.6	4.8
期末在庫率	25.9%	25.5%	26.0%	▲ 0.1	0.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 October 2023)

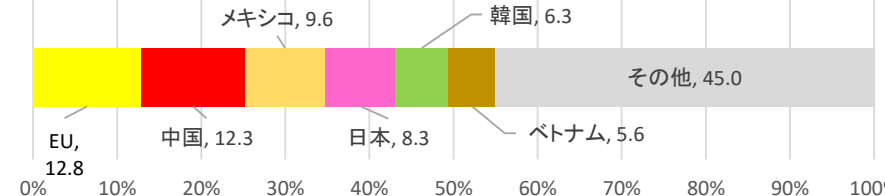
○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,214.5 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸出量(196.3 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸入量(186.9 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量が下方修正も、史上３番目の豊作見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、単収の引下げにより前月予測から 1.8 百万トン下方修正されたものの、収穫面積の増加等を受けて前年度より 9.8% 増の 382.7 百万トンと、2016/17 年度、2021/22 年度に次ぐ史上３番目の高水準となる見通し。

USDA 「Crop Progress」(2023.10.16) によれば、10 月 15 日現在で主要 18 州における成熟進捗率は 95% と、前年度同期 (93%)、過去 5 年平均 (92%) を上回っている。収穫進捗率も 45% と、前年度同期 (43%)、過去 5 年平均 (42%) を上回っている。作柄評価が「良～やや良」の比率は 53% と、前週と変わらず、前年度同期並みである。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、供給減により飼料用需要が下方修正されたことにより前月予測から 0.6 百万トン下方修正されたものの、飼料用、エタノール用等の需要の増加により、前年度に比べ 1.7% 増の 312.8 百万トンの見通し。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、国内供給の減少と年度当初の輸出需要が低調なことから前月予測より 0.6 百万トン下方修正されたものの、国際的なとうもろこし価格低下に伴う需要増加を受けた輸出の回復期待から、前年度より 21.9% 増の 51.4 百万トンの見込み。他方で、2023/24 年度に輸入が増加すると見込まれる中国への輸出をめぐる、旧穀の収穫が終了し史上最高の生産見通しとなったブラジル産等との輸出競争が激化する見通し。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2023.10.12) によれば、本年 10 月の米国産の輸出価格は、ミシシッピ川における水位低下等によるブラジル産等への切替えによる需要減を受け、10 月 10 日現在、前月から 6 ドル/トン低下し 229 ドル/トン。なお、2023 年 9 月の輸出量は 298 万トンと、前年同月の 272 万トンより 9 % 増加。輸出先国の内訳はメキシコ (33.2 万トン)、フィリピン (25.8 万トン)、中国 (18.4 万トン) の順となっている。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、2023/24 年の生産量が下方修正されたため前月予測から 2.8 百万トン下方修正されたものの、増産により前年度より 55.1% 増の 53.6 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度より 4.8 ポイント上昇し 14.7% と、過去 3 年平均 (9.1%) を上回っている。

とうもろこしー米国

(単位: 百万トン)

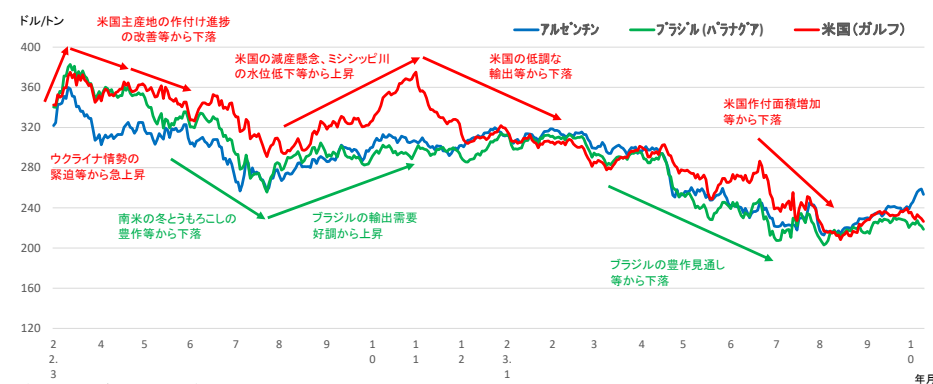
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年9月～24年8月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	382.9	348.4	382.7	▲ 1.8	9.8
消 費 量	317.1	307.6	312.8	▲ 0.6	1.7
うち飼料用	145.5	140.9	142.3	▲ 0.6	0.9
エタノール用等	135.1	131.5	134.6	-	2.4
輸 出 量	62.8	42.2	51.4	▲ 0.6	21.9
輸 入 量	0.6	1.0	0.6	-	▲ 34.7
期末在庫量	35.0	34.6	53.6	▲ 2.8	55.1
期末在庫率	9.2%	9.9%	14.7%	▲ 0.7	4.8

(参考)

収穫面積 (百万ha)	34.53	32.05	35.25	-	10.0
単収 (t/ha)	11.09	10.88	10.86	▲ 0.05	▲ 0.2

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2023)

図: 米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格 (FOB) の推移



資料: IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 2023/24 年度の生産量は大豆等への転換により減少

【生育・生産状況】USDAによれば、本年9月以降に作付けが開始されている2023/24年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度より5.8%減の129.0百万トンの見通し。

ブラジル食料供給公社（CONAB）の月例報告（2023.10.12）によれば、2023/24年度の実産量は、前年度比9.5%減の119.4百万トンの見込み（P.23大豆ーブラジルのクロップカレンダー参照）。生産量の減少は、とうもろこしの市場価格の低下により大豆等に作付けがシフトし、収穫面積が21.2百万ヘクタールと前年度より6.7%減少することによるとみられる。

2023/24年度の夏とうもろこしについて、10月9日現在、南部のパラナ州の作付進捗率は85%と前年度同期（78%）を上回っている。他方、10月12日現在、南部のリオ・グランデ・ド・スール州の作付進捗率は65%と、前年度同期（70%）を下回っている。9月から10月上旬にかけて、ブラジル南部では、全体として発芽に適量の降雨があったものの、リオ・グランデ・ド・スール州等の一部地域では降雨過多となり作付けの遅れや土壌の水分過多がみられる。

なお、生産量の約8割を占める冬とうもろこしについては、大豆の収穫を待って来年2月以降作付けが行われる。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用、加工用ともに需要増加等から、前年度より2.9%増の77.5百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、史上最高となった前年度より3.5%減の55.0百万トンとなるものの、引き続き高水準の実産量と競争力のある安価な輸出価格から、2年連続で世界最大の輸出国となる見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023年1～9月の輸出量は34.0百万トンで、前年度比38%増。内訳は、中国（7.9百万トン）、日本（4.1百万トン）、ベトナム（2.6百万トン）の順。前年11月末以降に開始された中国向けとうもろこし輸出は、大豆の輸出が一巡し、輸送や港湾の輸出キャパシティに余裕が出てきた7月以降、本格化し始めている。9月の中国向け輸出量は3.3百万トンで、8月（2.3百万トン）の1.4倍となっている。

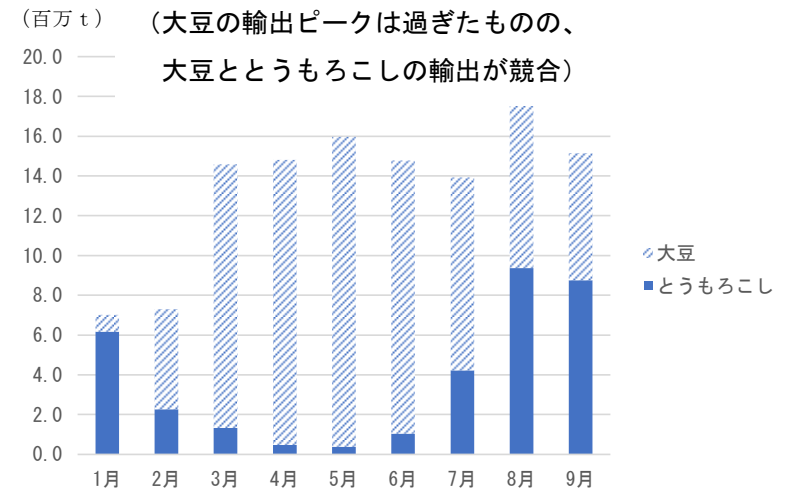
とうもろこしーブラジル

（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが約8割、夏とうもろこしは約2割）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（24年3月～25年2月）			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	116.0	137.0	129.0 (130.2)	-	▲ 5.8	
消 費 量	70.5	75.3	77.5 (79.2)	-	2.9	
うち飼料用	59.5	62.8	63.5 (54.3)	-	1.1	
輸 出 量	48.3	57.0	55.0 (51.0)	-	▲ 3.5	
輸 入 量	2.6	1.7	1.2 (0.5)	-	▲ 28.6	
期末在庫量	4.0	10.4	8.1 (10.8)	0.1	▲ 22.2	
期末在庫率	3.3%	7.8%	6.1% (8.3%)	0.1	▲ 1.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	21.80	22.40	22.90 (22.63)	-	2.2	
単収(t/ha)	5.32	6.12	5.63 (5.75)	-	▲ 8.0	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2023)
IGC 「Grain Market Report」(21 September 2023)

図：ブラジルのとうもろこし・大豆輸出量の推移（2023年）



資料：ブラジル農務省「AgroStat Brasil」をもとに農林水産省にて作成。

＜ アルゼンチン ＞ 2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始されている 2023/24 年度の実生産量は、収穫面積の引上げにより前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、高温・乾燥により生産量が激減した前年度から大きく回復する見通しから、61.8%増の 55.0 百万トンで史上最高となる見込み。

USDA によれば、早植えとうもろこしの作付けは 9 月末から 12 月上旬まで続き、12 月上旬から遅植えとうもろこしの作付けが始まる。

ブエノスアイレス穀物取引所の週報（2023.10.19）によれば、作付進捗率は 19.9%と、干ばつの影響を受けた前年度同期（17.0%）を上回ったものの、降雨不足により過去 5 年平均を下回っている。降雨不足と低温の影響を受け、遅植えとうもろこしの作付割合が高まる見込み。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、生産量の増加に伴い需給が緩和し、飼料用需要が回復することから、前年度より 20.5%増の 14.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、高温・乾燥により減産した前年度から生産量が大きく回復し、供給余力が出てくる見通しから、前年度より 78.3%増の 41.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 1～8 月の輸出量は 17.5 百万トンで、2022/23 年度産が減産となった影響を受け、前年度同期比（27.5 百万トン）で 36%減となった。輸出先の内訳は、ベトナム（249.1 万トン）、ペルー（183.7 万トン）、アルジェリア（164.6 万トン）の順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、継続している。2021 年 12 月 17 日、アルゼンチンの農牧水産大臣は、とうもろこしと小麦の輸出に関し、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定することを表明。2023 年 10 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2021/22 年度 36 百万トン、2022/23 年度 20 百万トンにそれぞれ設定されている。

とうもろこしーアルゼンチン

（単位：百万トン）

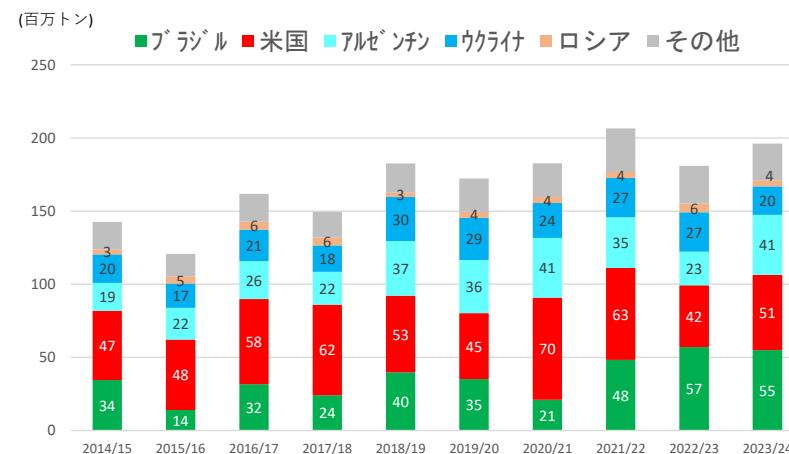
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（24年3月～25年2月）		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	49.5	34.0	55.0 (61.0)	1.0	61.8
消 費 量	14.2	11.7	14.1 (20.4)	0.5	20.5
うち飼料用	10.1	7.5	9.8 (15.5)	0.5	30.7
輸 出 量	34.7	23.0	41.0 (40.9)	0.5	78.3
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	1.8	1.1	1.0 (3.6)	-	▲ 9.0
期末在庫率	3.7%	3.2%	1.8% (5.9%)	▲ 0.0	▲ 1.4

（参考）

収穫面積(百万ha)	7.10	6.70	7.10 (8.20)	0.10	6.0
単収(t/ha)	6.97	5.07	7.75 (7.44)	0.04	52.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2023)
IGC「Grain Market Report」(21 September 2023)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移
（2023/24 年度、アルゼンチンは世界第 3 位に戻る見通し）



資料：USDA「PS&D」(2023. 10. 12) のデータをもとに農林水産省にて作成

< 中国 > 主産地の降雨過多の影響を受けるも、生産量は史上2番目

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、作付けが大豆へシフトすることに加え主産地の降雨過多から、前年度より0.1%減の277.0百万トンとなるも、前年度に次ぐ史上2番目の見込み。

9月末現在、黒竜江省等が主産地の春とうもろこし、河南省等が主産地の夏とうもろこしのいずれも、乳熟期から完熟期を迎えており、一部地域では収穫が開始されている。

USDAによれば、黒竜江省等の東北地区において9月に平年並みの降雨があり、とうもろこしの成熟に好影響を与える見通し。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、とうもろこし国際価格の低下等から、前年度より1.7%増の304.0百万トンと史上最高の見込み。背景には、国内の堅調な食肉需要があるとみられる。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の実輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内の飼料用需要の増加を背景として、国内価格が国際価格を上回っているほか、特に前年末から開始されたブラジルからの輸入が増加すると予想されていることもあり、前年度より24.3%増の23.0百万トンの見込み。

農業農村部によれば、2023年1～8月の輸入量は、前年同期より12.0%減の1,491.0百万トン。内訳は、米国（601.6百万トン）、ウクライナ（521.3百万トン）、ブラジル（252.7百万トン）の順。2023年4月以降、米国産の輸入量が前年同月より大きく減少しており、その背景として、米国産が他国産に比べて割高であることから輸入を控え、安価なブラジル産とうもろこしや他の穀物を飼料向けに代替する動きがあるとみられる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023年8月号」によると、8月の国内価格は、降雨過多による生産懸念や輸送コストの上昇を受け、2,920元/トンと前月（2,820元/トン）から上昇した。

USDAによれば、2023/24年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、国内の堅調な飼料用需要の増加を背景とした消費量の増加により前年度より2.0%減の201.8百万トンの見込み。2023/24年度の期末在庫率は、前年度から2.5ポイント減の66.4%となる見込み。

とうもろこし—中国

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年10月～24年9月）			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	272.6	277.2	277.0 (277.4)	-	▲ 0.1	
消 費 量	291.0	299.0	304.0 (305.5)	-	1.7	
うち飼料用	209.0	218.0	223.0 (205.0)	-	2.3	
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-	
輸 入 量	21.9	18.5	23.0 (22.0)	-	24.3	
期末在庫量	209.1	205.8	201.8 (169.9)	-	▲ 2.0	
期末在庫率	71.9%	68.8%	66.4% (55.6%)	-	▲ 2.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	43.32	43.07	43.00 (43.00)	-	▲ 0.2	
単収(t/ha)	6.29	6.44	6.44 (6.45)	-	-	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2023)
IGC「Grain Market Report」(21 September 2023)

表：中国のとうもろこし輸入量と輸入先国

（輸入量：万トン、シェア：%）

2023年8月			2023年1月～2023年8月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
米国	45.1	37.6	米国	601.6	40.4
ウクライナ	32.7	27.3	ウクライナ	521.3	35.0
ブラジル	25.4	21.2	ブラジル	252.7	16.9
ブルガリア	13.9	11.6	ブルガリア	62.8	4.2
ロシア	2.2	1.8	ロシア	22.4	1.5
ミャンマー	0.4	0.4	ミャンマー	17.9	1.2
その他	0.2	0.1	その他	12.3	0.7
計	119.9	100	計	1,491.0	100

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

< ウクライナ > 2023/24 年度の生産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 33.5%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積が減少も、天候に恵まれ単収が上昇することを受け、前年度より 3.7%増の 28.0 百万トンとなったものの、侵攻前の 2021/22 年度比では 33.5%減となる見通し。

なお、ウクライナ国内の地域別でみると、ロシアの侵攻を受けた東部地域での生産動向は統計に含まれていないこともあり、当該東部地域を除くエリアでの生産が国全体としての増産に貢献したとみられる。なお、とうもろこしの生産地域は北部から中央部であり、USDA によれば、ウクライナ侵攻前の生産量のシェアは、東部地域を除くエリアが 9 割以上を占めていた。

USDA によれば、9 月にかけて温暖で乾燥した気候が広がり、収穫が進展した。

ウクライナ農業政策食料省によれば、10 月 12 日現在の収穫進捗率は 21.8%と、前年度同期 (5.4%) より進んでいる。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 5.8%増の 5.5 百万トンの見込み。背景には、戦争直後の 2022/23 年度と比較し、畜産物生産が回復することによる飼料用需要の増加があるとみられる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、供給量の減少や主要輸出先である EU での増産による輸入需要の減少の影響を受け、前年度より 27.8%減、侵攻前の 2021/22 年度からも 27.8%減の 19.5 百万トンの見込み。

ウクライナ政府等によれば、2022/23 年度の年間の輸出量は 2,721 万トン (海上輸送、陸路等での全ての輸出が含まれる)。輸出先国は、中国 (563 万トン)、ルーマニア (393 万トン)、スペイン (291 万トン)、イタリア (237 万トン)、エジプト (225 万トン) の順。

現地報道によれば、黒海イニシアティブの履行停止により、ウクライナ産穀物の鉄道や他国の港を活用した代替輸出ルートが検討されている。詳細は、概要編 P.3 参照。

ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題に関し、詳細は、品目別 P.5 小麦－EU 参照。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、2022/23 年度の実輸出量の引下げを受けて前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度より 125.3%増の 5.4 百万トンの見込み。2023/24 年度の期末在庫率は、前年度から 14.2 ポイント増の 21.7%となる見込み。

とうもろこし－ウクライナ

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)	
生 産 量	42.1	27.0	28.0 (28.0)	-	3.7	
消 費 量	8.4	5.2	5.5 (6.3)	-	5.8	
うち飼料用	7.2	4.0	4.5 (4.5)	-	12.5	
輸 出 量	27.0	27.0	19.5 (18.0)	-	▲ 27.8	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	7.6	2.4	5.4 (5.0)	1.0	125.3	
期末在庫率	21.5%	7.5%	21.7% (20.7%)	4.0	14.2	

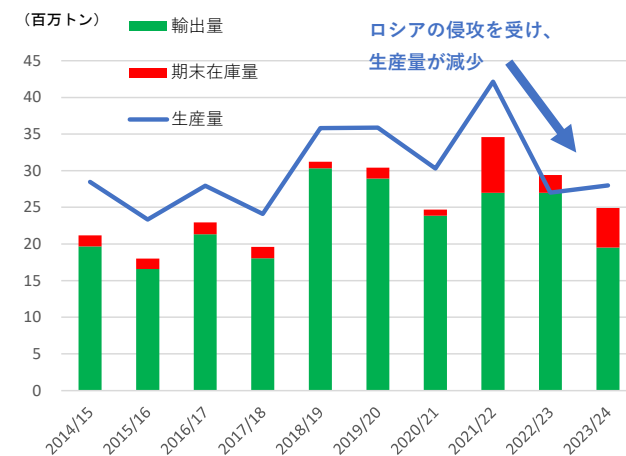
(参考)

収穫面積(百万ha)	5.49	4.05	4.00 (4.06)	-	▲ 1.2
単収(t/ha)	7.68	6.67	7.00 (6.91)	-	4.9

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2023)

IGC 「Grain Market Report」(21 September 2023)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移

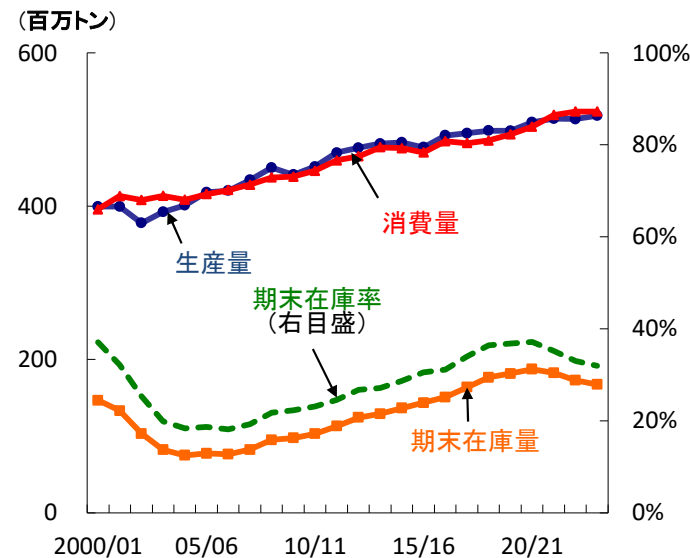


資料：USDA 「PS&D」 (2023. 10. 12) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>			2023/24 年度	
生産量	前年度比	前月比	前年度比	前月比
・ 日本、米国等で下方修正も、コロンビア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。				
消費量	前年度比	前月比	前年度比	前月比
・ 日本、ベトナム等で下方修正されたものの、インドネシア、中国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。				
輸出量	前年度比	前月比	前年度比	前月比
・ ベトナム、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。				
期末在庫量	前年度比	前月比	前年度比	前月比



資料：USDA「PS&D」(2023. 10. 12)をもとに農林水産省にて作成

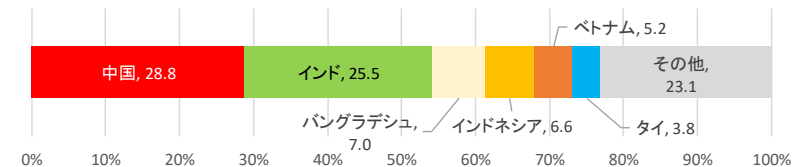
◎世界のコメ需給

(単位：百万精米トン)

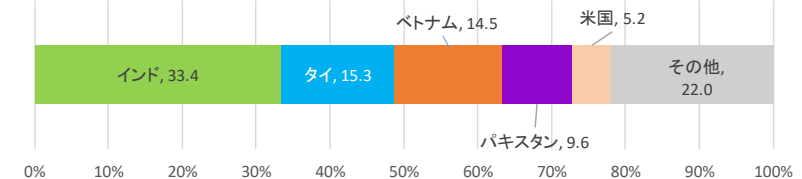
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	514.4	513.7	518.1	0.1	0.9
消 費 量	519.0	523.5	523.5	0.8	0.0
輸 出 量	56.9	54.7	52.3	0.2	▲ 4.3
輸 入 量	54.5	54.7	49.7	▲ 0.1	▲ 9.1
期末在庫量	182.6	172.9	167.5	▲ 0.1	▲ 3.1
期末在庫率	35.2%	33.0%	32.0%	▲ 0.1	▲ 1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 October, 2023)

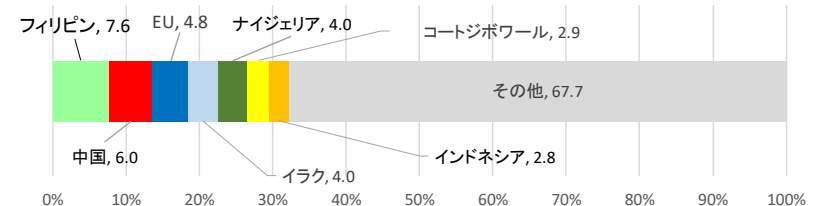
○ 2023/24年度 世界のコメの生産量(518.1百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸出量(52.3百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸入量(49.7百万トン) (単位：%)



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 2023/24 年度の生産量は収穫面積・単収の増加で前年度比 37.5%増

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、統計調査に基づく単収の微減から、前月予測からわずかに下方修正されたものの、特に 2 年連続の干ばつに見舞われ生産量が激減していた中・短粒種の生産が回復することから、前年度比 37.5%増の 7.0 百万トンと、2020/21 年度以来の高水準となる見込み。なお、単収 (8.67 もみトン／ヘクタール) は依然として史上最高値。また、中・短粒種の生産量は 2.2 百万トンと、前年度比で 2.1 倍。

同「Crop Progress」(2023.10.16) によれば、10 月 15 日時点で主要生産 6 州の収穫進捗率は 88%と、前年同期及び過去 5 年平均 (いずれも 88%) と同水準となっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、増産による供給量増加の見込みから、前年度比 11.3%増の 5.1 百万トンと、史上最高の見込み。

2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内の生産量増加に伴う中・短粒種の輸入減少から、前年度比 2.4%減の 1.2 百万トンの見込み。

2023/24 年度の輸出量は、国内生産量の増加と、それに伴う価格競争力の改善から、前月予測よりわずかに上方修正され、前年度比 32.4%増の 2.7 百万トンの見込み。

USDA 「Rice Outlook」(2023.10.14) によれば、10 月 10 日までの週のイラク向け長粒種 (2 等、碎米 4 %混入) の価格は 760 ドル/トンと、2008 年 10 月初旬 (772 ドル/トン) 以来の高値が本年 1 月末より続いている (P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照)。一方、地中海向けカリフォルニア米 (1 等、碎米 4 %混入) である中粒種の価格は 1,100 ドル/トンと、前月より 550 ドル/トン下落し、2021 年 8 月以来の安値となった。

なお、10 月の国内農家出荷価格は、長粒種、中・短粒種いずれも前月からの変化はなく、新穀の供給量の増大見込みから、長粒種の価格は 15.0 ドル/cwt (330.7 ドル/トン)、中・短粒種の価格は 22.6 ドル/cwt (498.2 ドル/トン) と、いずれも 1 年前の史上最高水準 (年度平均価格でそれぞれ 16.8 ドル/cwt (370.38 ドル/トン)、29.4 ドル/cwt (648.16 ドル/トン)) を下回っている。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは 1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約 2 割

(単位: 百万精米トン)

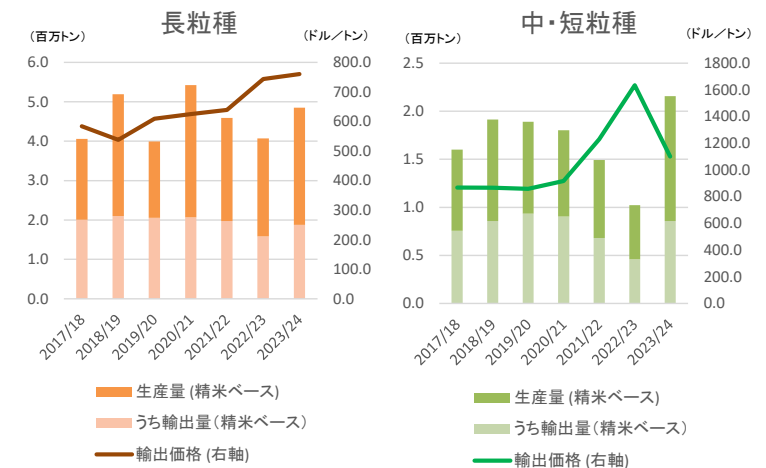
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年 8 月～24年 7 月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)
生産量	6.1	5.1	7.0	▲ 0.0	37.5
消費量	4.8	4.6	5.1	-	11.3
輸出量	2.7	2.0	2.7	0.0	33.8
輸入量	1.2	1.3	1.2	-	▲ 2.4
期末在庫量	1.3	1.0	1.3	▲ 0.0	38.5
期末在庫率	17.0%	14.4%	16.9%	▲ 0.6	2.5

(参考)

収穫面積(百万ha)	1.01	0.88	1.15	-	30.7
単収(もみt/ha)	8.64	8.28	8.67	▲ 0.02	4.7

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October, 2023)

図: 米国の長粒種と中・短粒種の生産量・輸出価格の推移



資料: USDA 「Rice Outlook」(2023.10.14) より。価格は年度内の平均価格。
なお、2023/24 年度は 2023 年 10 月の価格。

< インド > カリフ米の作付面積増加も、単収低下で減産見通し

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、8月の極度の降雨不足により、インドのコメ生産量の85%を占めるカリフ米の単収の減少予想を受け、132.0百万トンと、前年度比で2.9%減も、過去5年平均比では5.6%増の見込み。単収は、4.21もみトン/ヘクタールと、前年度比で1.6%減も、過去5年平均比では2.2%増の見込み。

9月は一部地域で記録的な降雨があったものの、他は概ね平年並みの降雨となり、また、9月末からモンスーンが徐々に後退し始め、北部及び西部は乾期が始まった。他方、北東部では降雨があり、コメの生育に好条件となったほか、乾季米の灌漑用水が補充された。10月中旬には、北東部及び南部以外の大部分が乾季に覆われ、コメの成熟や北部の早場米の収穫に好条件となった。

インド農業農民福祉省によると、カリフ米の作付済み面積は、9月29日時点で41.20百万ヘクタールと、降雨不足で作付けが遅れた前年同期(40.43百万ヘクタール)に比べ0.77百万ヘクタール上回り、5年平均(2017/18年度～2021/22年度)の39.95百万ヘクタールを約1.25百万ヘクタール上回る。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少予測から、前年度比0.4%減の115.5百万トンの見込み。なお、前年度に引き続き、政府の低所得世帯向け(約8億人が対象)にコメ等が配給される見込み(2022/23年度は58百万トンと消費量の半分に相当)。

2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量減少の予測に加え、輸出規制の強化から、前年度比16.7%減の17.5百万トンの見込み。ただ依然として世界第1位の輸出国で、世界の輸出量の約33%を占める。

なお、インドは、①2022年9月9日に、カリフ米の生産減少による国内価格高騰を抑制するため、碎米を輸出禁止とするとともに、中近東向け等に輸出されるバスマティ米(香り米)やパーボイルド米(蒸米)以外のコメに輸出税を賦課(20%)する輸出規制を発動。さらに、②上昇が続く国内価格の更なる抑制と国内向け供給量確保のため、本年7月20日にバスマティ米・パーボイルド米以外の精米の輸出を禁止。③8月25日には、パーボイルド米の精米に輸出税を賦課(20%。発動当初は10月15日までの予定だったが、その後2024年3月31日まで延長された)。また、④8月27日からバスマティ米の精米に最低輸出価格(1,200ドル/トン)を導入。

USDA「Rice Outlook」(2023.10.12)によれば、インド産米(碎米5%混入)の価格は、輸出規制強化後のデータが今のところ提示されていない。なお、規制前の7月時点の輸出価格は485ドル/トンと、アジア主要輸出国の中で最低水準の価格となっていた(P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)。

2023/24年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度比3.0%減の32.0百万トンの見込み。

コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ(小麦)の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	129.5	136.0	132.0 (133.0)	-	▲ 2.9	
消費量	110.5	116.0	115.5 (114.9)	-	▲ 0.4	
輸出量	22.0	21.0	17.5 (16.0)	-	▲ 16.7	
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	34.0	33.0	32.0 (33.6)	-	▲ 3.0	
期末在庫率	25.7%	24.1%	24.1% (25.7%)	-	▲ 0.0	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	46.28	47.70	47.00 (47.00)	-	▲ 1.5	
単収(もみt/ha)	4.20	4.28	4.21 (2.88)	-	▲ 1.6	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (12 October, 2023)
IGC 「Grain Market Report」 (21 September, 2023) (単収は精米t/ha)

表: インドのコメ輸出規制(2022年9月9日～)

対象品目	措置内容	発動日
全ての種類のコメの粳 (HS 1006 10)	輸出税 (20%)	2022.9.9～
全ての種類のコメの玄米 (HS 1006 20)	輸出税 (20%)	2022.9.9～
バスマティ米・精米 (HS1006 30 20)	12,000ルピー/t (日本円で約2万円/t) 1,200ドル/トンの最低 輸出価格導入	- 2023.8.27～
パーボイルド米・精米 (HS1006 30 10)	輸出税 (20%)	2023.8.25～ 2024.3.31
バスマティ米・パーボイルド米以外の精米 (HS1006 30 90)	輸出禁止	2023.7.20～
碎米 (HS1006 40 00)	輸出禁止	2022.9.9～

※食料安全保障上の理由でインド政府が認める場合は、輸出を許可。

※有機米は本措置の対象外。

資料: インド政府の公示等をもとに農林水産省にて作成。

< 中国 > 一期作稲で収穫開始、南部の二期作晩稲の成熟は平年並み

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度の干ばつから回復して収穫面積が増加し、史上最高の単収が見込まれることから、前年度比 2.1%増の 149.0 百万トンと、史上最高となる見込み。なお東北部では、政府の大豆作付け推進政策の反動を受け、コメの作付面積が減少傾向にある。

中国中央气象台（2023.10.2）によれば、9月末現在、①一期作稲は、大部分の生育状況が概ね平年並み。東北地区、長江中流域、西南地区の大部分は収穫段階にあり、長江下流域は出穂期から乳熟期の段階にあり、一部は成熟し始めている。②二期作晩稲は、長江下流域及び華南の大部分で、穂ばらみ期から乳熟期の段階にある。生育状況は、大部分が平年並みかそれより早い段階にあるが、湖南省、江西省、海南省などの一部の地域では平均より約 7 日遅れている。

なお、二期作早稲米の収穫は終了した。国家統計局の「2023 年早稲収量データ」（2023.8.23）によると、収穫面積は減少も、単収の増加から、総生産量は 28.3 百万もみトンと、前年から 0.8%増加した。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正されたものの、前年度比 1.9%減の 152.1 百万トンの見込み。背景として、競売で販売される飼料用古米の減少(2021 年及び 2022 年の半分以上の 18.0 百万トンの見込み)や、コメの国際価格の高騰等による輸入量減少、降雨過多で飼料用小麦が 9 月末まで大量に供給される見込み等があるとみられる。

2023/24 年度の輸入量は、インドの輸出規制の影響を受けたコメの国際価格高騰から、前月予測から 0.5 百万トン下方修正され、前年度比 31.5%減の 3.0 百万トンの見込み。中国は主に飼料用とうもろこしの代替としての碎米に加え、もち米や香米を輸入している。

中国海関統計によれば、2023 年 8 月の輸入量は 11.2 万トン（前年同月比 76.9%減）、1～8 月の輸入量は 201.8 万トン（前年同期比 56.8%減）となった。

なお、中国はこれまで、とうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の碎米をインド等から輸入してきたが、2022 年 9 月以降、インドの輸出禁止等により輸入量は減少している。

また、USDA によると、「一帯一路」政策への賛同国を拡大する目的から、同政策の関係国に対しコメの輸出促進を図っている。

コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは 3 割程度

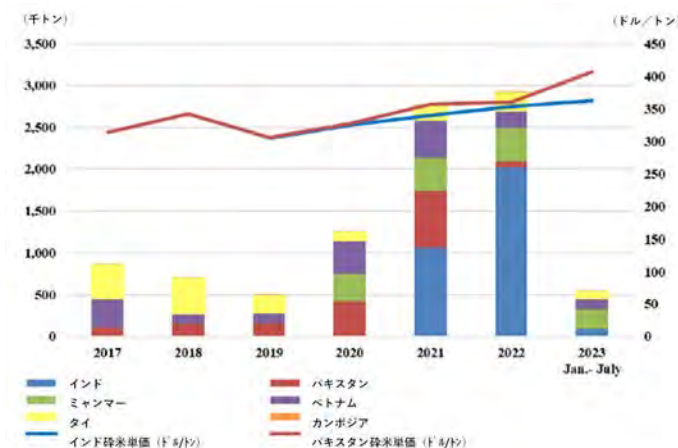
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	149.0	146.0	149.0 (148.9)	-	2.1
消 費 量	156.4	155.0	152.1 (151.0)	0.1	▲ 1.9
輸 出 量	2.1	1.7	2.0 (2.2)	-	14.9
輸 入 量	6.0	4.4	3.0 (3.8)	▲ 0.5	▲ 31.5
期末在庫量	113.0	106.6	104.5 (104.8)	▲ 0.6	▲ 2.0
期末在庫率	71.3%	68.0%	67.8% (68.4%)	▲ 0.4	▲ 0.2

(参考)

収穫面積(百万ha)	29.92	29.45	29.85 (29.45)	-	1.4
単収(もみt/ha)	7.11	7.08	7.13 (4.96)	-	0.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October, 2023)
IGC「Grain Market Report」(21 September, 2023) (単収は精米t/ha)

図： 中国の各国からの碎米輸入の推移
(2017-2023 年 7 月)



資料：USDA「Grain and Feed Update: China」(2023.10.5)より。

< タイ > 雨季米は干ばつで作付面積が前年度より減少、生育状況も不良

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変化はなく、本年5月の雨季の開始の遅れと、5～8月の降雨不足により、今後の乾季米向け灌漑用水の不足が見込まれることから、前年度比6.7%減の19.5百万トンの見込み。

2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、タイ政府による収穫面積予測の上方修正（11.07百万ヘクタールと史上最高となる見込み）等を受け、2021/22年度比5.0%増の20.9百万トンの見込み。

9月は、タイの大部分で過去30年の間で最も多い降水量となった。年間を通じて平年以下の降水量となっていた北部では土壌水分が改善され、灌漑用水が補充された。10月も降雨が続いており、北東部の遅植えの雨季米に概ね好条件となり、北部の乾季米用の灌漑用水が引き続き補充された。

アセアン食料安全保障情報システム(2023.10)によると、雨季米は現在、登熟期にある。干ばつの影響から、作付面積は前年度より1.45%減少する見込み。また、9月及び10月に多くの地域で豪雨があり、洪水が長引いたことから、北部、北東部、中部の作付面積のうち、約12.8万ヘクタールに影響があった。遅植えの雨季米以外は生育状況が悪く、単収・生産量とも平年比で減少する見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少見込みから、対前年度比5.9%減の8.0百万トンの見込み。

2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、2021/22年度比10.4%増の8.5百万トン。

タイ米輸出業者協会によれば、2023年1～8月の輸出量は、前年同期比10.4%増の527.4万トンとなった。政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大しているインドネシアは、前年同期の3.7万トンから大幅増の80.2万トン、検疫問題で7年間輸入を停止していたタイ産米の輸入を2022年に再開したイラクは68.3万トン（前年同期100.2万トン）のタイ米をそれぞれ輸入した。そのほか、南アフリカが55.4万トン（同50.1万トン）、米国は45.2万トン（同47.5万トン）のタイ米を輸入した。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.10.12）によれば、10月10日までの週のタイ産米（長粒、2等精米）の輸出価格は、価格上昇による買い控えやパーツ安等から、前月から59ドル/トン下落し、595ドル/トンとなった（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。

コメータイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

(単位：百万精米トン)						
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年1月～24年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	19.9	20.9	19.5 (21.1)	-	▲ 6.7	
消 費 量	12.7	12.7	12.5 (12.8)	-	▲ 1.6	
輸 出 量	7.7	8.5	8.0 (8.8)	-	▲ 5.9	
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-	
期末在庫量	3.5	3.3	2.3 (3.9)	-	▲ 28.9	
期末在庫率	17.3%	15.5%	11.4% (18.0%)	-	▲ 4.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	10.70	11.07	10.60 (10.85)	-	▲ 4.2	
単収(もみt/ha)	2.81	2.86	2.79 (1.86)	-	▲ 2.4	
資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(12 October, 2023) IGC「Grain Market Report」(21 September, 2023) (単収は精米t/ha)						

表：タイの国別輸出量

(単位：万トン)

国名		2022 年 1～8 月	2023 年 1～8 月	増減量
1	インドネシア	3.7	80.2	76.5
2	イラク	100.2	68.3	-31.9
3	南アフリカ	50.1	55.4	5.3
4	米国	47.5	45.2	-2.3
5	中国	39.3	23.5	-15.8
6	日本	18.4	21.7	3.3
7	マレーシア	7.9	19.0	11.1
8	カメルーン	7.9	15.7	7.9
9	セネガル	15.5	14.9	-0.7
10	バングラデシュ	0.0	11.5	11.5
計		478.0	527.4	49.5 (前年比10.4%増)

資料：タイ米輸出業者協会（2023.10）

< ベトナム > 北部の雨季米は収穫開始、南部の夏秋作（雨季米）は収穫終了

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が過去最高だった前年度の水準を維持する見込みから、前年度並みの 27.0 百万トンの見込み。なお、肥料価格の高騰や高収益作物等（果物・野菜・養殖）への転換等により、生産量は史上最高となった 2014/15 年度（28.2 百万トン）を境に、緩やかな低下傾向にある。

2022/23 年度の生産量は、前月予測から変更はなく、2021/22 年度比 1.1%増の 27.0 百万トンの見込み。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.10）によると、①北部では夏秋作（雨季米）が登熟期にあり、地域によっては収穫が始まった。9 月下旬に中部で豪雨とそれに伴う洪水があったため、単収は減少する見込み。②南部では、夏秋作（雨季米）の収穫が終了した。好天と高品種導入により、平均単収は 5.89 トン／ヘクタールと、前年度より 3.4%上昇する見込み。③南部の秋冬作（雨季米）は、登熟期から収穫期にある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、フィリピンからの輸入需要が引き続き堅調な見込みであることや、インドネシアからの追加需要が見込まれることから、前月予測より 0.1 百万トン上方修正された。しかし、精米の輸出需要に対する供給量が不足していること等から、前年度比 9.5%減の 7.6 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸出量も、フィリピンからの史上最高の輸入量の継続見込みとインドネシアから今秋に追加需要が見込まれることから、前月予測から 0.4 百万トン上方修正され、8.4 百万トンの見込み。

ベトナム関税総局によれば、2023 年 1～9 月の輸出量は、特に本年 3 月から 5 月までにかけて、主要輸出先国の需要が増大したことから、641.8 万トンと、前年同期（537.4 万トン）に比べ 19.4%増加した。主な輸出先国は、フィリピン（244.3 万トン）、インドネシア（88.4 万トン）、中国（85.9 万トン）、ガーナ（50.3 万トン）の順となっている。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.10.12）等によれば、ベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の 10 月 10 日までの週の価格は、前月の価格から 27 ドル／トン下落して 616 ドル／トン。背景には、最大の輸出先国であるフィリピン（ベトナムのコメ輸出の 9 割を占める）が、インフレ抑制のためにコメ流通価格の上限を設定（本年 8 月 31 日～10 月 3 日）したことで、輸入価格との差による損失を懸念したフィリピンの輸入業者がベトナム産米の買付契約をキャンセル・延期したこと等が指摘されている。

コメ・ベトナム

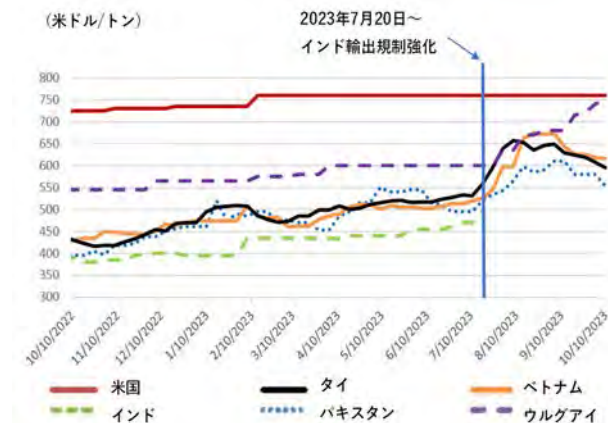
北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

(単位：百万精米トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年1月～24年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	26.7	27.0	27.0 (28.0)	-	-	
消 費 量	21.4	21.4	21.2 (21.7)	▲ 0.1	▲ 0.9	
輸 出 量	7.1	8.4	7.6 (7.8)	0.1	▲ 9.5	
輸 入 量	1.7	1.8	1.4 (1.1)	-	▲ 22.2	
期末在庫量	2.7	1.7	1.3 (2.0)	0.1	▲ 24.1	
期末在庫率	9.3%	5.6%	4.4% (6.8%)	0.4	▲ 1.2	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.10	7.16	7.16 (7.10)	-	-	
単収(もみt/ha)	6.01	6.03	6.03 (3.90)	-	-	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October, 2023)
IGC「Grain Market Report」(21 September, 2023) (単収は精米t/ha)

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料：USDA「Grain：World Markets and Trade」（2023.10.12）より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比  前月比 

・米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

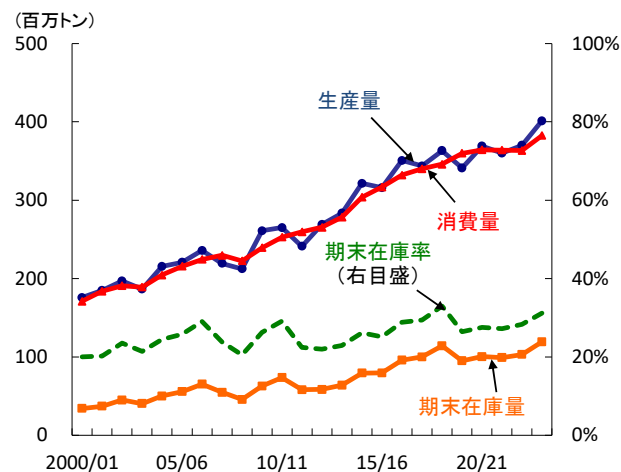
消費量 前年度比  前月比 

・インド等で下方修正されたものの、中国、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比  前月比 

・ブラジル等で上方修正されたものの、米国で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比  前月比 



資料：USDA「PS&D」（2023. 10. 12）をもとに農林水産省で作成

◎ 世界の大豆需給

（単位：百万トン）

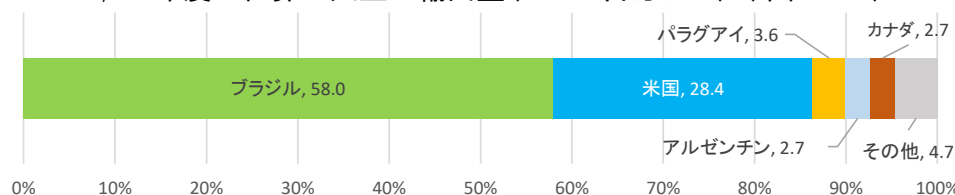
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	360.4	370.2	399.5	▲ 1.8	7.9
消費量	364.0	363.7	383.3	0.7	5.4
うち搾油用	314.5	312.6	328.5	0.8	5.1
輸出量	154.3	170.9	168.2	▲ 0.2	▲ 1.5
輸入量	156.6	167.0	165.8	▲ 0.2	▲ 0.8
期末在庫量	99.1	101.9	115.6	▲ 3.6	13.5
期末在庫率	27.2%	28.0%	30.2%	▲ 1.0	2.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 October 2023）

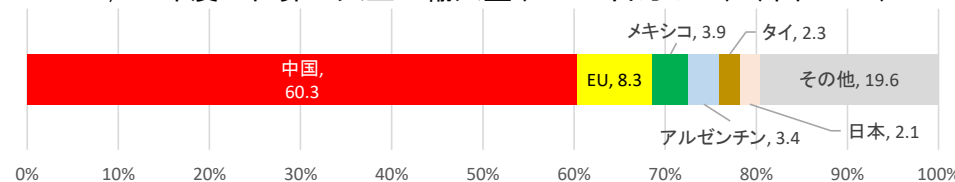
○ 2023/24 年度の世界の大豆の生産量 (399.5 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸出量 (168.2 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸入量 (165.8 百万トン) (単位：%)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 単収の引下げを受け、生産量は1.1百万トン下方修正

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、カンザス州等での単収の引下げから単収が前月予測から0.04トン/ヘクタール引き下げられたため、前月予測から1.1百万トン下方修正され、収穫面積の減少により前年度より3.9%減の111.7百万トンの見通し。

USDA「Crop Progress」(2023.10.16)によれば、主要18州における10月15日現在の落葉進捗率は97%と、前年度同期(95%)、過去5年平均(93%)をいずれも上回っている。さらに、収穫進捗率も62%と、前年度同期(60%)、過去5年平均(52%)を上回っている。他方で、作柄評価の「良～やや良」の比率は52%であり、前年同時期(57%)を下回っている。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、搾油需要増により前月予測から0.3百万トン上方修正され、バイオ燃料・飼料用需要増による搾油の収益改善の見通しから、前年度より5.2%増の66.1百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、生産量の下方修正による供給減により前月予測から1.1百万トン下方修正され、前年度より11.9%減の47.8百万トンの見込み。史上最高の豊作見通しとなったブラジル産と比べ相対的な価格競争力が落ちていることが要因とみられる。

USDAによれば、2023/24年度の期末在庫量は、前月予測からわずかに下方修正され、前年度より18.1%減の6.0百万トンとなる見込み。期末在庫率は5.3%で、引き続き低水準に留まる見通し。

USDAによれば、2023年9月の輸出量は231万トンと、前年度同時期の272万トンより15%減。内訳は中国(121万トン)、メキシコ(34万トン)、日本(16万トン)の順となっている。

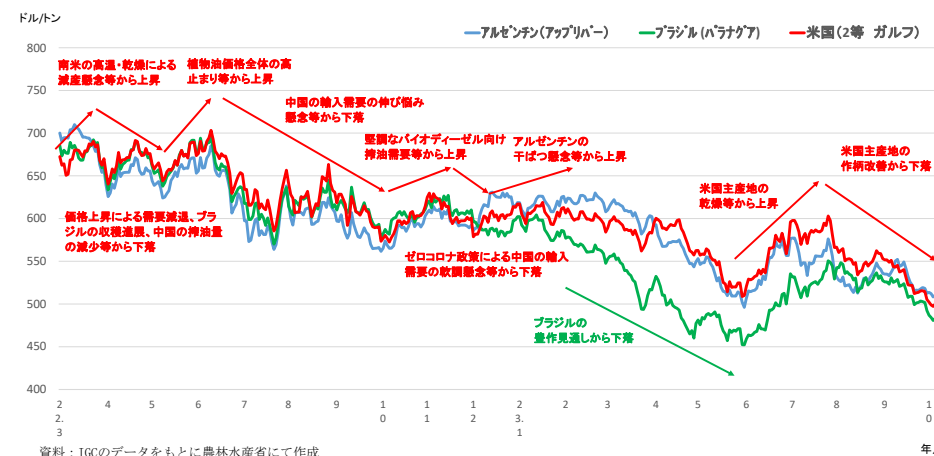
大豆－米国

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年9月～24年8月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	121.5	116.2	111.7	▲1.1	▲3.9
消費量	62.9	62.8	66.1	0.3	5.2
うち搾油用	60.0	60.2	62.6	0.3	4.0
輸出量	58.6	54.2	47.8	▲1.0	▲11.9
輸入量	0.4	0.7	0.8	－	22.4
期末在庫量	7.5	7.3	6.0	▲0.0	▲18.1
期末在庫率	6.1%	6.2%	5.3%	0.0	▲1.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	34.93	34.87	33.50	－	▲3.9
単収(t/ha)	3.48	3.33	3.33	▲0.04	－

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2023)

図：米国、ブラジル、アルゼンチン大豆輸出価格（FOB）の推移



＜ ブラジル ＞ 2023/24 年度の生産量 (CONAB) は前年度より 4.8%増で史上最高

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 10 月以降作付けが開始されている 2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、作付面積が史上最高となる見通しから、前年度より 4.5%増の 163.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社 (CONAB) の月例報告 (2023.10.10) によれば、2023/24 年度の実産量は、前年度より 4.8%増の 162.0 百万トンと史上最高の見通し。生産量の増加は、とうもろこし等から収益性が高い大豆に作付けがシフトすることによるものとみられる。

USDA によれば、10 月 13 日現在、主要生産州の中西部のマット・グロッソ州の作付進捗率は 35%と、前年度同期 (41%) を下回ったものの、過去 5 年平均 (28%) を上回っている。10 月前半の高温で土壌水分が低下したため、大豆の発芽には更なる降雨が必要とされている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料向けの大豆粕需要が増加することから、前年度より 5.1%増の 59.7 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、米国産の実産量引下げを受けた需要増を受け、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、生産量が 2 年連続で史上最高を更新し、価格競争力が高まる見込みから、前年度より 2.1%増の 97.5 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023 年 1 ～ 9 月の輸出量は 87.2 百万トンで、前年同期 (70.8 百万トン) に比べ 23.1%増となっている。輸出先は、中国 (61.7 百万トン)、アルゼンチン (3.8 百万トン)、スペイン (2.7 百万トン) の順。堅調な中国向け輸出に加え、干ばつにより減産したアルゼンチンへの搾油用需要を満たすための輸出が大幅に増加した。

2023 年 6 月、北部のマラニョン州イタキ北部港とサンパウロ州サントス港を結ぶ南北鉄道が開通した。南北鉄道が稼働することで、最大生産州のマット・グロッソ州等の内陸部で生産された大豆・とうもろこしを輸出港まで効率的に輸送でき、輸出のボトルネックを回避する一助になることが期待されている。

なお、「OIL WORLD Weekly」(2023.10.6) によれば、史上最高の輸出量は、内陸輸送と輸出港施設のキャパシティに負荷をかけており、一部の港で積み荷を待つ船の長い列が見られる。

大豆ーブラジル

(単位: 百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	130.5	156.0	163.0 (160.0)	-	4.5
消 費 量	54.0	56.8	59.7 (59.6)	-	5.1
うち搾油用	50.7	53.0	55.8 (56.3)	-	5.2
輸 出 量	79.1	95.5	97.5 (98.3)	0.5	2.1
輸 入 量	0.5	0.2	0.5 (0.3)	-	200.0
期末在庫量	27.6	31.5	37.7 (6.9)	▲ 1.0	19.9
期末在庫率	20.7%	20.7%	24.0% (4.4%)	▲ 0.7	3.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	41.60	43.90	45.60 (41.49)	-	3.9
単収(t/ha)	3.14	3.55	3.57 (3.86)	-	0.6

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2023)
IGC「Grain Market Report」(21 September 2023)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2023/24年度の実作付けは、2023年9月以降、順次開始。
2024年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培。

2023/24年度	2023年												2024年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等 作付 4.1(百万ha)												収穫 26.2(百万t) → 収穫夏冬作計 119.4百万t								
冬とうもろこし	作付面積夏冬作計 21.2百万ha												作付 17.0(百万ha) → 収穫 93.2(百万t)								
大豆	マット・グロッソ州、パラナ州等 作付 45.2(百万ha)												↑ 大豆収穫後の一部圃場で冬とうもろこし作付け → 収穫 162.0(百万t)								

資料: CONAB穀物レポート (2023. 10. 10)

< アルゼンチン > 2022/23 年度は、干ばつによる減産を受け輸入が史上最高に

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 11 月以降作付けが開始される 2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥の影響を強く受けた前年度から回復する見通しから、92.0%増の 48.0 百万トンの見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所の週報（2023.6.29）によれば、収穫が終了した 2022/23 年度の実産量は 21.0 百万トンと、過去 5 年平均（45.0 百万トン）より 53%減の低水準となった。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、増産に伴い搾油量が回復することから、前年度比 14.4%増の 41.8 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内生産量の増加に伴い輸入需要が減少することから、前年度より 38.0%減の 5.7 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸入量は、前回予測からの変更はなく、干ばつによる減産で代替需要が増加したことにより、9.2 百万トンで史上最高の見込み。アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 1～8 月の輸入量は 817.2 万トンで、前年同時期（284.3 万トン）の 2.9 倍。

2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、干ばつにより減産し価格競争力が弱まった前年度から生産量が回復する見込みから、前年度より 12.2%増の 4.6 百万トンの見込み。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆最大 33%、大豆油及び大豆粕 31%と設定。2022 年 3 月に、大豆油及び大豆粕の輸出税について 2022 年末まで 2%引き上げたが、2023 年 1 月からは 31%に戻している。

なお、アルゼンチン政府は、8 月 28 日、干ばつで原料が不足している加工工場が稼働できるよう、大豆の外貨決済の新たなスキーム「75/25」を発表した。75%は公式為替レート（1 ドル＝350 ペソ）が適用され、残りの 25%は優良スワップレート（大幅なペソ安のレート）で大豆の輸入に充てることができる（適用期間は当初 9 月中としていたが、10 月 25 日まで延長された）。

大豆－アルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年10月～24年9月）			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	43.9	25.0	48.0 (44.0)	－	92.0	
消 費 量	46.0	36.5	41.8 (42.8)	－	14.4	
うち搾油用	38.8	30.3	34.5 (39.0)	－	14.0	
輸 出 量	2.9	4.1	4.6 (5.1)	－	12.2	
輸 入 量	3.8	9.2	5.7 (5.5)	－	▲ 38.0	
期末在庫量	23.9	17.5	24.9 (3.6)	▲ 0.1	42.0	
期末在庫率	48.9%	43.1%	53.6% (7.5%)	▲ 0.2	10.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	15.90	14.40	16.40 (15.87)	－	13.9	
単収(t/ha)	2.76	1.74	2.93 (2.77)	－	68.4	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 October 2023)
IGC「Grain Market Report」(21 September 2023)

表：アルゼンチン大豆の輸入量、輸入先国
（7、8 月は輸入ペースが落ちたものの、
対前年度同時期比で輸入量が大きく増加）

国名	2022/23年度 (2023年 1～8 月)		2021/22年度 (2022年 1～8 月)	対前年度 同時期比 (%)
	輸入量 (万t)	シェア (%)	輸入量 (万t)	
ブラジル	373.1	45.7	22.5	1,558.4
パラグアイ	410.8	50.3	151.0	172.1
ボリビア	27.7	3.4	31.3	-11.5
ウルグアイ	3.0	0.4	72.9	-95.9
その他	2.6	0.3	6.6	-60.6
計	817.2	100.0	284.3	187.5

資料：アルゼンチン国家統計局（INDEC）のデータをもとに
農林水産省で作成。

＜ 中国 ＞ 2023/24 年度の生産量・消費量は史上最高

【生産・生育状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、単収が減少するものの、収穫面積が増加することから、全体として前年度より 1.1%増の 20.5 百万トンで史上最高の見込み。

中国政府は、大豆の作付け拡大に向けた取組等を引き続き進めている。
なお、9 月末現在、主産地の東北地区の黒竜江省等では子実肥大期から成熟期を迎えており、一部地域では収穫が開始されているとみられる。

USDA によれば、9 月、黒竜江省等の東北地区において平年並みの降雨があり、大豆の成熟に好影響を与える見込み。10 月上旬、東北地区では夜間の気温が氷点下となったものの、作物の大半は既に成熟期にあったため、霜の影響は小さいとみられる。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、搾油需要が前月予測より増加する見通しから前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、国内の大豆粕及び食料の需要が増加することにより、前年度より 3.7%増の 120.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 2.0%減の 100.0 百万トンと高水準を維持している。

農業農村部によれば、2023 年 1～8 月の輸入量は、前年同時期より 8.0%増の 7,166.9 万トン。内訳は、ブラジル（4,799.6 万トン）、米国（1,997.3 万トン）、アルゼンチン（154.7 万トン）の順となっている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 8 月号」によれば、8 月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、前月（5,120 元/トン）から下落し、5,060 元/トンとなった。8 月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）も、前月（5,760 元/トン）から下落し、5,740 元/トンとなった。東北地区の大豆の水分状態は平年並みからやや良好で、降雨過多の生産への影響が比較的小さいこともあり、国内価格は横ばいで推移している。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、消費量の引上げ等から前月予測から 2.0 百万トン下方修正され、前年度より 1.1%増の 37.2 百万トンで史上最高の見込み。2023/24 年度の期末在庫率は、前月予測から 1.9 ポイント下方修正され、前年度より 0.8 ポイント減の 31.0%となる見込み。

大豆－中国

(単位：百万トン)						
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	16.4	20.3	20.5 (21.5)	-	1.1	
消費量	108.4	115.7	120.0 (119.4)	1.0	3.7	
うち搾油用	87.9	94.0	97.0 (99.0)	1.0	3.2	
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-	
輸 入 量	91.6	102.0	100.0 (99.5)	-	▲ 2.0	
期末在庫量	30.3	36.8	37.2 (36.4)	▲ 2.0	1.1	
期末在庫率	27.9%	31.8%	31.0% (30.4%)	▲ 1.9	▲ 0.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	8.42	10.24	10.45 (8.40)	-	2.1	
単収(t/ha)	1.95	1.98	1.96 (1.95)	-	▲ 1.0	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (12 October 2023)
IGC 「Grain Market Report」 (21 September 2023)

表：中国の大豆輸入量と輸入先国

2023年 8 月			2023年 1 月～2023年 8 月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	908.6	97.1	ブラジル	4,799.6	67.0
ロシア	12.1	1.3	米国	1,997.3	27.9
米国	12.0	1.3	アルゼンチン	154.7	2.2
エチオピア	0.9	0.1	カナダ	94	1.3
カナダ	0.9	0.1	ロシア	92.7	1.3
タンザニア	0.8	0.1	エチオピア	8.8	0.1
その他	0.9	0.1	その他	19.8	0.1
計	936.2	100	計	7,166.9	100

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 作付面積の増加により、生産量は前年度から 2.4%増

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2023.10.23）によれば、2023/24 年度（23年8月～24年7月）の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 2.4%増の 6.7 百万トン（6.7）の見込み。単収が 2.95 トン/ヘクタールと、高水準の単収だった前年度より低下するものの、収穫面積が 2.28 百万ヘクタールと前年度より 7.6%増と大幅に増加することによる。

AAFC によれば、10 月 23 日現在、主産地のカナダ東部では、大豆の収穫が半分以上終了している。温暖な気候と良好な水分状況により生育状況は良好だった。

カナダの大豆生産は、小麦や菜種と異なり、東部のオンタリオ州が主産地で、生産量の半分以上のシェアを占める。このほか、オンタリオ州に隣接するマニトバ州、ケベック州でも生産されている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度（23年8月～24年7月）の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 2.5%増の 2.7 百万トン（2.7）の見込み。バイオ燃料需要増による搾油の収益改善が見込まれていることによる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度（23年8月～24年7月）の輸出量は、前月予測からの変更はなく、増産による輸出余力の増大を受けて、前年度より 7.3%増の 4.6 百万トン（4.6）の見込み。

カナダ穀物委員会（Canadian Grain Commission）によれば、2022/23 年度（2022 年 8 月～2023 年 7 月）の年間の輸出量は 311.6 万トンで、前年度（287.0 万トン）を上回っている。国別では、中国向け（128.8 万トン）が 41%を占め、続いてイラン（49.0 万トン）、アルジェリア（36.5 万トン）、イタリア（25.1 万トン）の順となっている。

なお、カナダ産大豆は、主産地が小麦や菜種と異なりカナダ東部のため、カナダ産の主要な輸送ルートは、五大湖を通過してパナマ運河から東アジアに輸出されるルートとなっている。

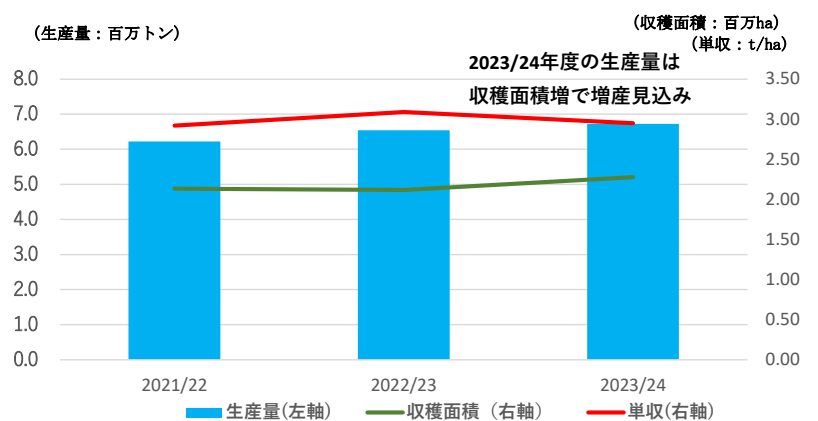
AAFC によれば、2023/24 年度（23年8月～24年7月）の期末在庫量は、供給増により前月予測から 2.5 万トン上方修正されたものの、輸出増により前年度から 13.6%減の 0.3 百万トンの見込み。

大豆－カナダ

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年8月～24年7月)			
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	6.2	6.5	6.7 (6.7)	-	2.4	
消 費 量	2.3	2.6	2.7 (2.4)	-	2.5	
うち搾油用	1.8	1.8	1.9 (1.9)	-	6.4	
輸 出 量	4.3	4.2	4.6 (4.8)	-	7.3	
輸 入 量	0.5	0.5	0.5 (0.5)	-	-	
期末在庫量	0.4	0.6	0.6 (0.3)	-	-	
期末在庫率	6.5%	9.5%	9.0% (4.5%)	-	▲ 0.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	2.08	2.12	2.25 (2.28)	-	6.1	
単収(t/ha)	2.99	3.09	2.98 (2.95)	-	▲ 3.6	

資料：USDA「PS&D」
「World Agricultural Production」(12 October 2023)
AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(23 October 2023)

図：カナダの直近3か年の生産量等の推移



資料：AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2023.10.23)をもとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2023/24年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	23年6月～24年5月	23年9月～24年8月	23年8月～24年7月	23年9月～24年8月
カナダ	23年8月～24年7月			23年8月～24年7月
豪州	23年10月～24年9月		24年3月～25年2月	
EU	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
中国	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月
ロシア	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		23年9月～24年8月
ウクライナ	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
ブラジル		24年3月～25年2月	24年4月～25年3月	23年10月～24年9月
アルゼンチン	23年12月～24年11月	24年3月～25年2月		23年10月～24年9月
タイ			24年1月～12月	
インド	23年4月～24年3月		23年10月～24年9月	
ベトナム			24年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2023/24年度は、米国の小麦では2023年6月～2024年5月、ブラジルのとうもろこしでは2024年3月～2025年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

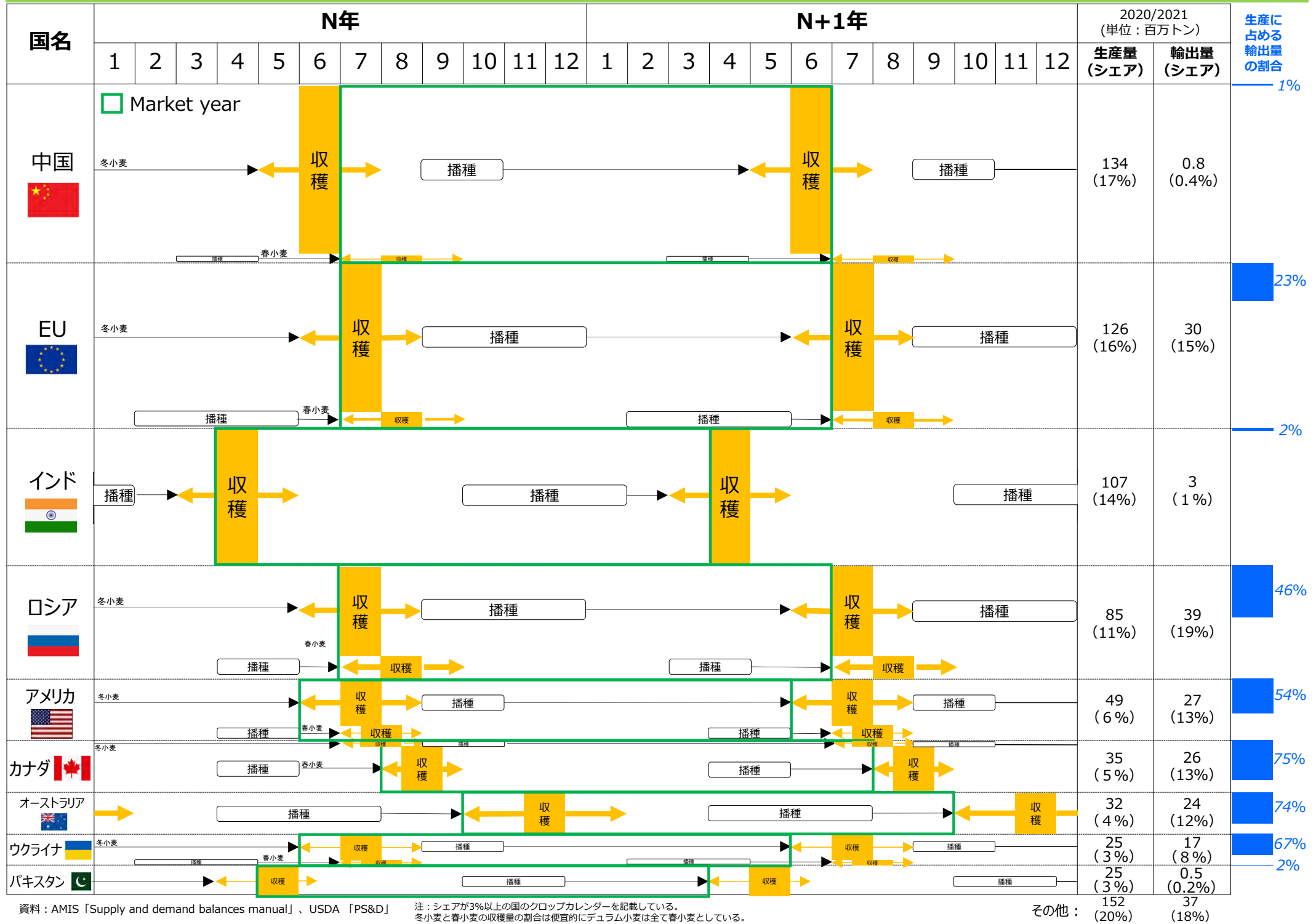
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏 : $^{\circ}\text{C} = (^{\circ}\text{F} - 32) \div 1.8$			

(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)

主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



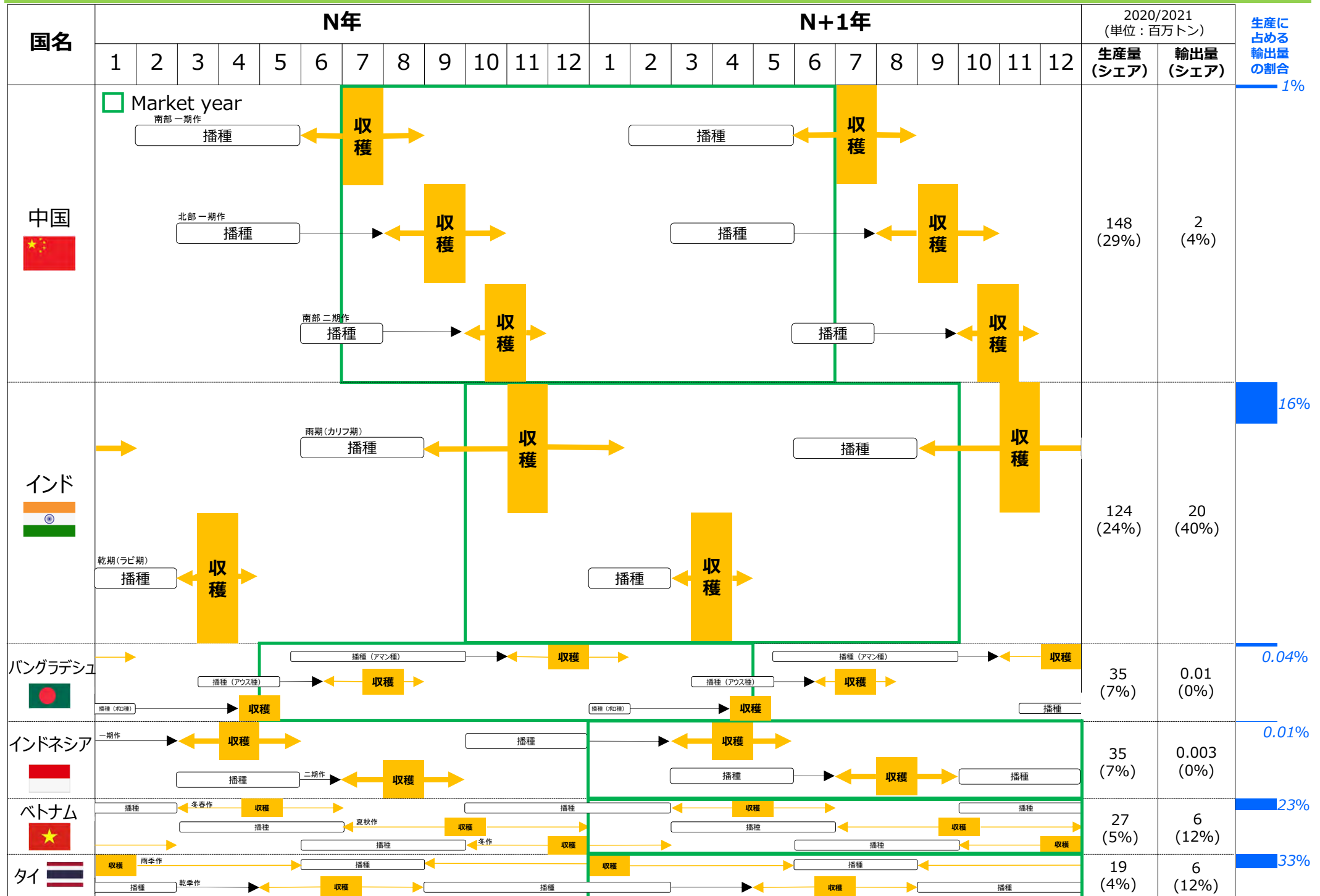
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。
冬小麦と春小麦の収穫量の割合は便宜的にデュラム小麦は全て春小麦としている。

その他：

主要生産国のクロップカレンダー(米)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

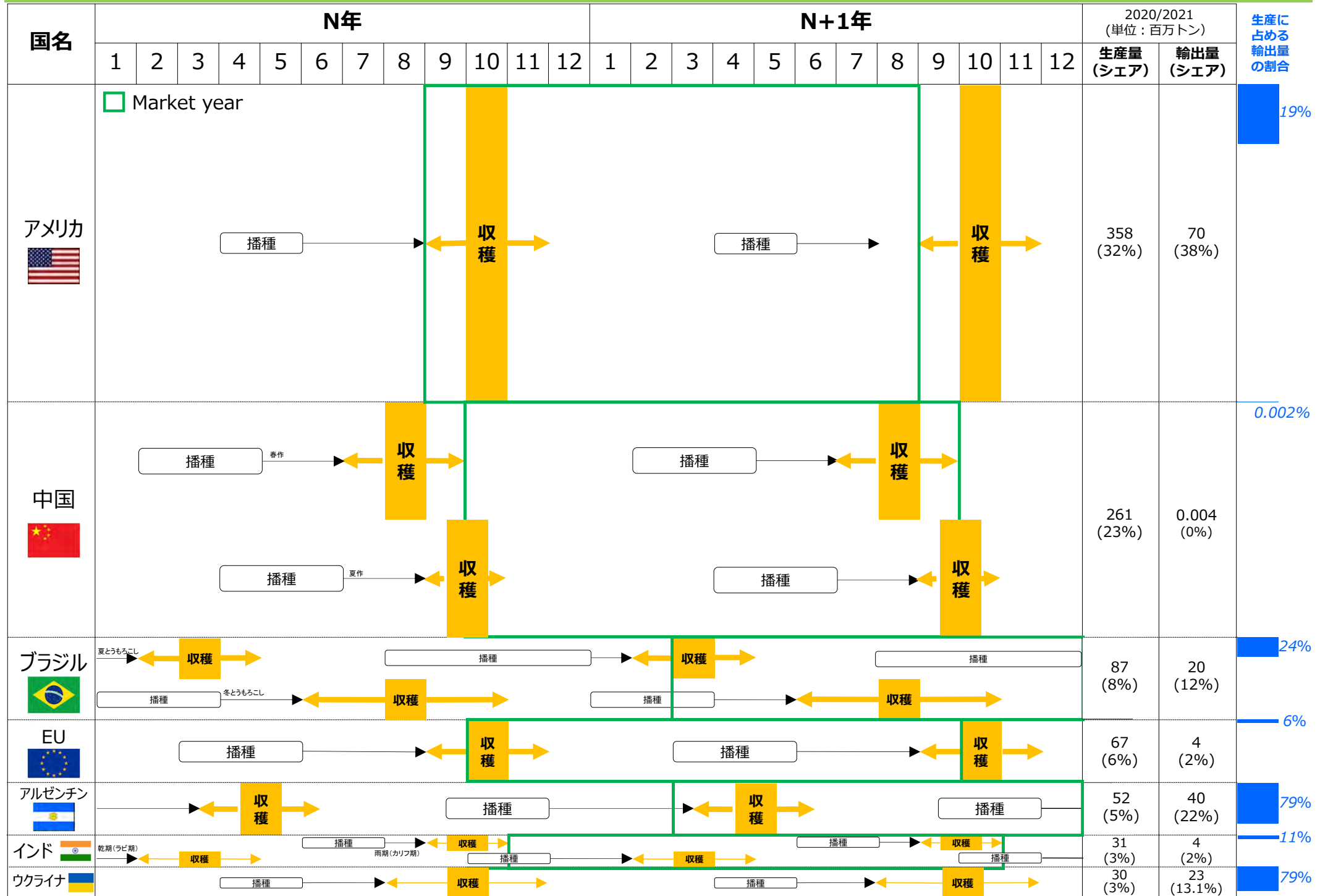
その他：

121
(24%)

16
(32%)

主要生産国のクロープカレンダー(とうもろこし)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



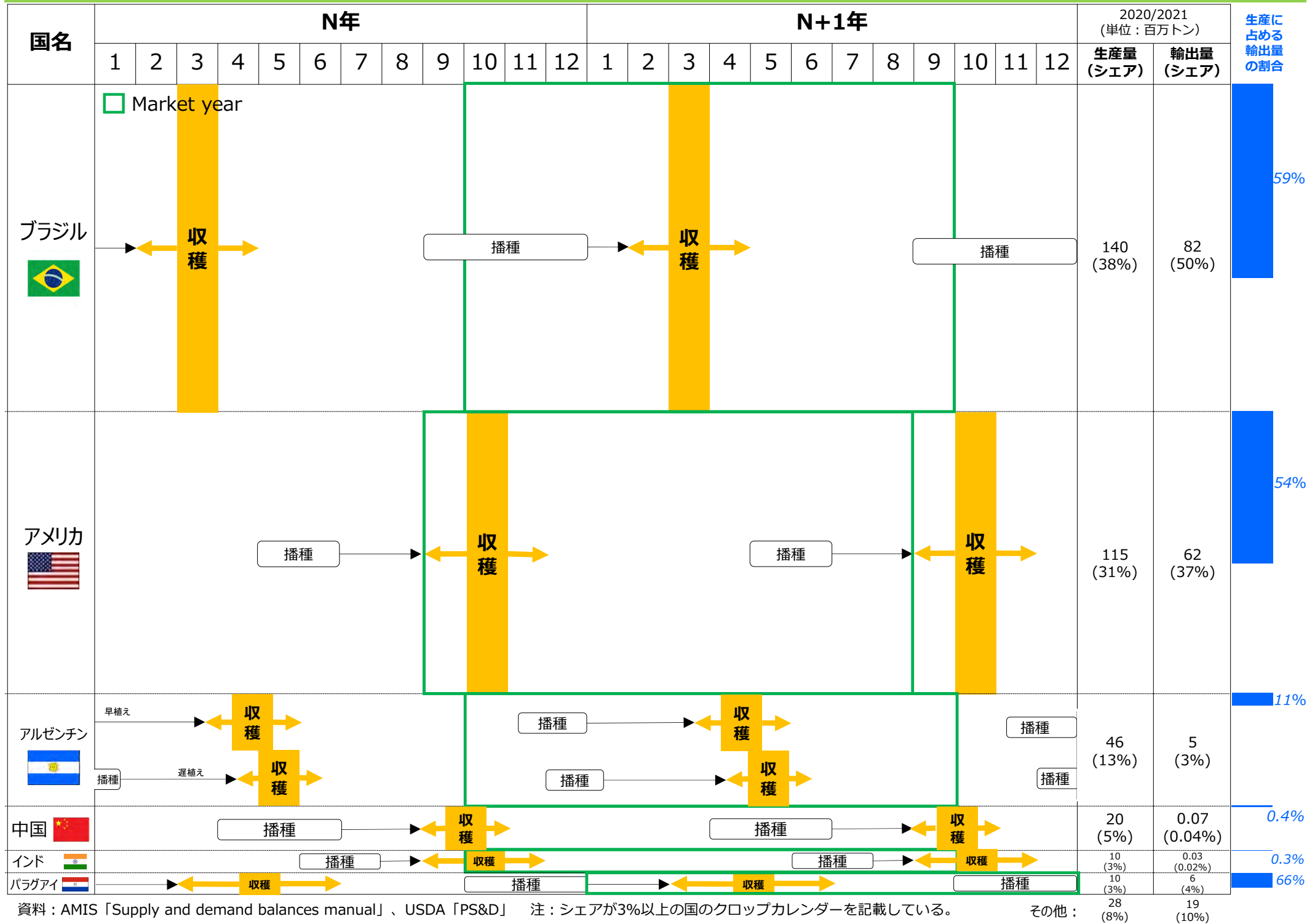
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。

その他：242 (19%) 21 (11%)

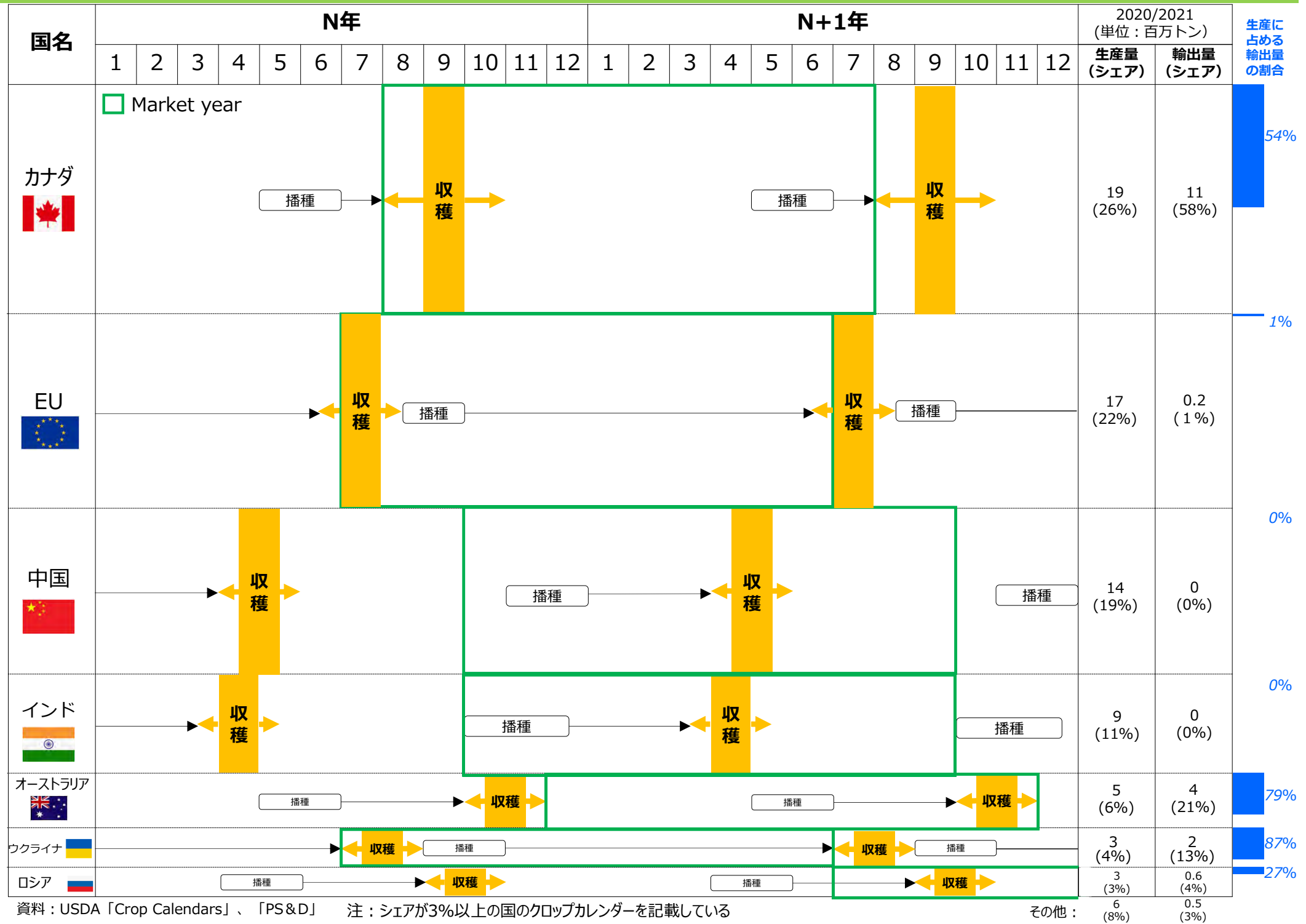
主要生産国のクロップカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロップカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2023 年 10 月中旬までに発表した情報を引用しています。（最新年度 2023/24 年度です）

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大
学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、
その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
ウクライナ情勢の生産・貿易への影響
中国の需要・輸入動向
世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響
中長期（10 年先）、超長期（30 年先）的な食料需給見通し
- 7 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。



https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html